

は何人も認め居れり。されば人と人とは此の潜在意識に由て互に相影響する所甚だ大ならざるべからず。甲の人格の内容は、乙の人格の内容と接觸し、其の知れる所にても相交通し交換し居ることなるが、更に互に知らざる陰にて、甲のは乙に入り、乙のは甲に入り行きつゝあるを思はざるを得ず。然も電氣は高壓の方が必ず低壓の方に注入するが如く、水は高所の方が低所の方へ必ず落ち行くが如く、人格も偉大なるもの内容が小なるもの内へ注ぎ入るなり。感化といふは即ち是にて、大人小人相交はるときは、大人の人格の内容は、知らざる間に小なる人の人格内に入り行き、小なる人は次第に隠れたる所に自己の人格を大人格の内容にて浸され、其が次第に意識にも上るやうになり、自ら大いなることを思ひ、大なることを志すに至り、終に小さき思想を棄て、大いなる生活に移る。彼は茲に於て感化に由て人格の内容一變したるなり。されば人格には透化といふことあり。甲の人格の内容は乙の人格に入り、乙は其の乙たるを失はずして、而して其の人格は甲の人格の内容と同じきに至るは實際に於て見又理に於て考へらるゝ所なり。

耶穌基督の人格内容は此の理を以て思ふべし。耶穌の人格の形式は飽くまでナザレ

の耶穌ならん。マリアの子ならん。然れども其の内容は人性の極致、神性にして、而して神自身の内容なり。ウィリアム・サンデーは其の原著(一九一〇年)『古代及び近世の基督論』に於て、潜在意識の事實を適用して、基督の神性を論せり。基督は精神の意識域外に於て無限の神なれば、茲に耶穌の獨特なる意識生活を起すに至りたりと言ふ(W. Sanday, *Christologies Ancient and Modern*)。之に依れば基督の人格の上層は人にして其の深き所は神也。此の潜在の神性が人性の狭路に依て自己を人的の表彰にて顯はす也。然れども斯の如き途に潜在意識の理を適用して基督論を立つるは實は正鵠を失し居れり。是にてはサンデー博士が苦心したる基督の人格の神なるや人なるやの問題は依然として不解決に残れり。其の最も著しき不理の點を言へば、一には基督の人格をかくして説明せば、他の人の人格も同じ説明を用ひらるゝを得るなり。基督も人の人格を有したり、我等も人の人格を有す、基督の意識域外の自己が神ならば、吾人の域外自己も神と謂はれ得べし。二には基督の意識域外が神なればとて、其は基督を少しも基督とせざるなり。元來人の人格の大なるは其の現はれて活動する所の大なる故にあり。若し意識域外に如何に大なる自己ありとも、其が活作用をなし居らずば小

人格なり。米國のバイバーや、伊太利のユーサビオ・バラディノなどいふ女たちは、其の意識域外には随分偉大なる自己を有し、失神状態の中には其が顯はれ來るを見れども、然も彼等は卑賤無能の老嫗たるを免れざるなり。凡て人格の品性は意識的自己の中の内容なり。悪人が善となるも他人の善良なる感化や、之に由る意識が、尙域外に在りて隠れ、唯だ山下水のたぎつ如き間は未だ善人にはあらず。是等の善良なる要素がいよいよ域内に入り、舊き自己を棄て、善良なる意志を動かすに至りて始めて善人なり。基督は其の品性の中に神ありたるなり。故に基督の尊く美はしき所は域内自己が神なるにあり。耶穌はたとひ自ら神の内性を有すと自覺せざりしとしても、彼の神の子たる所、神を活現したる所は、其の顯在の意識内に在り、其の第一人格内に在り。此故にサンディ博士の説明は當らざるなり。

然れども耶穌の人格の内性は神の内性なり。耶穌の人格は人の子の人格なれども、神は其の内性を以て、耶穌の人格の内面を透徹せり。人間と人間とさへ、互に交はりて意氣投合すれば、一の内性は全く他の内性に入り了る。友人と友人の間初は或は調子合はざらんも、親み加はれば同化して全然一心となり、一が爲さんとすることは他

も爲さんとし、他が避けんとする事は一も避けんとするに至る。決して言語を以て相戒め、顔色を以て相示すを要せざるなり。親子の間は此の關係の最も切なるもの。親が子を受すること切なれば、親の心は子の心となる。親は特に子に教訓せずとも、親の名譽とする事は子も名譽とし、子の恥づることをば親も恥づ。親が物に感動すれば子も同じ様に感動し、親人を受すれば子の心動いてまた人を受す。此れ即ち人格と人格の合一なり。神と耶穌との間即ち是なり。神は耶穌を愛し、耶穌を聖別し、耶穌と共に在り、耶穌の外、耶穌の内に活動せり。神の此の活動は耶穌の人格の内部に入りて、全く耶穌を透徹し了れり。耶穌は全然神と合一せり。耶穌の爲す所は神の爲す所、耶穌の欲する所は神の欲する所、神人を受して助けんとすれば、其の心直ちに耶穌の内に動きて人を愛し人を助く。神の心人のために苦痛を忍べば、其の心そのまゝ耶穌の内に活動して十字架となれり。

此れ神の顯現にあらずや。直接顯現に非ずや。耶穌の人を受するは神が人を受するなり。耶穌の義の品性は神の品性なり。我等耶穌に愛せらるゝは神に愛せらるゝなり。耶穌に救はるゝは神に救はるゝなり。耶穌と合一するは神と合一するなり。神が自己

の内面を顯現する之よりも直接のものあるべからず。之よりも有力のものあるべからざるなり。

基督の弟子等は耶穌に於ける此の顯現を見、感嘆讚美措く所を知らざりき。使徒パウロは獄中より送れる書翰に於て、基督は人の見ることを得ざる神の形にして、萬の造られし物の先に生れし者なり、そは彼に由て萬物は造られたり、天に在るもの地上に在るもの、人の見ることを得るもの、見ることを得ざるもの、或は位ある者、或は主たる者、或は政を執る者、或は權威ある者、萬物彼に由て造られたり、且つ其の造られたるは彼がためなり、彼は萬物より先に在り、萬物彼に由て存つことを得るなり、教會は彼の身體にして彼は其の首なり、彼は元始にして、凡ての事に付き長とならん爲に、死の中より首に生れし者なり、そは父凡ての徳を以て彼に満たしめ、其の十字架の血によりて平和をなし、萬物即ち地上に在るもの天に在る者をして、彼によりて己と和がしむる事は、其の聖旨に適ふ事なればなりと言ひ(哥羅西一、二十)、基督は神の形にて居りしかども、自ら其の神と等しくある所の事を棄て難き事と思はず、反つて己を虚うし、僕の貌を取りて人の如くなれり、既に人の如き形式にて現はれ、己を卑く

し、死に至るまで順ひ、十字架の死をさへ受くるに至れり、此故に神は甚だしく彼を崇めて、諸の名に優る名を之に與へたまへりと言ひ(腓立比二、九)、夫れ神の充ち足れる徳は悉く形をなして基督に住めりと言ひ(哥羅西二、九)、神が世々の先より定め給ひし旨は我等の主耶穌基督に由りて成就せりと言へり(以弗所三、十一)。彼は基督は天上の主にして、永遠より神と共に在り、人を救はんために世に降り、神の心を行ひ神の徳を顯はすと信せしなり。又曰く今猶太傳來の律法の外に、神の人を義とし給ふことは顯はれて、律法と預言者とは之を證明せり、即ち神は耶穌基督を信するに由りて、其義を凡ての信者に賜ふて區別なし(羅馬三、二)、基督は我等の尙罪人たる時我等のために死に給へり、神は之に頼りて其の愛を顯はし給ふ(羅馬五、六)。基督が十字架にかゝるに至りしは、神の人を義とし給ふ新しき途の顯現、又神の愛の顯現なりと信せしなり。希伯來書の著者は其の書の冒頭に、昔は神多くの區別をなし、多くの方を以て、預言者により列祖等に告げ給ひしが、此の末の日には其子によりて我等に告げ給へり、神は彼を立て、萬物の嗣とし、且つ彼を以て諸の世界を造りたり、彼は神の榮の光輝、其の質の眞像にて、己が權能の言を以て萬物を扶持し、我等の罪の淨めをなして、上天に在す威光の右に座

しぬと言ひ(一三二)、約翰傳の著者は、基督は神の顯はれたる『ロゴス』(言)なりといふ信仰を以て全篇を行ひ、基督は太初より神と偕に在りて神なり、萬物之によりて造らる、此の『ロゴス』肉體となりて地に入りたるもの耶穌なり、故に耶穌の言ふ所行ふ所は皆な神の言ふ所行ふ所なりといふ思想を以て、耶穌の一代記を終始せり。約翰傳の耶穌は常に我は天に在す我父の事業を行ふと言ひ(四ノ三四、五ノ十九、七ノ十六、八)。自己の爲す所は自ら爲すに非ず、天父自己の内に在て爲すなりと言ひ(十二ノ四九、十)。我と父とは一なりと言へり(二十ノ三、十四ノ十、十四)。聖書の中より此の思想を引き出ださば、殆どは、てもなかるべし。即ち知る基督教徒は極めて初より耶穌は神の直接の顯現なることを確實に信じ、此の信仰を礎として基督教を築き上げたものなることを。

耶穌自身に自己は神の直接顯現なりといふ意識ありしや否や。余は思ふ、此は然れども最大重要の問題に非ず。何となれば尊ぶべきは事實にして自覺の有無に非ず。自覺のみは所謂耽溺者流又は不健全者流も有するなり。唯だ其が價なきは自覺のみありて事實伴はざるがためなり。然るに基督の神の直接顯現たることは、其の事實の上より謂はれたるにして、基督が自ら之を宣言し、自ら薦めたるが故には非ず。茲を

以て却つて價あり。基督に此の自覺ありしやは極めて不明瞭の問題なり。何となれば此れ全然基督内部のことにして、他の者の窺ひ知るべからざる所にあるものなればなり。唯だ基督の言行の端に徴して、自覺ありて發せらるべきものか、自覺なくして發せらるべきものかを考へ、之を推定するに外ならず。同觀福音書にて直接耶穌が自己の神の顯現たる意識を發表したる言行を見るは難事なり。

然れども大體より耶穌の生活を觀れば耶穌には此の意識ありたらんと思はれ、無かるべからずと思はるゝなり。先づ茲にて吾人の心頭に上り來るは、耶穌には『メシヤ』の自覺ありしや否やてふ問題なり。之にも種々の意見あり。耶穌は其の奇蹟を行ふ毎に、何時も人々を戒めて之を人に告ぐるなかれと固く禁じたり。此れ『メシヤ』と觀られんことを恐れてなり。彼は又何故我を善きと言ふや、一人の外に善き者はなし、即ち神なりと言へり(馬可十ノ十七、馬太十九ノ十七、路加十八ノ十九)。ペテロが汝は『キリスト』なりと言ひし時には、之を戒めて我事を誰にも告ぐる勿れと言へり(馬可八ノ二九、三)。彼は又人の子の來るも人を役するため非ず、反つて多くの人に役せられ、且つ多くの人に代り其の生命を與へて贖とならん爲なりと言へり(馬可十ノ四五、馬太二十ノ二八)。凡て己れに付て理想し豫期せる生活及び

最後、當時の思想が『メシヤ』に歸したる者と全く表裏し、自己も常に『メシヤ』として見られんことを恐れしが如し。茲を以てウレーデ Wrede の如き學者は耶穌には『メシヤ』の自覺なかりし、彼は『メシヤ』として來ることを言はざりし、『メシヤ』觀はマルコ(馬可)の發明なり。マルコを代表とせる當時の基督社會は、其の教義的思想を以て、歴史的の事實を化したるなりと論せり。一面より見れば耶穌には『メシヤ』の自覺なかりしが如し。ストラウスの Strauss の如きは、耶穌初は此の自覺なかりしも、周囲の人民が彼を『メシヤ』とするを以て、次第に其の心中に此の自覺成長せしならんと論せり。斯く耶穌の『メシヤ』意識を漸次の發達と考ふるも亦一理なきに非ず。然れども大多數の學者は耶穌には『メシヤ』の意識確なりしと論ず。彼は常に己れの事を稱して『人の子』と言へり。此の稱號は舊約全書但以耳書や、舊約非正典聖書エノク書に在る語にして、『メシヤ』のことを言へるものなり。耶穌之を冒す上は其の内心に舊約聖書以來の『メシヤ』たることを自覺せしと思はれざるに非ず。其の最後に近づき、連りに世の終末のことに付て教へたるもの、中に籠れる自己の地位は確に『メシヤ』なり、
(馬可十二ノ一八、十三ノ二四―三二、馬太十三ノ三六―四三、馬太十九ノ二八、馬太二一ノ三三)。
 (一四―一八、馬太二四ノ二九―三一、馬太二五ノ三十一―四六、路加二ノ九―十六、路加二ノ二七)。 固より

此等の教訓や預言の中には、福音書著者が後年の思想を以て過去の事實を讀み、主觀の色にて歴史を彩りし點頗る多きこと明なれば、何所まで耶穌直接の言にして、何所より著者の彩色なるや別ち難きものあり、且つ又其等の中に『人の子』と言へるは、耶穌が自らを指せるものとも解せらるれば、最後に更に神の子の顯現あるを意味し、耶穌はストラウスが言へる如く、唯だ其の先驅者たる自覺ありしとも解せらるべき節なきに非ずと雖も、此等の教訓預言の雲の中には、如何にしても其の實體として耶穌自身之言あることを思はざるを得ず。教會の初代に馬可傳も又非馬可傳材料も、打ち揃ふて此の類の教訓預言の傳説を有すとすれば、耶穌自ら之を言ひしものあるは確なれば、之を考へても耶穌には『メシヤ』の自覺ありしとするを得べきが如し。其他福音書中の耶穌の断片的言語の中には、此の自覺を示すもの豊富なり。曰くダビデ我を主と叫べり争で其の子ならんや(馬可十二ノ三三―三五)。曰くソロモンより大いなるもの茲に在り(馬太十二ノ四)。然れども是等を以て有力なる『メシヤ』自覺の證明の材料とするは不妥當なり。然れど耶穌は自ら古の律法の完全者たることを信せしのみならず(馬太五ノ十七)。自ら律法の改革者、新しき立法者たることを自覺せしは注意すべきことなり。古の律法にては然

はバビロニアに俘囚となれり。此の前後また此の滅亡を見て、猶太人は全體としては罪惡のために亡ぼされるれども、殘遺者あり、之より木の殘株より葉の出づるが如く、新しきイスタエル興るべしと唱へたるが、第一イザヤ(以賽亞書二十九章までの著者)やエレミアなどの預言者なり。舊時の神學者等は、此等殘遺者に關する預言をも、全く『メシア』に關し、耶穌基督に關してなしたるものとなし、耶穌の一言一行悉く預言に合へるを指摘し、甚だしきは雅歌の中の結構さへ、全く基督に關することを言へりとなしたり。されど此等は勿論今日に於ては多少の知識ある基督信徒の一樣に取らざる所なり。此の遺殘者の思想第二イザヤ(以賽亞書四十章以下の著者)に至て非常に高きに昇り、特に五十三章の如き、所謂主の苦む僕の預言にして、美はしき人格の現はれ來るべきを言へるなり。其れまでの預言者は大いなる王の顯はれてイスタエルは繁榮と權力を復すべきを言ひしが、茲には斯かる王者の思想は消えて、唯だ忍辱柔順なる僕の顯現の思想あり、而して之によりて國民無上の幸福を得べしと説けり。基督信徒は是等を以て『メシア』に關する預言とし、『メシア』の理想となし、『メシア』とは人民を其の不幸虐待より救ひ出だす者たりとし、耶穌は此の預言を成就せしなり

と考へしが、是も大いに議論あり。ジュール・アダム・スミスの如きは、イスタエル人の『メシア』思想は、もと殘遺者といふ集團のとなりしが、終に一個の人格を望むに至りしなりと解し(G. A. Smith, Modern Criticism and the Preaching of the Old Testament)此の方の解釋者も少からざれど、他方には、舊約宗教には『メシア』の觀念なし、其の王といひ、主の苦む僕といふは、皆なイスタエル人集團のことなり、一人を指せるに非ず、但以耳書の『人の子』また其に非ずと論ずる人多し。兎に角舊約聖書の『メシア』思想は甚だ幼稚曖昧にして、之を耶穌の事に當るとせしは、猶太人基督信徒が、耶穌世を去りて後、其の事跡を追想し、猶太人一流の筆法に従ひ、萬端に一々舊約の成就を説きしものにて、随分無理なる附會も少からず、パウロ書翰や馬太傳や希伯來書などの中の引用は、希伯來語舊約や希臘譯舊約より、自由に片言隻語を引きて、之を全く原書所在の前後關係より離し、之に自己の任意なる意義を與へたるものゝみと言て可なり。

然れども耶穌の時代には『メシア』思想ありき。舊約聖書非正典にして紀元前二世紀の書たるエノク書及びシブラ神託や、紀元前一世紀のソロモンの詩篇の中には『メ

シア』の思想あり。『メシア』の稱號さへあり。エノク書にては『人の子』てふ名を明に『メシア』に適用しあり。此時に於ては國內は衰頹の極度に陥り、昔日の士氣さへ廢滅し了り居しかば、之を救ふ『メシア』の現出を望みしこと雲霓管ならざりしより、此の思想盛なるに至りしなり。紀元後一世紀に至りては、バルク書、エヅラ第四書など出で、また『メシア』の現出を説けり。然れども此等の書の思想する『メシア』は如何なる人物なるか。之に付ては二様の思想あり。一はダビデ王の裔とし、此の血統より出でて王職を果たし、イスラエル人を神に歸せしめ、萬民をしてイスラエル人を崇めしめんとする者なりといふ思想なり。此の思想は固より終まで存在せしと雖も、然も年を経るに従つて世界の形勢は此の望を失はしむるのみ。此に於てか第二の思想は漸く人心を占むること多きに至れり。即ち世末の『メシア』の思想なり。世の終末まさに近きにあり。天地は大變動ありて、『メシア』天より降り來り、此の世界の組織を打壊し、傲れる者を挫き、壓へられたるものを救ひ、かくて敵國は亡びて義人は日の如く輝くべしといふ思想なり。此れ猶太人が紀元前二世紀の中頃、希臘帝國のヌリア王安テオコス・エビファネスより非常なる迫害を受け、宗教も絶滅せんと憂苦せ

し以來、國辱重なり來りて殆ど寧日なく、基督の後に至りては、紀元六十七年後の猶太人騒動、七十年のエルサレム陥落などありて、益々疾苦を感じ、到底救の此世にて得らるゝ望は絶え果て、唯一の望としては天より俄に『メシア』の來りて天地を顛覆するあるのみとなり、之を信じて慰めしより起れる思想なり。故に此の『メシア』は雲に乗りて來り、敵を殺すの勇士なり。以上即ち耶穌の時代の『メシア』思想なりき。人民が初より耶穌を『メシア』などとは苟且にも信せざりし理由も、耶穌はナザレより出で、其の父はヨセフ、其の兄弟はヨセ、シモン、ユダなりと、明白に素生が知られ、ダビデの裔にもあらず、天よりも來らざりし所にあり。約翰傳は『メシア』に關し、其頃の思想を最もよく示せり。耶穌を多少信せしものも、終に之を去りしは、彼が世界を顛覆する如き舉に出でず、偉大絶倫の神力を顯はし來らざりしを以てなり。馬太傳十一章に在るバプテスマのヨハネの耶穌に對する疑惑は即ち此の豫期に幾分與り居たるより來れり。此外に尙一種の『メシア』思想あり。『メシア』は預言者として來るといふものはなり。是も耶穌の當時に存在したることを否むべからず。猶太人は舊約聖書申命記十八章十五の、主なる汝等の神は汝等の兄弟の中より我に似たる一人の

預言者を起さん、其の汝等に告ぐる凡ての言を聽くべしといふを、古モーセが『メシア』について預言したるものとして、モーセの如き預言者の現出を待ち居しは、使徒行傳三章二十二節にペテロが此の句を引きて説教せるにても知られ、又耶穌の現はれしとき、或人は之を舊約預言者のエリヤの再現せるなりと言ひ、或人はエレミヤ、又は預言者の一人なりと言ひしにても知らる(馬太十六ノ十四、馬可八ノ二八、路加九ノ十九)。されど此の預言者はモーセの如く、又はエリヤの如く、來りて萬事を一新すべきものにして(馬太十六ノ十、馬可九ノ十)、即ちまた現世の改革者、政治上の首領たりしなり。

斯くの如き次第なれば、耶穌に『メシア』の意識ありたりとて、其は耶穌の人格を高きに致すものに非ず。却つて之を低からしむべし。若し耶穌に此の自覺ありしとすれば、其は『メシア』なるものを新らしき意味に於て觀念しての事なり。此はシュールルが其の『猶太人歴史』に論明する所にして、確に然らざるべからず(Schürer, History of Jewish People in the Time of Jesus Christ)。耶穌は純精神的の意味に於て『メシア』を觀し、自ら其と自覺したるべきなり。故に耶穌には『メシア』の自覺なかりしと言ても差支なし。確に普通の當時の意味の『メシア』意識は無かりしと信す。之

に付ては議論ありと雖も、耶穌の神の國に關する觀念の純然精神的なるより見れば、余は如何にしても耶穌の『メシア』自覺を現世的のもの若くは世末的のものとするこゝと能はず。此はハルナック Harnack 等も唱ふる所なり。

元來耶穌の『メシア』自覺の問題を特に強き熱情を以て議論するが抑も本末を忘れたる科しきなり。元來耶穌の『メシア』自覺に非常なる重きを置くは、もと舊約と新約の關係を誤解せるより來れるなり。基督教はユダヤより出で、最初の信徒はユダヤ人なりしを以て、耶穌の事跡を猶太人的に考へ、一々豫言に適應したりと論じ、耶穌を約束の『メシア』なりと傳へしより、此の思想基督教會に流れ入り、千九百年後の今日尙之が教會内を浸せるなり。然れども初の信徒は自ら猶太人にして猶太人に傳道せし故、然か考へ然か説きしなれど、大局より見れば、舊約の約束とか豫言とかが然かく新約を決定すべきものならんや。耶穌は舊約以來の思想の『メシア』たりともたらずとも一點差別なし。唯だ彼は人類の救主なりといふことが事實なり。重すべき事なり。舊約に合はねば耶穌は價值少しといふ理何所に在るや。神は舊約のみに生きず、萬世に生く。耶穌を生じ、之をして世を救はしめたる事が、其自身にて無限の尊きことな

り。然るに耶穌の『メシア』意識がありしかか、無かりしかか、預言者的『メシア』の自覺なりしかか、世末的『メシア』の自覺なりしかか、口角泡を飛ばし、筆を禿らせて議論するは、所謂史的神學者輩の死たる議論なるを、之を真似て兎や角追隨附和する普通神學者等の舉動こそ心得ぬ限りなれ。

『メシア』の自覺の有無は何れとしてもよし。耶穌は神の顯現たることを自覺せしや否や。前にも引ける如く、自ら『人の子』と稱し、當時『メシア』の稱號として見られし名を自ら冒せる所を見れば、自己は神より選ばれ、特別に聖とせられ、其の精神的王國を立つる使命を負へるものなるを自覺し、『人の子』の名稱を自己獨特の意に於て用ひしものと思ふを得べく、又ペテロが汝は『キリスト』活ける神の子なりと告白せしこと、耶穌が自らエルサレムに行きて殺さるべきを豫告せしことは、北方パレステナ旅行中に在りしことにて、同時の會話なりしは、三福音書とも之を記して相違はざる所なるが、此時耶穌はペテロの告白を聽きて非常に喜び、ヨナの子シモン汝は幸なり、そは血肉汝に示せるに非ず、天に在す我父なりと言へるを見れば(馬太十六二八、馬可八ノ二七一三、路加九ノ十八一二七)。耶穌の自覺せる『キリスト』は間もなく辱められ殺さるゝ者にて、

猶太人の思想せる『メシア』にあらねど、然も自ら『キリスト』又は『メシア』たることをば十分に自覺し居たるを知るべきなり。耶穌は又神に祈りて、父は我に萬物を與へたまへり、父の外に子を知るものなく、子及び子の顯はす所の者の外に父を知るものなしと言へり(馬太十一ノ二七)。ハルナックは之を耶穌の『メシア』自覺の迸れるものとせり(Harnack, Wesen)。實に此の語には、精神充ちて神と最も近き自覺溢れ居れる心地す。其他約翰傳のことは暫く言はずしても、同觀福音書の耶穌を見れば、起居動作の間、自ら神と共に在り、神の中に生き、自ら靈魂の大牧者を以て居り、靈魂の醫者を以て居り、人の要求を見て常に注がんとし、其の爲す所悉く神の流れ下る所以なるを自覺せしを明に見るなり。前にも引ける路加傳十五章の善き牧羊者の譬と貧しき寡の譬とに於て、神は一人の迷へる者をも救はんとして苦心し活動すと教へ、自らの活動は實に神の此の靈的大運動と同一なることを言へる如き、馬太傳九章十三節の夫れ我が來るは義人を招くために非ず、罪ある人を招きて悔い改めさせんためなりと言へるが如き、或は屢々人に向ひて汝の罪赦されたりと宣告せし如き、之を在來の神學者が、基督が全然父なる神と同格の神にして、全能の權を自覺して發せし言とするは

非なりと雖も、然も耶穌が常に父なる神己れと共に在り、己れに依て活動し、己れの爲す所は即ち神の爲す所なりといふ自覺確固たるを示す例に非ずや。
己れに於て神は顯現せりといふ自覺は、耶穌ほど神と合一せる人格には、必ず確固不拔のものとして存したらんかなれども、然もよしやこれなかりとしても、耶穌の人格の價値と、其の感化即ち人類救拯の力とにはさしたる影響なし。彼の人格は事實に於て神の顯現なり。此の事實吾人に影響あり、人類の救拯を致すなり。

以上余は基督の人格を論じ來れり。彼は純然たる人、人性の至れる人なり。彼は神を人類に明白に完全に顯示したる人格なり。神性に一致したる人格なり。神の内性の發動顯現して成りたる人格なり。此の人格、人類の世界に活動して、人と神との間に波動を起し、之を新らしき關係に入らせ、茲に神人の合一を結果せり。従つて此の人格は、宏大なる基督教の中心なり。従つて此の宇宙の間、神人關係の生命精神なり。

第三章 基督の事業

基督は如何に活動せしか——活動即ち事業は大切なり——人格と事業——耶穌基督の人格の論定は事業に依り事業は人格に依る。

第一、耶穌の事業の性質——耶穌は最大の人格——耶穌は靈的生命を與ふ——宗教は靈的生命の活動の中心窮極——宗教は人間生活の大本——基督と道德——基督と哲學其他——神人の間の事は多端——基督の事業は神人關係の全面を掩ふ——之を救拯といふ

第二、耶穌の事業の觀念の種類と變遷——耶穌の賜の意識は大切なり——基督信徒の觀念の曖昧——觀念の偏狭——中世以後最も重んじたる所——基督の事業觀は個人の經驗によりて異なる——民族によりて異なる——一、基督教會最初の觀念——パウロ以前の思想——二、パウロの觀念——パウロの書翰——パウロの基督事業觀——其の中の二流の思想——法律思想——道德神祕思想——二様思想の源——希伯來要素——希臘要素——三、パウロの後——約翰文書——希伯來書——四、新約全書觀念の總括——五、使徒的師父及び希臘師父——何故代罰代死思想が重んじられしか——六、拉典教會の觀念——羅馬人の性質——羅馬教會の基督教の重心——其の基督事業觀——七、アンセルム——八、其後の觀念——ルーテル及びカルヴァン——グロッチャス——九、法律思想の淵源——十、満足説法律説以外の觀念——シュライエルマッヘル——リッヂナル——アシユネル

第三、基督の事業の眞觀念——一、耶穌の事業の法式——活動と法式——耶穌の活動の法式——甲、耶穌の

人格間接の活動——イ、教訓——耶穌の教訓を知るの材料——耶穌の教訓の特色——組織——教訓の綱要——神の國——神の父徳——人の尊貴——自己の使命と犠牲——神の子及び『メシア』——神國に入る條件——未來——世末思想中心説——ヨハネス・ライスの説——世末思想説の養成と反對——此の解釋の偏狭——耶穌の教訓の力——ロ、實行——教訓をなせし事既に一の實行——親切の行——十字架——耶穌の實行は道徳宗教の實現——生ける善——生ける宗教——宗教に於ける神の顯現——耶穌の神に對する態度の顯現——耶穌の間接活動の繼續——聖書に依りて繼續す——教會によりて繼續す——個人によりて繼續す——乙、耶穌人格の直接活動——感化の事實——感化の理の説明——直接活動は最も必要——史的耶穌の直接活動——久存の基督の直接活動——教會の全歴史に於ける此活動——此れ基督教の特色——教會歴史を造る——二、耶穌の事業の内容——甲、救拯の一般觀念——生命の事——人に於ける生物的生命——生物的生命以上のもの——靈的生命——人の特徴——靈的生命の性質——生命は進化す——終に靈的生命を出だす——靈的生命は自然を超越す——靈の歴史は超越の歴史——超越の終局は神との合一——神と合一の祝福——人類の實際——靈の生命の埋没——靈が肉に役せらる——罪とは何ぞや——罪の横行——罪の結果——罪の結果の最極——罰と滅亡——神は何故罪あるを許すか——宗教の目的は救拯——乙、耶穌の救拯——耶穌の自覺——耶穌の救の事實——イ、耶穌は人の知を啓發す——ロ、耶穌は新生命を與ふ——救は恩恵なり——救の條件——十字架の地位——在來の十字架信仰の弊——基督の事業の神に與ふる影響——在來の神學論の矛盾——満足の意義——此章の概要

耶穌基督は曾て世に存在したる一個の人格なり。而して其の精神は長く存して人間の個人を更新し、歴史を動かし、文明を作り來れり。今尙吾人の間に在り、吾人の内部に活動せり。基督の人格は人の至れるもの、又神の現はれたるものなり。然れども唯だ至大至高の人物が存在せしといふことのみは殆ど何の價值あるものに非ず。基督史上に存在し、其の精神歴史の間に存在し、今尙存在しつゝありども、唯だ其のみならば吾人は之に付て餘り多く問ふの要なし。否多少の問題とすべき理由は在らんかなれども、之を吾人の生命にかゝるが如く思惟し、強て基督に付て觀念を樹立するの要あることなし。然れども人格の存在は必ず存在と共に他の意味を有す。即ち活動なり、およそ人格なる者にして存在しながらも活動せぬものはなし。如何なる人格も其の内部に在るものに依て活動し、之を外部に現彰し、外部に影響しつゝあり。此の現彰の大にして、影響の大なるものが即ち大人格なり。勿論現彰といふは、唯だ人類の五官に訴ふることの意味にはあらず、自己人格の内部のものを外に持ち出だすことの意味にして、或は現象界物質界には極めて小さき形を起すにすぎずして、實は非常に大なる自己内面の現彰たるものも少しとせざるなり。又影響といひたりとて、世界の表

面に及ぼすもの、みを指すに非ず、實際に人類の全生活の上に及ぼす所のものにして、或は表面上には一時は勿論久しき間にも見るべき變化を與へざるものにして、實は人類を全く新にせるものなきに非ざるべし。之を現彰といひ影響といふなり。耶穌基督は存在すると共に此の活動をなせり。基督の精神が二千年の歴史を占領し、尙將來無窮に發展の前途を胚胎せる所以のものは、彼の活動あるによりてなり。然らば其の活動は如何なるものなりしか。此れ基督の事業の問題なり。事業 Work は即ち活動なればなり。基督は如何なる活動をなせるかを見るに非ずんば基督に付て觀念を健固に立つるを得ず。之を見て基督に付ての觀念を定め、其の觀念に従つて生活するは吾人の爲さざるべからざる所なり。

蓋し事業は大切なり。たとひ人格存在しても、其が唯だ死火山の如く屹立せるのみにて、何等の作用を人生になさず、何等の影響を與ふるなくば、其の人格そもそも何の意味、何の價がある。人格存在して其が人間社會に影響を與へ、其が人間の生活に作用する所ありて、其人は始めて意味あり、價あり。其人に始めて傳あり。人類の歴史の流に一滴にても貢獻してこそ、其人は歴史の中に居る人なれ。此の人生に作用し、

社會に影響したるが即ち其の人格の事業なり。此の事業の大なるものが大人物なり。否大人物ならば必ず大いに作用し大いに影響するなり。徳は決して孤なる能はざればなり。

人格と事業は樹と果の如し。善き樹は惡き果を結ばず、惡き樹は善き果を結ばず、誰か荊棘より葡萄を採り、蒺藜より無花果を採ることをせん。凡て事業は其の人格の發動なり顯現なり。人格の中に無き物は事業として現はれざる也。されば一方より言へば、事業の價値をば人格に由て解釋すべきなり。たとひ事業その物のみを見れば、甲乙全然同一のものと思えても、之を爲せる所の人格が、甲は非常に高くして乙は甚だ劣等ならば、其の動機には必ず清濁の差あるべく、従つて其の事業の價値には優劣なかるべからず。時としては甲の事業が乙の事業より劣り、人生に影響すること小なりとしても、尙其の事業の價値は大いに高きことも少しとすべからず。表面如何に美はしく見えても、内は殘暴なる狼の如くならば、其の事業は惡なり。されば外に現はる、事業は、其人の腹の中に入り、茲より觀察して眞の價値を定めざるべからず。之と共に人格は其の事業に依て知らるゝことも思はざるべからず。吾人が或る人格を知

るは何に由るか。直接に其の人の内面に入り中心を捕ふることは、吾人人間の力にて到底能くする所に非ず。唯だ其の人格の發動顯現せるものを見、之を源に辿り入りて茲に其の人格を知るなり。其の人の發動顯現に接觸するに由て其の人格を知るなり。若し之なくば永く人格を知ること能はざるなり。故に或人は發動顯現の凡ての總計が人格なりと謂はん。されど總計にはあらず、其の源なり。源といはば小なるものにて、其の展開は他來のものに仰ぐに由ると思はるべければ、寧ろ之を其の實體と稱すべし。例へば木は根なり幹なり枝なり葉なり花なり。然し此は一の生命の發現なり。此等の總計が生命に非ず。此等の實體が生命なり。事業は人格の花なり葉なり。其の實體として人格あり。花か葉か幹かに依て吾人は其の生命は櫻なるか梅なるかを知る如く、人の事業に由りて其の人格を知るなり。されば人格を評定するには、其の吾人に暴露せる事業を材料とせざるべからざるなり。此れ勿論當然なり。前に言ふ如く、一面に事業が人格より離れたるものならず、人格に由て解釋せざるべからざるほど人格の發現ならば、他面に於て、事業に依て人格を知るべければなり。

耶穌基督の人格の如何も、其の事業を見て知るべきなり。耶穌の人格も最初より何

にも依らず唯だ直覺のみにて知り得べからず。其の現はれたるものに由る。基督が史上に存在したりといふのみにて、又單に永く精神界に存在するといふのみにて、一向に現はれて事業をなす所なくば、基督を知るべからず、基督を論ずべからず。然れども吾人が基督を知り、之を論ずるは、唯だ存在するのみならず、爲す所あればなり。基督の事業は眞の人格ありし故に現はれしこと勿論なるも、吾人が基督の人格について論を立つるは、其の事業に依りてすることまた言ふまでもなし。此の二は互に糾ひて因果し、決して離して考ふべからざるなり。然らば如何なる事業を基督は成したるか。然れども之を明にする前に先づ耶穌の事業の性質を見ざるべからず。

第一 耶穌の事業の性質

耶穌の人格は多端なる作用をなし、人類の諸方面に影響を與へたり。人此の世に在れば彼は此の世界に於て諸の方面に關係交渉す。宛がら蜘蛛の巢の如し。故に知る知らずの間に其の人格の作用し影響する所また千萬途なり。然れども其の交渉し關係し、其の人格の作用する所他の方面に比して最も大に、其の人格の影響を與ふること又最

も大なる方面あり。他の方面においては何等尋常平凡の人と異なるなしと雖も、或方面に偉大なるものあらば其人は其の方面の大人物なり。たとへばカイザル・ユリウスは征軍及び統治の上に非凡の才能あり、其の一代は最も多く其方面に關係し、其の方面を影響したるを以て、他の方面には彼は何等のことをなさざりしとしても、其方面の英雄なり。否其の著『ガリア戦争』の如きは、風韻ある歴史なれども、然も其の史家たる面目は之を問ふ人少く、寧ろ一方の光のために隠されて埋没し了り居る程なり。ソクラテスは他の方面には平凡にして迂遠なりしならんも、人類思想の上の大恩人にして、其方面に偉大なり。而して偉大なる方面の偉大なると共に、他の方面も正則の人の活動をなさば、其人は眞個の偉人にして、若し一面のみ偉大にても、他の面悉く小なるか變則ならば、其はさほどの大人物と謂ふべからず。又偉大なる方面が根本的のことにして、人間生活の多くの事端に涉り居らば、其れほど偉大を加ふるものなり。

耶穌の活動は勿論人間生活の多くの事端に交渉し之を影響すと雖も、其の耶穌をして無二の人格たらしむるは其の純精神の方面なり。彼は他の方面に於ても正則の人に於て、健全なる人格なり。されど彼は人間生活の純精神的方面に其の人格の中心を置

き、茲に充滿して、茲を死より生に移すが如き大作用をなし、大影響を與へたり。耶穌は精神界の人なり。精神の救主なり。耶穌の人格の顔は全然精神界の方に向ひ、彼は人類の精神界に向ひて兩手を舉げて塵き、精神界に向つて歩み出で、之を動かせり。他の英雄と比して何れが大なるやといふ問題は、精神と物質と何れが大いなるやといふ問題と比例す。もし物質の世界を一時的に顛覆する方が、精神界を永久に又普遍的に透化するよりも偉大なりといはば、耶穌より大なる人物は史上幾人もあらん。若し之に反すといはば耶穌は世界あつて以來の大人格なり。然かのみならず、純精神的のことは其の支配する範圍廣く、而して根本的なり。凡ての物界の事業も人格の力に由て成就するものなるに、人格を造るものは即ち精神的の英雄の人格の活動なれば、此の精神界に無二の權能を有する耶穌は、即ち萬事を成すの力を握れりといふべきなり。

耶穌は自ら人生根本の事に於て偉大なりき。故に其の人格の力は、人間生活の諸方面に向つて發動し、人格社會の諸方面を齊しく動かし、之を變化し、之を非常なる高きに致したり。見よ自ら純精神的なることのみをなしたる耶穌の感化のために、世界の物質的文明が如何に變化したるか。今日にても耶穌の人格を信じ之を受納する所、

盛に物質の上に新なる幸福を得つゝあるならずや。

耶穌は精神界に活動し、茲を影響して人を靈的死より靈的生命に移したり。耶穌に由て人は靈的生命を獲得したり。人は自然界の中より現はれ、自ら省みて自然界以上のものなるを意識し、此の自然界以上の生命を全うせんと欲すれど、此の生命は自然界の中に織物の絲の如く織り入れられ、之に搦まれあるを見、又は椰子の實が鐵より固き殻の中に包まれある如く自然界に包まれあるを見、自然界を脱出し難きを思ふて煩悶苦惱す。古より人類は此の自然以上の生命を自然の捕囚の中より脱出せしめんとして奮闘し來れり(L. Eucken, *Life of Spirit*; trans by Pogson & Kamp um Forderung der geistigen Lebensinhalt 等参照) 釋迦も其の大なる運動者なり。ソクラテスも其なり。而して眞に之を得、眞に之を人に與へたるが即ち基督なり。基督は自ら自然界の中より出で、全く自然界の絆を切り、純然靈のみに生き、自然界を征服し終りて、無限なる神と合一し、無限の生活を送りたり。彼に於て靈的生命は全然何の阻碍もなく條件もなく活動し、靈的生命は望月の如く圓かなりき。彼は之を他人に與へんとしたり、否他人に與ふることにて、即ち自己の生命の全くせらるゝを見たり。此の活動が基

督の活動なり。此の活動に由りて影響せられて起りたる人間生活が基督教なり。

而して靈的生命の活動の燒點たり窮極たるは神と合一することなり。即ち有限の人が無限化するが靈的生命の極致なり。道徳や法律や國家や、みな靈的生命の活動にして、人は自然界より脱出せんとして、此等の活動をなすと雖も、然も此等は尙有限界を條件としてなし得る活動なり。藝術の如きも尙有限なる自己の活動なり。哲學も然り。無限化したる自己は之をも超脱す。神と合一することは、即ち自己が全く無限其物となりしなり。かく言へばとて宗教は個性を没却することにはあらず。個性が無限と調和し、一原理の中に存在するものとなるは前に言へる如し。故に人に正しき宗教を有せしむるは、即ち其人の靈的生命の中心窮極を生かすものにて、人之を全うせばもはや何等の遺憾なし。されど之に止まらず。茲を生かさるゝ時は靈的生命の萬端は忽ちにして動き出だし、全人格は茲に残る限なく用をなす。若し此の所定まらずば本末だ立たざるなり。たとひ事々物々について知識し、一々之を應接して處理すとも此れ末のみあるものにて、其の生活は常に矛盾し、支離滅裂し、常に悲哀苦痛に襲はれ、而して一生を意味を成さずして終らざるを得ず。靈的生命の或活動のみを救

はれても、生命の他の活動は依然として死止せることあり。所謂宗教と雖も之を奉ずるために靈的生命の他の活動全く止まり、藝術もなく哲學もなく道德もなく國家もなぐならば、此は眞に人を救ひたるものに非ず。然れども眞に靈的生命の中心たる神と人との關係を正しうせしむるものは實に人間生活全體の創造者指導者にして、即ち全人格の救主なり。耶穌は實に其なり。

宗教に於て事業をなすときは、生活萬端の上に事業をなしたるなり。別けても最も近き所にて道德の上に事業をなしたる也。否道德は宗教に従つて造らるゝなり。道德は本來宗教に因して起るべき性質のものは謂ふべからず。又歴史上道德が宗教に因して起りし様は見えず。然れども宗教は其の社會の道德に根本的影響を與へ、全然之を變化し了る。例へば極めて樂天的なる氣質の國民として、所謂神ながら言あげせぬ流儀に振る舞ひ、頗る自然主義なりし我が國の大古にも、佛教渡來後は徐々厭世の思想入り來り、愛慾を罪とする觀念、五逆の如きをば最も惡むの精神起りたるを見る。基督教の歴史は此の最も著しきものにて、如何なる無宗教主義の歴史家も、又虛無主義の文學者も、基督教に由て古代傳來の思想一變し、其まで尊びしものを卑しめ、其まで

輕んせしものを重んずるやうになり、世界の進歩全く方向を轉じたりといふ事實を承認せることは、前にも引きたるが如し。此れ實に耶穌基督一個の人格に淵源することなれば、基督は道德界の進歩の流の轉路者、新道德の創造者たりしなり。

其他萬般の事擧げ來らば窮みなし。哲學も基督教に由て新時期に入りたり。希臘哲學者にして基督教信者となりし者は、容易に其の思想の舊き習慣を改むる能はざりし故、早き頃の基督教哲學は勿論、爾來今日に至るまで哲學は多く希臘風の範疇を全然超脱する能はざる趣あれど、然も基督教以前の哲學と、以後の哲學とは、明白に面目を異にせり。若し基督教起らざりしならば、哲學は如何になりしか。基督前及び紀元三四世紀までのストアコス哲學などを見れば思ひ半ばにすぐるものあり。茲にも一個の耶穌の人格の挿入ありて、其の進路の著しく轉じたるを見る、科學すら耶穌に由て大いなる影響を受けたりといふを得ん。基督教會の歴史は特に近代に於て科學に對する憎惡と迫害とを幾分包むと雖も、此れ一部のことにして免れ難き所たり。基督教の眞精神は決して然るものに非ず。却て科學は基督教宇宙觀ある所に非ざれば出で來らず、發達せざるべきなり。宇宙は神の經綸創造に成りて、微細の點まで合理的なりと

いふ信念が根底に在るに非ざれば、盲目的に發展せる宇宙に向つて研究を試みるの心起るべからず。現に科學は基督教の盛なる國に於て、最も根氣強く最も獻身的に研究せらる。確に基督教あらざりしならば、近代科學が起りしか疑問なり。希臘哲學のみならず終に科學とならずして、架空の思辯にて終りしならんと思はる。之も基督教前の希臘哲學を見、印度の哲學に鑑みなば思ひ半ばに過ぐる心地す。されば茲にも直接か間接か耶穌の人格挿入せり。其他政治にせよ、習慣にせよ、社會狀態の如きは勿論、耶穌の人格あらゆる方面に擴張し發展して、作用し影響せり。

然れども最も根本にして、耶穌の人格の最中心の活動せる所は、神と人との間の事に於てなり。此所は譬へば扇の要にして、他の事は茲より發展して作用し影響を與へ居れるなり。されど其の神人の間のこと、即ち宗教といひても、また事多端に涉れり。故に耶穌の事業は神人の間の事の全面を掩ひ居れるなり。

神と人との間のこと、雖も確に多端なり。神は無限なり。人は有限なり。人は何方へ向ひても神に接し、何所に行きても神の前に立てり。『たとひ我れ曙の翼を假りて海の極に至るとも汝彼所に在す、たとひ我れ我床を冥府に設くるとも汝彼所に在す』。故

に人は其の靈の如何なる點を發揮し、如何なる方面を作用しても、神と交渉し、宗教を爲さざるを得ず。人は各々事情を異にし、性質を異にす。故に神に付て解する所も、各々差別なき能はず。或る人格には神の嚴正なる方面のみ見えて、他の方面は隠され遮られて見えざるなり。かゝる人は神の嚴正なる性に向つてのみ自己の靈魂を投げかけ、神の此の性に對してのみ交渉を保たんとする也。之に反して或る人格には神の慈悲のみ見え、此の性とのみ交渉せんとする。或は唯だ知力のみにて神に接し、神を哲學の絶對と全く同じきものとし、宗教をば唯だ知ることとするもあり。或は情のみを以て神に接し、さながら美といふもの、如く考へ、宗教をば唯だ感ずることなりとするもあり。或は意のみを以て神に接し、道德と宗教とを全く一視するもあり。されば此等の各自に依りて救拯といふものは異なる意味を成せり。神と人との間を整ふるといひても、或人には神を教へ神を示すことが即ち其となり、他の人には依頼の感、感恩の情を與ふることが即ち其となり、又他の人には意志を刺激し之を鞏固にすることが其となり、其他千差萬別となるべし。

されば神人の關係の事たる宗教を正しうするとしても、甲の人をば之を正しうせし

めて、乙の人には何等の影響を與へざることなしとせず。多くの宗教は此の缺點あり。例へば禪的の佛教の如きは、人性の唯だ一面のみを作用させ、他の部分をば全く麻痺せしめ、不具的の人格となりて始めて達すべきものなり。神人關係の全野を影響して、凡ての性格の人の、凡ての要求に答へ、如何なる方面の神との交渉をも正しうするものにして眞に人を救ふ者なり。耶穌基督は宗教に於て無二完全の事業をなしたり。苟も人の神に對する關係の事にしあらば、耶穌基督の人格に依て之を正しうせられざるものなし。如何なる性格の人が、如何なる方面より出でて神に接しても、耶穌基督に依るとき、眞の關係を得て満足するを得るなり。近代基督教の起原に關し種々奇抜の臆説出で、皆な想像を縱まゝにし、獨斷擅見を逞うせるが故に、彼と是との言ふ所、矛盾黑白、人をして唯だ失笑を禁する能はざらしむと雖も、然も斯くの如き臆説の立てらるゝは、基督教が神人の關係に於て多くの方面を包容し、神人關係の多くの方面に作用し、社會また之に由て多くの方面に影響を受け、基督教を種々様々の原野に向つて發展したるが故なること言ふを俟たず。例へば基督教はもと猶太教と異りしものにして、基督の『メシア』は何等猶太教の其と差別なかりしなりといふもあれば、基督

は佛教に化せられ、脱離を教へんとしたるものなりといふもあれば、基督教は希臘羅馬哲學の所産なりといふもあれば、基督教は希臘羅馬世界の社會主義運動より起れりといふもあれば、基督は宗教家には非ず道德説の創説者なりといふもあれば、基督は神學説の唱道者なりしといふもあり。皆な偏狹にして根據なき臆説たるは何人も一見して知るを得れど、斯かる解釋も試みらるゝほど、基督の精神界に於ける事業は、廣き範圍に涉り居ることを示すものといはざるべからず。基督の此の事業を全體より稱して救拯といふ。救拯 *salvation* とは、沈める物を拯ひ上ぐるが如く、苦涯より人を引き出だすといふ意味と、安全にするといふ意味と二つあり。然れども語原は深く問ふを要せず、神と人との關係を動かし、人をして神と正しき關係に入らしむる事業を救拯とは謂ふなり。

第一 耶穌の事業の觀念の種類

耶穌基督は人類に靈の生命を與へたり。此れ基督教千九百年の經驗にして、又今日の吾人の經驗なり。耶穌に由て此の生命を與へられたる徴證は最も明白歴然として、

聊の陰翳もなきほどなり。若し基督なかりしならば、人類の靈の生命は、終に十分の勢を得ず、物質の力、自然の力を壓倒するに足らずして、人は長く罪に居りしならん。然れども靈の生命とは何ぞ。人類が基督より與へられたるものは如何なるものぞ。之を明白に意識するは容易のことに非ず。基督信徒の多くの者は之に付て明白なる觀念を抱かざりしが故に、自己が基督より與へられたる賜の價を知ること甚だ薄弱なり。茲を以て自己も容易に之を棄つるが如きこと多く、又非常なる熱心を以て之を他人に與ふるの誠乏しきなり。若し此點に眼開けて、耶穌の事業の内容明白となり、自己との關係確實に意識せられれば、基督信徒の精神の幸福と安全とは今よりは千百倍のものとなるべく、世人は之を望みて翕然として基督の許に來り就くべきなり。

然るに基督信徒の多くは耶穌の事業の觀念極めて漠然たり、或は之を明白にせるものも極めて一方に偏し居れるが故に、自己も發達せず、世人に向つては、聲を囁らしめて生命を得よと呼ばはりても、之に耳を傾くるものなきなり。如何に觀念が漠然たるかを見んとせば、試みに基督信徒に向つて、君は基督を信じて何を得たるやと問へ。恐らくは十人の九人までは殆ど之に答ふるの途を知らざらん。彼は現に基督に影響せ

られて大いなるものを有し居るなり。基督に接せざりし前とは著しき變化を來し居るなり。然も之を意識する能はず、却つて基督の賜を遠き所に思索し、基督は我等に代つて罪を負ひて死したりと云ふ如きことを答ふ。彼は何程其の答ふる所を實に感じ居れりや。唯だ之を言ひ傳へられたる如く承けて、之を然か記憶し居れるのみ。茲を以て誘惑來るときには一耐りもなし。基督を棄つる弊履の如し。其は其の道理なり。基督が何程自己に影響せるやを思ひ付かぬればなり。若し基督は斯くくの點に於て我が靈の生命を生かせたりといふこと明白に意識せられれば、たとひ如何なる快樂を以て誘ふも基督に背くこと能はざるべく、生命をも惜まざるべきは勿論なり。

斯く一方には基督の事業に付て漠然たる觀念を抱いて満足する者あると共に、他方には、明白なれど著しく中心を失ひたる觀念を抱き、斯くて基督を小にし自己を小にし人類を小にしつゝある者あり。例へば耶穌の事業を以て、唯だ神の吾人に對する罰を取り除きたることなりとするものゝ如し。成程億兆の人の中には、今日と雖も神に對しては唯だ罪の意識あるのみにて、其の嚴罰を恐れて靈魂の筋々骨々悉く震ひわななける者も決して無きに非ざるべければ、其等の人に對しては、此の觀念は大いなる

福音にして、其の靈魂を動かして基督の十字架の下に趨り歸せしむべきなれども、斯かる種類の人は決して多數とは謂ふべからず。而して其が必ずしも人間の最も優秀なる種類の者とも謂ふべからず。不健全のものも却つて少からざるなり。今日の人の多數には、神の罰といふことは其れほど靈魂を動搖せしめざるなり。何となれば神の愛てふ思想は、近代の宗教的思想の最切なるものなればなり。よしや罰といふことありとして、基督單に其所に事業をなしたるのみならば、其の事業は至て小局に限られたるものにして、基督の救拯はさして人間の生命の充實を助けざることゝなる。故に基督が神の罰を取り除くといふことは、よしや眞理なるとしても、之を其の事業の全體とすべきに非ず、又は其の事業の最大主要點ともすべきに非ず。事實基督の事業は其よりも廣くして、人間の靈の生命全體にかゝるなり。然るを其を辨まへず、只管基督はたゞ人類の罰を取り除きたりと言ひ、十字架の死は全く其がため、生涯の勞苦は其を目的とせり、否其の生れしことまで、俎に上るべき魚の備へらるゝ如く、初より祭物として定められ居たるなりと唱ふるは、基督を小さくし、自己の靈魂を小さくし、人類を小さくし了るものにて、かゝる教は福音には非ず、却て悲みの音づれ、世を害する聲たるなり。

されば吾人は基督の事業について適當なる觀念を抱くことを努むべきなるが、此れ實に困難なる課業なること歴史の示す所なり。中世以後基督教會が基督の事業として最も重んじ、基督の事業を殆ど之に盡くる如く信じ居りしは、其の死に由て神の人の罪に對する不滿の情を和らげ、義罰を取り除き、人を罪の結果たる死より救ふといふ點なり。此れ天主教會のみならず、ルーテル派、改革派を始め、プロテスタント諸派の殆ど皆な一致して奉ずる信仰にして、之を否定する者は極めて少數なりしなり。斯かる堅固なる信仰は決して淺薄なる理由の上に立てりとはすべからず。其の根は人心の奥深き所の或物に發し、人間生活の中に離すべからざる縁を有するものなることは勿論なれども、然も此は基督の事業を誤解したるものか、少くも餘りに之を偏りて考へたるものたるを免れず。基督の事業は其よりも廣く、其よりも異なる所に重心を置けり。然れども基督の事業が専ら此所を重しとせられしは又大いに理由あり。少しく之を述べん。

抑も基督の事業は神人關係の全部に亘り、如何なる性格事情の者も其の神人關係に

於ける如何なる要求をも、皆な基督に依て充たされ、此の關係を全うすることを覺えしと、猶百川の悉く海に注いで、自ら容れられざるを感せざるが如くなるを以て、基督の事業に關しても、古來種々異なる經驗を抱き、種々異なる方面をあらはし、從つて種々異なる觀念を有せり。例へば性質が知的に傾き、神を知り神を思想するのみに於て人格全體の活動せるを覺え、此の以上に宗教なしと思ふ人は、基督の事業の最重要點は吾人に神の真相を教示せし所に在り、之に由て自己は神との關係を正しうするを得、茲に救を得たりとするなり。之に反して性質が意的に傾き、自己の目的を達せんとする努力強く、精神の奮闘盛なる人は、自己の爲さんと欲して爲す能はず、爲さざらんと欲して然も之を爲すことを意識し、罪惡の感に心を壓せられ、神との合一之に由て斷絶し、罪の報の豫期確なるを覺ゆるにより、耶穌基督の活動に於て神との父子關係克復せるをば、之を其の十字架の死が、自己に代りて罪の罰となり、自己に來るべき報を除きたるに因ると推し、即ち基督の事業の眼目は其の死にして、救は之に繋れりとなす。其他人々の性質により、事情により、自己と神との關係の中心異り、重要點異なるが故に、基督に由て神人關係の完成を意識するに當りては、各々基督の人

格の干渉する所に付ても、異なる所を意識せざる能はず。然れども其の人々各自に取りては、基督は其の意識せる所を動かして神との關係を整へたるなれば、其の救拯のある所は全然眞實たるに相違なきなり。

また民族に付ても、各々性格を異にし、事情を異にせるが故に、基督に觸れて其の靈的生命を呼び醒まされたる経路と、其の靈的生命の發動の方面とは、互に相異らざるを得ず。猶太人や羅馬人の如き、宗教心最も強く、而して意志また最も發達し、道徳上の戦闘の經驗大いに明け、且つ秩序を愛し、律法を好む人民と、希臘人の如く知力の方秀で、思辯を愛し、藝術を好み、而して實際上には統一てふ能力に缺乏せる人民とは、基督に接しても、其の事業について互に異なる所を意識し、之を異つて信じたることは當然なり。實際に於て希臘人は知力の秀で思辯に長けたる人種にして、罪惡を感ずる點に於ては痛切ならざりしを以て、彼等の基督教はおもに神の性質に關し、三位一體に關する思想たり。基督の死の如きは、輕んぜられもせねど、然も第一の所に置かれあらず、却つて基督に於て神性と人性結合したるが故に、茲に神人の合一行はれ、人は死より免かるゝを得ることを思へり。然るに羅馬教會となれば、元來意

志強く精神上の戦闘の意識明なる拉典人の教會の事とて、また實際的の方面に於て宗教に發達し、人性の問題、別ても罪の問題に心を悩ませしを以て、アンセルム以後に至りては、基督の事業の中心は即ち自ら人類の罪の報を受け、十字架上に死にて神を満足せしめたるにありといふに至りたり。獨逸民族は文明に於て拉典民族の後進弟子たり、基督教をも彼等より受けたる者なるを以て、久しき間基督の事業に關しても拉典人の中心とする所を中心とせしが、漸くにして自己の面目を發揮するに至り、近世となりては、基督の人格其自身の活動こそ基督の事業にして、人を罪惡の結果たる罰より拯ひ出だすに非ず、人を罪惡其物より救ふを其の主眼とするに在りとするもの漸く多きを加ふるに至れり。

一、基督教會最初の觀念 使徒等は二三年間其の師に直接親炙せしと雖も、其の靈性は未だ十分に基督の一生と事業とを解する程に進み居らず、彼等の經驗は未だ十分に熟し居らざりしを以て、教會の最初に於ては、基督の事業に付て意識尙茫漠たり。以爲らく、基督は古より預言せられ居たる『メシア』なり。故に一たび殺されたれど復た地に降り來り、現世界の組織を打ち崩して新しき神の國を立つべし。故に基督

を信じ之を拜せよといふが基督教の主眼なりし如し。基督の教旨も之に加へて傳へられ、大いに重んぜられ、之を守るべきを説かれし如し。此の頃には基督は將に來らんとする世末的の神の國の準備をなしたるもの、弟子等に此の神の國を待ち、之に入るの備をさせたるもの、其の事業の完成は再來せん時に在りと考へしと思はる。

二、パウロの觀念 然るにパウロに至りて、基督教は茲に大いなる天才を得たり。基督は神人の間に何をなしたるか。其までは明白ならざりしに、宗教心の強きパウロは自ら基督を信じて、基督が自己の宗教に影響したる所を明白痛切に意識したり。茲を以て此の經驗によりて一定の觀念を作り、之を宣言し、基督教は茲に新發展をなし、人心の活動を一層豊富にし、後生の者みなパウロを仰ぎ、其の經驗を再現せんとし、其の觀念を實のものとし、斯くてパウロの基督事業觀は、基督教の一大要義となるに至れり。

パウロの觀念は其の書翰に由て知らる。曾てブルノー・バウエル Bruno Bauer はパウロの諸書翰をパウロ作ならずと論せしが、バウエルの議論は凡てヘーゲル哲學の原理を以て基督教の初代を解かんとしたるものにて、其の觀察あまりに粗に、其の材料

あまりに非科學的なりしかば、其のパウロ書翰否定は殆ど何等の勢力を有せざりしなり。和蘭の學者ローマン Loman 等またパウロ書翰を第二世紀の作とせしも、チェーピング派の祖バウル Baur は聖書について最も消極的なる批評を試みしに拘はらず、四大書翰をばパウロの作とし、其の後同派の意見は漸く和らぎて、牧會書翰即ち提摩太前書同後書及び提多書の外はパウロ書翰は皆な信すべしとなせり、今日ダブルユー・ピ―・スミス W. B. Smith やアルツル・ドレウス Arthur Drews の如きは、耶穌の存在をば否定すれど、パウロの書翰をばパウロ作として立論しつゝあり。余輩の見る所を以てすれば、牧會書翰は暫く之を措き、他の書翰に至ては、内容眞に照應一致して、到底之を異れる人格の所産と觀るべからず。囚中書翰即ち以弗所、腓立比、哥羅西、腓利門の四書の内容は、四大書翰の中に在るもの、發展なり。其の脈絡は綿々として續き、其の同一心意の活動の現彰は歴々として指摘すべし。以弗所書の如きは純然思想の書翰にして、而して其の思想は多少後代のもの、如く、書中また少しも歴史に交渉せるものなきを以て、パウロ作なるや疑はゞ疑ひ得られざるに非ずと雖も、其は小問題なり。此等の書翰には一個の人格の精神一貫し、矛盾なく支離せざるパウロの人格

を示し居れり (A. Deissmann, St. Paul: A Study in Social and Religious History 参照) 而して此等の書翰の中に現はれたる基督は何を爲せる基督なるか。パウロの基督は神と人々の間を感化して、此間を圓滿ならしめ、神を和め人を化し、人を神の諸子として、榮光を有せしめたる者なり。パウロの諸書翰の中堅といふべきは羅馬書なるが、此書に於ては、パウロは先づ罪の普遍的なるを明にし、猶太人も異邦人も残らず神の審判を受けて死すべきものなるを論じ、如何なる善行も難行苦行も人を義となさず、戒律嚴なれば嚴なるほど、罪を呼び起しこそすれ罪より人を救ふこと能はず、天下に一人の義人なきを指摘し、次で一轉して斯くの如く死は必至の數となれるに、然るに神は茲に新に人を義とする途を立て給へり。即ち耶穌基督を信するに由りて、其義を神は凡の信者に賜ふて區別なし。基督は其の血を流して信する者のために神の心を和らげたり。罪すら祖先一人の之を犯せしに由つて人類の間に入り死を齎らす、まして恩恵は一人に由て萬民に及ばざらんや。基督一人の義は之を信する凡ての者をして神より義とせらるゝを得しむべし。唯だ基督を信すれば神は其人を義とすべしと言へり、此の義とすといふ語に付ては議論あり。サンデー W. Sanday やガアター A. E. Garvie

等は何れも是は法律的の意にして、現に罪ある者なれど神は此の罪を問はず、之を義人として視るを謂ひ赦すといふと同意義なりと解釋し (Sanday, Romans in The International Critical Commentary; Garvie, Romans in The New Century Bible.) 多くの人は此の説を取れど、オール James Orr などは必ずしも其の意のみとも言はれずと言ひ (The Progress of Dogma) ベシホネン Horace Bushnell 等の説にては、義となすこと mak-ing righteous として、道徳的の意なりとなれり (Vicarious Sacrifice) 余輩はパウロの意は前者にして即ち基督を信すれば罪あるに拘はらず神は之を赦して義人の如く取扱ふといふものなりと思ふ。而して此の信するといふにも種々の意あり。パウロが基督の信仰により *δι' ἰσχυρῶν ἰσχυρῶν* は、單に基督を首肯し又は固執するといふに止まらず、全く我を忘れて基督に取り縋るを意味す。然らば基督を信するとき、如何に罪ある者も神に赦さるこいはば、人は罪を犯すも可ならずや、惠の増さんために罪に留まるべきか。パウロは答へて然らず、基督を信する者は罪に於ては死にたる者にて、義に於て生くる者なり、罪の方には死にたるものにて、神の方に生くる者なり、罪を犯せし舊き己れは基督と共に十字架に死にて、聖となれる新しき己れ基

督と共に復活したる者なり、基督を信するは、接木の芽が臺木につがれて、次第に一の生命となるが如く、初め異なる生命の者、基督の聖なる生命と一となるものなり、故に彼は肉に居らで靈に居り、基督の靈また神の靈は彼の内に在り、基督の靈なき者は基督に屬かざる者なり、然も初の内、信者は尙嘆き苦しみて今は幼稚なる此の新生活が成長し、救の完全せんことを待つ、聖靈は我等の靈の内に活動して此の救の進行を助く、斯くて神は信する者に榮を賜ふ。茲に至れば萬物は我等のものなり。神すでに我等を守る誰か我等に敵せんや。患難も困苦も迫害も飢餓も裸程も危険も刀劍も、我等を神の愛より離すこと能はず、生も死も天使も天群も今ある者も後あらん者も天上の者も地底の者も、我等を耶穌基督によれる神の愛より離らすこと能はざるなり。此れ羅馬書に説述せる所にして、パウロの基督の事業に關する觀念を明白に示し、實にパウロの基督教の中心の表明なり。他の諸書翰は其の受信教會又は受信人の事情によりて、種々異なる細目の教訓や經驗發表を含み居れりと雖も、要するに羅馬書の此の觀念はパウロ諸書翰に一貫し、其の前定真理となり、囚獄書翰にまで矛盾なく承けられ居れり。彼は實に此の基督教を傳へて熱切を極め、小亞細亞より南部歐羅巴より、

傳説によれば西の西班牙まで、其の偉大なる足跡を印して、終にネロ皇帝治下に其の暴虐の刀の露と消ゆるに及びしなり。

パウロの基督の事業に關する觀念を見るに、其の下に二つの思想の幹流あり。之が調和せる如く、又調和せぬ如し。所謂「義視」の思想と、「聖清」の思想となり。前者は法律的思想にして、後者は道德的思想なり。基督は信する者のために死にたれば、神は其の血によりて信する者を義視すといふは法律的思想なり。パウロは之を贖罪の祭物の原理に依るものとせり。曰く凡ての人罪を犯したれば神の榮を受くるに足らず、基督に在る贖によりて功なくして義とせらる、基督をば神之を立て、挽回祭物とせしなりと(羅馬書三)。然れども法律的思想といへばとて、パウロは神が罪もなき基督に他人の罪を轉嫁して之を罰し、信する者は之に由りて其の當然の報より免かれたりとか、又は基督の義を神は他の者に轉嫁し、如何なる罪人をも義として赦すとかいふことを言はず。又贖と云へばとて、古代師父等のやうに、基督は死して惡魔に代價を拂ひ、人を惡魔の手より贖ひたりとか、又はアンゼラムや十七世紀神學者等のやうに、神に代價を拂ひ、侵されたる神の正義を満足せしめたりとかいふことを言はず。パウロは

唯だ基督を信する者をば神は其の罪を赦すと言ひ、罪あるものの赦さるゝためには價を要す、基督の死は此の必要の價なり、故に基督は死を以て人を贖へり、宛がら贖罪の祭に於て、祭物の流せる血に由て、民の罪除かることせられし如く、耶穌の血に由て赦罪行はるゝに至りしを言ひしなり。此れガーヴィーもサンデーも取る所の解釋にして、スチーヴンス G. B. Stevens の諸著また之と同じく(The Theology of the N. T., Pauline Theology, The Christian Doctrine of Salvation)、アデニー W. F. Adeney また之と同じく(The Theology of the N. T.)、其他當今の學者は大抵かく解す。パウロを以て代罰贖罪説の祖となす如きは、即ち大使徒を誤る者にして、不敬大なりと謂ふべし。兎に角パウロには神は信する者の罪を其の恩恵に由て赦すことを思ひ、耶穌基督の死を以て此の赦罪を來らすために拂へる價なりと考へたり。

然れども神は人を赦すのみに止まらず、赦すのみにては救拯は尙一部を成就せしに過ぎず。茲に於て第二の聖清といふことあり。神は人を赦し、而して之を清むるなり。此の清めは復活の基督之を成就す。即ち久存の基督の人格の感化之を成就するなり。信するものは死より脱出復活せる此の基督の人格と接合し、接木の臺木と一生命とな

るが如く、基督と合一して、神にまで生くる者となる。曰く我等もし基督の死と同じく死にて彼と合一したらば、また彼の復活と同じく復活して合一すべきなりと(羅馬書六ノ五)此の合一といふが接合とか癒合とか譯すべき文字にして、生きたるもの、一に合ふを意味するものなり。斯くして彼は罪の束縛より脱出し、また罪を定むる律法の束縛より脱出す。律法は罪を救ふこと能はず、却て之を刺激誘出せしが、基督來り又聖靈與へられて律法の能くせざりし所を果たし、斯くて人は神の子となり嗣子となりぬ。パウロは羅馬書に於てかく教へしのみならず、自ら基督の靈の現在と其の清めの活動とを経験し、加拉太書二の二十にはもはや我れ生けるに非ず基督我に在りて生けるなりと言ひ、腓立比書一の二一には我には生くるは基督なり、死ぬるは得物なりと言ひ、哥羅西書三の三四には、汝等は死にし者にて汝等の生命は基督と共に神の中にかくれあるなり、我等の命なる基督の顯はれんとき、我等も之と偕に榮の中に顯はるゝなりと言ひ、同書一ノ十八には教會は基督の肢體にして彼は其の首なりと言ひ、羅馬書八章にも聖靈が常に信する者の心の中にて活動し、或は祈を助け、或は神の子の自覺を抱かしむることを言へり。

パウロの基督の事業觀は此れなり。基督は死を以て人の罪を贖ひ、復活に由て榮光を受け、己れを信する者と接合して之を潔め、其の救を完成する者なり。パウロの基督事業觀に此の二面あるは、蓋し其の血統と教養と又天啓とに由れり。基督の事業は神人の關係を整へたることなり。故に人格の大にして、神との交渉を多くの點に於て意識せる者は、基督の事業は自己と神との關係を、其のあらゆる點に於て正しうし、自己の全靈を救ひて、神と一點の不合不調和留まらざるに至らしめしを感ず。而して斯くの如き人格は、其の由て來る所深く大なり。パウロの如き人格には、隠れたる礎潜み、疾くより其の源となれるものあり。其の血統と又其の教養とは、彼自身の天賦の人格を成し、之を築き上ぐるに於て大なる要素となれり。是なくば彼は基督の精神に接しても、之に由てさまで大なる影響を受けず、神との關係に於て然かく大なる變化を來たして、死より生に移りしを覺ゆる能はず、其の意識は極めて朦朧たるべかりしなり。是あるが故に基督の救は彼を眞に生れ更らしめ、彼に新宗教を興へしなり。然れども唯だパウロの遺傳や教育や天性のみにては固より基督の事業を其の覺りし如く覺る能はざりしや論なく、彼の柔かにして感受的となれる靈性の上に、神の力、基

督の感化注ぎ來つて、彼をして基督の教に付て十分に感覺證悟する所あらしめしを思はざるべからず。然れども彼は遺傳と教養に由りてパウロのパウロたる所以のものを有し居しが故に、靈界の奧義たる基督の救も、此の性格の密度に従つて其の光を屈折して彼の中心意識に入り來り居れり。

其一は希伯來主義より來れる要素なり。パウロは自らも言へる如く、イスラエル人にして、希伯來人中の希伯來人、律法に由ればパリサイ黨の者、而して少年時代には當時の有名なる「ラビ」ガマリエルの門下生なりき(腓立比書三ノ五、羅馬書十ノ一、使徒行傳二ノ三)。彼は數千年間イスラエル人の間に流れていよいよ濃になりし希伯來主義を、其の血液と共に受け、又之を空氣と共に吸ひ、其の食物と共に攝取したり。彼の人格は根底の根底より希伯來的にして、坐作進退みな此の主義の發現なりしなり。然るに此の人格の中に基督の新らしき精神入り來り、之を透化して新しき人格となしたりたり。然り新らしき人格となしりしと雖も、其の人格成立の原則こそ新らしく、其の人格の組織こそ變じたれ、パウロは依然パウロにして、其の原則に由て支配せらるゝ内容、其の組織となれる材料は希伯來人なり。パウロの基督教に希伯來的の要素あるや當然なり。パウ

ロは自ら基督に依りて神との關係を正うせられたるを意識し、翻て基督の一生を觀、其の「メシア」にありながら辱められ殺されしを見、希伯來宗教の贖罪の眞理こゝに實現したるものなることを思ひ、基督の救の力は實に此に在りと信じたるなり。希伯來宗教に於て罪惡の意識いよいよ強烈となるや、人民は再びヤーウエの怒に觸れて、先の亡國俘囚にまさる疾苦を嘗むるに至らんことを恐れ、人民の罪の然く甚だしからざる前に之を除くの途を講ずるに至れり。個人には個人の罪を除くために、神の前に祭物を供へ、之を贖として罪の赦を乞へり。此の祭物は種々の物を以てせしも、犠牲を要すといふ思想は最も強く、生命の根本たる血を以て贖ひ得と信じ、血を流すことなくしては赦されずといふ句さへ存せり(利未記十ノ七、十一)。斯く個人は個人の贖罪をなすと共に、國民全體の贖罪の祭も行はれたり。即ち一年に一回、猶太の第七月の十日に行はる。此日には神殿に民を集めて聖書を読み、種々なる供物を献ぐ。祭司長は國民を代表し、沐浴齋戒の後、麻の粗服を衣て、他の日には入らざる至聖所に入り、己れの罪のため、又全民の罪のために、犠牲の血を惠の座に濺ぎかけ、かくて贖をなし、而して備へ置ける山羊には、全民の罪を被せて、之を曠野に放つ例なりき(利未記十ノ六、參照)。此

れバビロニアより歸還せし後の猶太教の祭事にして、國民の宗教思想を表現したるものなり。勿論舊約聖書中の贖カッパル（カッパル）といふ字は、掩ふの義にして、神が人の罪を掩ふて之を無きが如くし、之を問はざると、又祭司が人民の罪を神の前に掩ふといふと兩意あり。祭物の犠牲は罪を掩ふて神の歡心を得るためのものにして、之を以て罪を買ふの意には非ず、犠牲の死が萬人に代りたるものといふ意に非ざりしといふは、今日にては舊約の學者の定説と言て可なり。著者の手元に在るのみの舊約聖書神學と銘うてる書を以てしても、デヴィッドソン A. B. Davidson、ヤンネン W. H. Bennet、ビーペンブリング C. Piepenbring みな一致す。然れどもステイツンズ G. B. Stevens も認めざるを得ざりしが如く (Christian Doctrine of Salvation)、代贖思想はよしや舊約聖書正典中の新分子たる所謂祭司文書にさへ無く、又舊約聖書の正嫡の思想にも非ざりしとしても、然も遅き時代の猶太教の中には、織り入れられ居たることを思ふべきなり。即ちバリサイ派煩瑣神學の中、『タルムド』經典の中には、代贖の意義を以て犠牲を解し居たること必定なり。パウロは猶太人の斯かる精神の中より出でたり。耶穌が『メシア』を以てして、自ら罪なくして殺されたるは、正しく此の挽回即ち神の心

を和むるために血を流したるに相違なしと信せしなり。特に耶穌の死が猶太の逾越節の中に當り、羔を殺して祭物とする日と前後せしことは、パウロをして一層確實に此の信仰を抱かしめたり(哥林多前書五ノ七)。パウロの書中の挽回祭物(神和の供物)てふ語に付ては其の譯字について學者區々の説あり。されど詮する所、パウロは耶穌の犠牲に由りて、神は人類に對する心を和らげ、之を死に至らせず、之を義とし(赦し)之を清めぬに榮光を賜ふものなれば、基督の血は即ち人類の罪を贖ふもの、基督は萬人に代りて死にたるものなりと信じたるなり。

其二は希臘的思想より來れる要素なり。ハインリヒ・ユーリウス・ホルツマン Heinrich Julius Holzmann は其の新約聖書神學に於てパウロの救拯に關する道德的神秘的觀念をパウロ自身の直接の經驗の所産に屬すとす。此は確に道理にて、直接の生ける經驗なくしては、斯くの如き觀念は在るものに非すと雖も、然もパウロに斯くの如き觀念を呼び起し、パウロをして斯くの如き觀念を有すに至るの心地を造りしものは、實に其の接觸し呼吸せる希臘主義なり。パウロの生地タルソ市は實に希臘文化の中心の一なりき。彼は遍く希臘羅馬の文明の瀾蔓せる西亞細亞及び歐羅巴の各地を巡歴し

たり。此間に彼は希臘主義を吸收する所多く、自ら無意識の内に希臘化し居たり。元來彼の天性の中には、希臘の空氣に觸れて煥發すべき素質を有し居たるなり。故に彼には希臘文學の教育を受けし跡なく、其の引く所の古典の句や思想は、極めて平凡にして普遍的のものなりしと雖も、然も希臘風に接したるのみにて、其の人格は希臘的に思想行動し得たるなり。其の世界主義も之がためとすべき節多し。然れども人類を有機的の全體とし、一人の逆に由りて罪が世に入り凡ての人を罪あらしむると共に、一人の順に由りて義が世に入り行くを論せる如き、基督と信者とは、首と肢體の關係と同じといふが如き、何れか希臘風の思想ならざる。特に基督の死と合ひて罪の己れ死し、基督の復活と合ひて靈の己れ生き基督と接合癒着して一生命となるといひ、聖靈我等の内に在て活動し、我等を清め又神の子たる自覺を抱かしむといふに至ては、希臘風の思考法より發見し到達し攫取したる靈的大真理なり。

此の道徳的神秘的救拯觀の源が希臘主義なりしとしても然らずとせしめても、パウロの基督事業觀には二面あり、基督は其の死に由て神を和め、其の生けるに由て信者に道徳力を吹き入るゝとせられしことは明白なる事實にして、此の點は特に近代に於て、

多くの聖書學者、神學者が、從來の化石的見解を破り、パウロの眞精神を剔出せんとして、興味と熱心を以て努力する所なり。

三、パウロの後　パウロの經驗に於ては、基督は神人の間のことにて、特に神が人の罪を赦すといふ意志の上に影響する活動をなし、又人の内面を清むるために活動をなし、之にて神人の關係を全然圓滿ならしむるものなりき。パウロの精神には此の兩面の意識最も發達し、彼は基督に接する前には、此の點に於て如何にしても缺如せる所あるを覺え、煩悶の日月を送り居しなるが、基督に接して此の意識せる點に於て基督の交渉存し、基督の一生の影響茲に最も甚だしく行はれ、終に茲を全然新らしくし完くしたるを見たるなり。パウロの後、基督信徒は何れも此の二面に基督の活動影響を意識したり。神人の間の他の點に於ける基督の影響は、多少意識せられざるに非ざれども、其は第二位第三位乃至は殆ど問ふを要せざる價值のこととして忘れられ、此の二點に於ける基督の影響のみ強く考へられ、強く意識せられたり。然も之を意識するや、又其の個人もしくは民族の性により、或ものには一方が甚だ重くして強く意識せられ、他の者には他方が重くして強く意識せられ、或は唯だ一方の意識のみありて

他方の意識は全く忘れられたることもあり。其の相異の甚だしき時は猛烈なる論争とまでなりぬ。十六世紀宗教改革時代に於けるアンドレアス・オジアッデルがルーテルに對する攻撃の如きは其なりき。

パウロに踵を接して起りし教會の思想家の基督觀を見れば、早くもパウロの兩面の思想は二つの流れの如く其等の思想家の心に流れ入れるを見出だすなり。約翰傳及び約翰書翰を見るに、一方には基督を以て挽回の祭物となし、其の血によりて凡ての罪の清めらるゝことを言ふと共に、又一方にはしきりに道德的神秘的の救を言ひ、或は基督と信徒とは葡萄の樹と其枝との如しといひ、基督は弟子等の清められんために自らを清むといひ、基督は生命の麵麩、基督の肉を食ひ、基督の血を飲むものは、之に由りて生くべしと言ひ、基督の中に居れと言ひ、基督の中に居るものは人を愛す、人を憎む者は未だ基督の中に居らざるものなりと言へり。約翰文書に於ては神秘的道徳的の救拯思想が、重きを成し居るを見るなり。

之と對して他の方面に重きを置けるは希伯來書思想なり。希伯來書にては基督は單に祭司長なり。彼は民の罪の贖のために犠牲を献ぐるものなり。而して自らを犠牲

として献げたるものなり。かくて人民を罪の報より救ふとせらる。基督はまた天に在りて人のために取り做しをなす。希伯來書には殆ど此れ以上の思想なし。バイシュラック、Beyschlagは其の『新約聖書神學』に於て希伯來書にも清めといふ思想あると論ずれど、聊か當を失するが如し。希伯來書は確にパウロの宗教を受けたる人と思はる。然れども猶太人の猶太人たる著者は、パウロの基督教を全然猶太教風に解し、基督の事業に關しても、唯だ贖罪の式の手續を異れる形にて成就せしといふのみとなし居れり、彼はパウロの中より其の法律思想を引て極端に走りし者なり。

四、新約聖書の觀念の總括　されば基督の死が人の罪の報を代り受けたるものにて、基督死にたるが故に他の者の報は除かるといふはパウロの思想にもあらず。パウロは唯だ基督の死は神の赦を齎らす代價なりと言ひしのみなれど、然も此れをこても基督の唯一の事業とせるに非ず。パウロは基督の靈の活動して人を聖むることを言ひ居れり。聖書の中また基督の事業を單に死に由て人の罰を除くことのみ教へあらざるなり。基督自身の言に至りては、一層此の事は示されあらず。唯だ「我が來るも人を役せんために非ず、却つて人に役せられ、又多くの人に代りて生命を與へ、其の贖

「とならんためなり」(馬可傳十)といふ如き句あれど、之は前後の句との關係上より見れば、人に役する生活の大切なるを教へし所にして、自己の死の意義を示さんと欲して言へるに非ず、且つ此の贖といふ語も意味頗る不分明のものにて、畢竟するに耶穌は身を棄て、人を救ふといふ心を明にせしを根本思想とすべきこと確かなり。而して其の人を救ふは、己れ人の罪の罰を代り受くることなるや、耶穌の言には之を明にせる所なし。又耶穌の言の中に、最後の晩餐の麴麩と葡萄酒とを分てる時、汝等のために劈かるゝ我體なり、多くの人のために流す所のものなり(哥林多前書十一ノ二四、馬可傳)といふがあり。此も日本譯にては既に汝等のため及び多くの人のためと譯せる程の字なれば、汝等に代りて肉を劈き血を流せりと解するを要せず。されば基督の事業が専ら其の死を以て人の罪の報に代れるなりとは、基督の意識にも見出だされぬ所、福音書を編纂せし人々の心中にもなかりし所、最初の基督教會にも存在せざりし所の觀念なり。或は此の觀念基督より既に存在せしとしても、基督の事業を唯一に其所に在りせざりしは明々白々なり。

五、使徒的師父及び希臘師父

基督の事業は其の死を以て神を和めしのみならず

更に廣く大なり。茲を以て使徒の後、所謂使徒的師父の時代にも、基督の死の神和たるを高く調して、専ら之を宣傳せし跡は見えず。彼等は寧ろ基督の生活の全體に重きを置き、基督は其の生活の全體を以て人を救ふことをせりと考へたり。希臘師父に至りては、一層基督の一生其物を重んじ、基督は神の中の永遠の『ロゴス』(理靈)なり。現はれて人となれり。故に基督は神を現はせるものなりといふを其の觀念の要としたり。基督の死の力も勿論説かれざるに非ず。此れパウロの感化による所多きや明なり。パウロの感化は彼得前書の中、約翰文書の中、羅馬のクレメンヌ文書の中に既に豊富にして、基督教會はパウロ思想によつて出發し發展したる所深大なれば、使徒的師父も希臘師父も、パウロの如く基督の死を考へ、クレメンヌの中、バルナバ書翰の中、ディオグネトスへの書翰の中、イグナチウスの中、ユスチヌスの中、イレナヨスの中、オリゲネスの中、何れも基督は其の血に由りて我等を救ふ旨を記すこと切なり。特にイレナヨス及びオリゲネスとなれば、之に付ての思想も稍明白なり。イレナヨスは基督は其の血を以て我等を贖ひ、我等の靈のために其の靈を與へ、我等の肉のために其の肉を與へ、囚へられたる者のために其の生命を身の代料として與ふと言へり。されど彼は

又、基督は神に對して全き柔順を果たし、之に由てアダムの不順を抹除し、其の結果として罪は亡ばされ新らしき靈の生命分ち與へられ、人は茲に不朽のものとせられ死より救はると言へり。彼には法律思想もあり、道德神秘思想もあり。後者却て其の心中に優勢を占めたるなり。オリゲネスは基督の死は惡魔へ拂ひたる代價なり。人は罪を犯して以來惡魔の手に落ちたれば、之を回復するためには代價を拂はざるべからず、基督は之を果さんため死にしなり。されど惡魔は無罪なる生魂の前には立つ能はざれば、基督を己がものとする能はざりしに、欺かれて基督の死を代價とし人を手より放ちたるなりと言へり。

斯く基督の代罰代死の思想は、よしや初より存したりしとしても、基督の事業の全體もしくは主要の點とは見られざりしに、中世以後に至りて此の觀念は基督教會の精神を支配し、基督教の中心を茲に在りと思惟し、天主教會は勿論、プロテスタント諸教會に至るまで、盛に此の觀念を耕養し主張し、之を正統の信仰となし、甚だしきは之に違ふ者を迫害さへしたり。此れ何に由るか。此れ又國民性及び個人の性質によりて、宗教の重心點一方に傾きしものなり。

六、拉典教會の觀念　基督教は早くより南歐羅巴及び北亞弗利加に弘まりしが、西羅馬帝國は第五世紀の後半に覆滅し、羅馬教會は精神上の主宰たるより、又人民の上に權力を有するに至り、其の勢力遙に東方諸教會の上に出づるに至れり。且つ又西方北方の蠻族へ基督教を傳へしものは、皆な羅馬教會にもあり、羅馬教會は自ら要求せし如く、事實上基督教會の覇者の觀ありしなり。然るに羅馬人の性質は如何と云ふに、古昔より其の舊羅馬の宗教に熱心にして、宗教に依て社會を立てただけ、頗る宗教的性情に富みし人民なりき。且つ又彼等は意志猛烈なり。爲さんと欲する所を必ず行ふの力あり。従つて主觀的なり。萬事自己より出立して物事を考へ、自己を本として物を見る。彼等は秩序を愛し、法律を好む。彼等の世界歴史に貢献したる最大のものとは是なり。茲に基督教入りて、此の中にて基督教發展したり。かゝる人民の意識に於て最大最要とせらるゝ所が基督教の重心なりとせらるゝに至りたり。尙此の基督教の重心を意識する時の大なる刺激となりしは、其の初に於ける羅馬の状態なり。基督教は恰も古昔羅馬帝國の眞盛の時に其の天下に入りたり。榮華の花は咲きも残らぬ風情にて、其の下には羅馬文明の倦憊の心すでに存し、古宗教は信仰を失ひ、古道德は

瓦解し、人心は混亂し、離裂して、精神はもはや拾收すべからざりしなり。茲を以て之に入り行きし基督教は、勢ひ此の時代の精神の色を帯び、陰鬱を加へ、厭世の傾向を有せざるを得ざりしなり。

されば羅馬教會の基督教は、羅馬人の意識に従ひたる重心を有し、之に従つて組織せられたり。彼等は其の法律を好み、行政に優れたる性質によりて、教會といふものを大いに重んじ來れり。之と共に其の意志の強きもの、常として、罪惡を意識すること猛烈なるより、罪惡の感激しく、罪の赦しといふ要求最も切なりき。希臘人は物事を神の方より考ふ。故に神は人を救はんとために肉に入りて人となり生れたりと思ふ故、人間の罪は宗教上に甚大の障とならざりき。然れども羅馬人は人の方より物を考ふ。己が罪最も深くして去るべからず。之を如何にかせずんば神との交通は一步も抄取らざるを感せざるを得ず。此れ罪の赦しの要求切なる所以なり。而して罪の赦してふことも彼等には容易に得らるゝことに非ざりき。何となれば彼等は秩序を受す、組織の念に充つ。神の性格は定まりて犯すべからず、神の主義は堅くして揺ぐべからず、神の天地は一點一劃之を破るべからず。罪を犯せる者は必ず罰せらる。若し之を赦さば神

の性格は亂れたるものとなり、其の主義は無みせられ、其の國は崩れん。神は先づ罪を償ふ途を立て、人を赦さざるべからずとは彼等の思はざるを得ざりし所なり。

茲を以て基督の事業についても、此の思想によつて觀念せられたり。アウグスチヌスの神學は實に教會のこと、罪のことなりき。アウグスチヌスの如き大人物にさへ、教會は神の都なり、人は之に入るに由りて救はると思はれたり。勿論アウグスチヌスには教會に付て二つの思想あり。一は羅馬教會を指し、他は靈的の基督信徒の全體を指す。此の思想は並存し錯綜して分つべからずと雖も、然も此世の教會といふを重んぜしは明白なり。されば基督の事業は何ぞといへば、彼は教會を立て、使徒ペテロを其の首に置き、其より永へに人類を此の教會に於て祝福することを以て其の主要なるものごせしなり。教會は基督の體なり。之に合一するもの幸を受くといふが其の思想なりき。基督の代罰代死の思想は、ヒラリオス・アムブロシオスにもあり。アウグスチヌスは基督は罪なくして我等の罰を負ひたりと言へり。

七、満足説の完成 此の羅馬教會の拉典人思想は次第に固くせられ、十一世紀の坎ターベリーのアンゼラムに至りて、終に一定の學説となりたり。アンゼラムはも

と伊太利の人なり。其の思想は飽くまで拉典氣質を發揮せり。其の説の要に曰く、凡て理性ある受造物の意志は神の意志に順ふべきものなり。若し神に對して此の名譽を歸せざるものは神のものを取りたるものにて此れ即ち罪なり。罪を犯せるものは其の取りしものを返すのみならず、又満足を得しめざるべからず。罰は此の満足なり。人間同志は罪を赦すも、神は私人に非ざれば赦さず。若し妄りに之を赦さば此れ私情に従ひたるものにて正しからず。然らば如何にせば赦さるべきか。十分の恭順を盡して神より取りたるものを神に返すと共に、相當の罰を受けて満足を來さざるべからず。人は罪を悔い身を苦めなごして有らゆる途を盡して神を満足させんとするならんが、其は唯だ現在及び未來の恭順たるに止まり、過去に犯したる罪は抹すべからず。人もし全世界を自らの持物として有し、之を神に獻ずるとも、唯だ一つの罪を償ふにさへ當らず。然らば人は満足を來たさざるべからざるに之を來す能はざるか。茲に於て神ゴッドの必要あり。基督は人となりて、人として神に歸すべき恭順を全うしたり。現在及び未來の義務は之にて盡くされたり。然れども尙人類の過去の罪あり。茲に於て基督は罰を受けて死にたり。若し基督が罪ある人ならば、其の罰は當然受くべきものを受

けたるなれど、基督は全然無罪なるが故に、苦痛や死をば受くべき者に非ざるに、自ら好んで之を受けたり。彼は人類となれるが故に、之は人類の爲せしことなるを以て、之にて満足を來たし、神は人の罪を赦しても不義ならざるに至り、神の名譽は茲に回復せられ、赦罪こゝに全うせられしなりと。

八、其後の觀念　其より後此の思想は人心に抱かれて或は幾分折り合ひの悪しきを感じられざるに非ず。アペラールの如きは、アンゼラム説の批評として述べしにはあらざるべけれど、何人も無罪なる者の血を代價として申し受くるいはれなく、無罪なる者を死に定むるの道理なし、況や神は世界の調和の代價として其の子の死を許すべけんや、贖は基督の苦難に由て我等の内に燃やされたる最大なる愛にして、我等を罪の束縛より救ひ出だすのみならず、子たるの眞自由を與ふと言ひ、次第にアンゼラム等の説が、神は人を罰することを得れど、赦すことを得ざる理に陥るを非難する者も起りしが、然も満足説は其後教會内に大勢力を占め、牢乎として拔くべからざりしなり。

ルーテルもカルヴァンも此の點に於ては天主教會の觀念を繼承し殆ど改めたる所な

し。特にカルヴァン派に至つては、其祖カルヴァンが拉典人たるだけ、此の思想はいよいよ極端に傾き、十七世紀神學者の如きは、罪の罰と其の贖について最も嚴峻なる觀念を抱きたり。天主教會の中には、フリーゴ・グロッチウス十七世紀に於て政治贖罪説といふを唱へて、教會の信仰を擁護せんとし、また法律思想を發揮したり。其の説にては神は主宰なり。罰を課する目的の達せらるべき他の途を立てて罰を課せざるの權利を有す。其の目的とは即ち秩序の維持と未來の犯罪の豫防となり。基督の死は此の目的を達す。基督の死は罰には非ず。されど赦罪の他の條件なり。基督の死は最も強く罪は如何なるものに當るかを示すものにて、罰の摸例なりと言へり。

九、何故法律説満足説は勢力を占めしか。此の法律説、満足説は、今日と雖も全く亡せたるに非ず。二十年三十年前までは少しも衰へずして或は昔のまゝのものとして、或は種々の形を取りて現はれしなり。何が故に此の觀念は然かく人の心に潜入し、之を捕ふるの力強きか。此れ法律が根底甚だ深く堅きものなるを以て、法律の原理に由れる事實とせられたるものは、又非常なる力を有するに由るなり。抑も法律は人類が社會を成して生活するに至りて以來、相互の幸福、全社會の幸福を立つる爲に人類

に由て造られたる習慣の制定せられたるものなり。其の淵源や真に深遠なりと謂はざるべからず。道徳や法律を以て、唯だ或時代的一幕の間に在る者どもが、任意に定めたるものと思ふ者の如きは、固より道徳や法律の理に闇き者にして、斯かる種類のことを語るに足らざる輩なり。而して斯くの如くして成りたる法律には、原初より必ず罪に對する報復といふものありき。是れ其の社會の幸福の維持上なかるべからざるなり。茲を以て動物の社會にも、其の群居的の種類のものには必ず是が存在せるを見る。人類の社會の發展の途上には、此の原理より種々の習慣起りたり。例へば原初時代に於ては身體や財産の一部に毀害を加へしものに對しても、直ちに之を殺戮して報復としたり。此の習慣の一部は近頃までも各所に残り居れるものあれど、大體に於ては此の習慣は發達して所謂目にて目を償ひ齒にて齒を償ふといふ主義となり、其間に贖罪の習慣も起り、犯せる罪に對して家畜、物品、もしくは金錢を出だして報復を免がるゝに至りぬ。此の習慣は民族と民族との戰爭の間にも行はれ、戰敗者は戰勝者に對して物を贈りて其の打撃を免かれ、或は俘囚を贖ひたり。或は代贖といふとも行はれ、親の罪を子が代つて報復せらるゝことあり。又戰敗種族中より幾人の者出でて戰勝者

の報復を受け、之に由て全種族を救ひしことあり。斯くの如き習慣は多少の形を變へて、吾人に接近せる時代までも残り、時に隨つて現はれ居たるなり。今日の法律の刑罰は此の古き習慣より來り、學者によりて新意義を附せられたるもののみ。人類社會の事かくの如し。然るに翻て神と人との事を見るに、此所も確に社會に非ずや。靈界は神在し人存し、決して亂雜混沌たる集合體ならず、組織整然たる大社會なり。社會原理は茲にて最も善く行はれつゝあり。既に然らば茲にも習慣の原理、法律の原理また行はれずしてあらんや。犯せる罪に對してまた報復なかるべからず。然も神と共に一社會を構成せるを意識し、此の社會に於ける罪を意識したる人類は既に進歩の高き階段上に在りたるものにて、贖罪の習慣を有し、代贖の習慣を有したる人類なりき。茲を以て神に對してもまた贖罪をなし代贖をなせり。イスラエル人の贖罪祭また全く此の意なかりしとはすべからず。されば代罰に關する觀念は、全く法律的思想より來りしものにして、法律が眞理と認めらるゝ限りは全然之を掃蕩するに能はざるべし。然れども代罰の思想は、人間の有形社會を律する法律原理を、精神社會たる神と人との間に適用したるに於て誤れるものなり。此は後に言はん。

十、満足説法律説以外の觀念 以上は基督の事業に關する多數者の觀念なり。然れども此は前に言へる如く個人及び國民の性質と事情とにより、特に基督の事業の一面のみを意識し、之を重大視したるものにて、基督の事業は之に盡きず。されば性質事情の異なるものは、基督の活動が己れの精神生活を影響したるを他の方面に於て意識するなり。古よりアンゼラム一流の觀念にては、自己に於ける基督の事業の經驗を適當に言ひ顯はされずと思ひたるものは、之に反對して其の不滿の點を表明し來れり。前に擧げたるアペラールの如きは其なり。十六世紀宗教改革の際には、アンドレアス・オシアンデル、猛烈にルーテル派カルヴィン派に反對し、基督を信じて之を受くる時は、事實に於て基督自身の本質的の義を靈魂に注入せらるゝ、決して義を嫁せらるゝに非ずと論じたるも其なり。十六世紀の末ソーチヌス派が正統説に反對し、神の性は愛が本質にして義徳は自由任意の徳なり、故に神は如何にしても愛せざるを得ざれど、必ずしも罰せざるを得る也。基督は我等の罪の爲に死にたれども、我等を罪の行より離れしめんためなりと論じたるも其なり。近代に至りては、世界の基督信徒は漸く拉典思想の桎梏より脱出し來れり。物事を拉典人の思想の型に入れて思惟したる風は次第に衰

へて、神人の關係を有のまゝに視、各自の意識に従つて觀念を作るに至れり。故に満足説は次第に勢を失ひ、スチーヴンスの『基督教救拯教義』の中には、著者がカフタン Kofan より受けし私信の中に、獨逸にては今日の神學者には、代罰の教義を舊き意味のまゝ唱ふるものはや無し、但し神學者は積極的に之を明白に否定もせず、或る代表者は一種特別の理解し難き意味にて之を唱ふとあり、佛蘭西のメネゴール Menegoz も佛蘭西プロテスタントには此の説を辯護して注意を引くほどの代表者なしと報せり、米國にてはシヤード Shedd 及びストロング Strong 以後之を主張せる著しき述作を見ずと註せり (Stevens, Christian Doctrine of Salvation)。唯だ蘇格蘭にては尙デンニー Denroy の如き人あり。盛に代罰満足の説を唱ふ。ファレスト D. W. Forrest も此の説の人なり。先頃死去せしオール James Orr も此の説の人とせらるれど、其の『基督教神觀世界觀』 The Christian View of God and the World や『教義の發展史』 The Progress of Dogma を見れば、其の法律といふは道德法のことにして、之あるは認めざるを得ずといひ、基督は罪が人間に齎らす害惡の苦味を経験し、神の法律的義を認めて之を崇め、神の道德義を満足せしめたりといふにあれば、之を代罰説と言ひ難きを覺ゆ。

斯く法律思想は次第に衰へて、基督の事業は廣き立場より見られつゝあり。獨逸及び英米の基督信徒の中には此の方の多くの代表者あり。シエライエルマッヘル Solheim-ermacher は、十九世紀に於て基督教神學を舊來の形式より救ひ出だし、人心を直ちに神人關係の眞理に透入せしめ、其の意識を實際に抱かしむるに非常なる力ありし人にして、基督の事業に關しても其の觀る所獨創的なりき。彼は謂へらく基督は其の精神に圓滿無碍の神意識を有せり。彼は其の人格の引着力によりて人を自己に來らせ、人の精神の上に働きかゝりて、此の自己の有する心中の聖徳と祝福を人々の精神の中に注入し、自己と同じ神意識を有して平和幸福なるものとす。基督はかくて神との交感なる此の新生命の源なり。人既に基督に引かれて、此の聖徳と祝福とを分ち與へらるれば、彼は茲に新らしくなりたるなり。彼は尙罪あらんも、然も罪は其人の性格の中心より驅逐せられたるものにて、原則としては根本より抜き去られたるものなり。故に神の方は其人を見るに、其の今日實際の罪ある所を見ず、其の人の基督と關係せる所を見、其の人の理想として在るべき所を見、其の人の新しき生命の完成する將來を見、之を赦し、復た罪人として取り扱はざるべく、其人自身の方は如何なる苦痛も禍

も内部生命の調和を破らず、却て其に由て鍛はるゝなり。基督は祭司長として人間生活の中に入り、人間に全然同情し、自らは全く罪なくして、而して罪の結果なる禍害を受けしも、其の苦痛の中にも神との聖なる福なる交感を少しの亂るゝ所なく維持し、之に由て心中平和に充ち、斯くて罪をば原則として覆滅し、其の自己の内部の生命を周圍に發散し、罪ある者を引きて之を高きに致し、之を自己と同じき神との關係に致し、斯て人をして肉の上に靈の勝利を得しめ、外部の不幸も悲惨も其内的生命を搖かすに至らざらしめしなりと。此れ其『基督教信仰』Der Christliche Glaubeの思想なり。

アルブレヒト・リッテナル Albrecht Ritschl また其の『義認と調和の基督教々義』Die christliche Lehre von der Rechtfertigung und Versöhnung; Engl. Transl. The Christian Doctrine of Justification and Reconciliation に於て同じ傾向の觀念を述ぶ。今之をステューヴンスの撮要したる所に由りて(『基督教救拯教義史』)擧ぐれば、(一)神の怒は唯だ世末的觀念のみ。唯だ頑剛にして終まで悔改せざる者に對してのみ神は其の怒を顯はす。人類は必ず神の怒の的なりといふ者に非ず。(二)聖書の公義及び正義といふ語は神の中の報復的又は裁判的品質、即ち人を罰する性向又は衝動を指すものに非ず。其の恩惠の

經綸の固持を指せる語なり。(三)故に神の中に在る刑罰的要素として考へられたる公義の満足なるものが、赦の起る前、又は赦を與ふる條件として、存在すといふは、必然的のことにあらず。否可能的のことにすらあらず。神の公義の満足とは其の永遠の愛の經綸の實現を云ふに外ならず。(四)基督は其の生活と其の死とに於て、神との僭伴を終始破られずして維持したり。人をして神の愛と其の父たることゝを自己と同様に意識するに至らしめ、神の子自身が享受したる所の神と僭伴の同じ意識に入らしめんとすること、是れ其の活動の一大目的なりき。(五)此の目的は神の國を地上に建つることによつて實現せらる。神の國は神と同じきものゝ社中なり。神と父子の關係を意識せる生活をなし、基督の精神を分ち有するものゝ協同なり。(六)基督の苦痛と死とは其の神を顯現し且つ完全の生活をなすことに於ける義務を果たすの途に在る經驗なり。(七)基督は人を自己の神に對する關係と同じ關係に導きて罪の赦を得しむ。即ち基督教社中の者となして之を得しむ。(八)基督は聖なる生活を顯現し實現することに由て罪の罪たること其の憎むべきことを現はしたり。聖なる生活を實現すれば、罪は其の反對として明に現はるればなり。此れステューヴンスの摘要する所にして最もよく要を得

たるものなり。リッチャルには基督の柔順も其の死も自己の意識せる召命の遂行中のものなりき。彼は自ら人を救ふ神の恵の經綸を認識し、自らは此の經綸を成就するに當り救はれたる者其の國を建つることのために召されたるを認識したる者なりと考へ、少しも刑罰とか代罰とかいふものゝ在るを肯んせざりしなり。

米國にてはホレース・ブッシュネル Horace Bushnell 一家の言をなして基督の事業に關する觀念を述べたり。ブッシュネルの説は前後多少の變遷あり。自ら之を公言せり。然れども此の問題に關する二つの重要な著作『代理犠牲』 Vicarious Sacrifice 及び『赦罪と法律』 Forgiveness and Law に由りて見るに(此二書今は一題名の下に併され居れり)、後書は前著を補ひ幾分訂正したるものなれど、其の大意は一貫せり。彼は代理犠牲てふものは存在す、此は他人の受くべき罰を代つて受くるといふ意味に非ず、愛の原理に依るもの也。對手の惱みの中に入り行きて、其の重荷を分擔することなり。母が子のために子の當るべき苦痛を自ら嘗め、友が友のために犠牲となり、愛國者が國のために犠牲となるが如き其なり。基督の生涯は其なり。此の代理犠牲は天地の原理なり。神も聖靈も天使も基督信徒も皆な此の原理の中に活動す。基督は其の生活と死とに由

て人を改造したり。基督は神が人に於て活動せるものなり。彼は自ら代理の犠牲となり、人を改造するために苦み且つ死にたり。基督の人格よりは人を新にするの力溢れ落つ。其の人に對する同情、其の人と共に苦む苦痛、凡て其の人格の發現よりは、此の力溢れ落ちて人の靈の上に活動す。基督の力は道德力なり。道德力は權力とは異り。又單に模範にも非ず。人を新にする力なり。基督の死は罪の代價として拂ふ罰に非ずして、罪ある人の性格を新にして、罪より來る報復より免れしむるためのものなり、而して基督の經驗に於て、終始存在し活動せるものは神自身なれば、其等の活動は皆な神自身の表彰なり。其所に活動し又苦むものは人間的要素にあらずして神的要素なり。人間的要素は單に透明なる硝子の如きものにて、神は少しも遮られずして鮮明に見らるゝなりと言へり。

近年に至ては基督の事業を道德的に見る傾向ますます盛にして、法律思想と雖も道德思想を多分に加味するに至り、神は人の罪を基督に衣せて之を罰し、其の報復せざれば已まざる法義を満足させたりといひ、若くは基督の死を罰の表號として人に示し、其の道德政治を維持すといふ思想より變じて、基督の死に由て神は其の道德性を満足

させたりと言ふに至れり。マクレー、ド・カムペン McLeod Campbell が、神は罪を赦さんとすれど之を妄りにすべからず、若し妄りにせば神は道德性なきなり、罪を赦すには之に相當均衡せる懺悔なかるべからず、然も人は此の懺悔を十分に充たす能はざるが故に、基督は自ら人類の罪を懺悔し、十字架も受くべき當然のものとして之を受けたり、神は之に由て満足し人を赦すと言ひ (The Nature of Atonement)、或はスコット・リジェット John Scott Lidgett が、神は父なれば人に向つて子道を求め、其の聖なることごと、これに對して罪の厭ふべきことゝが、認められ且つ顯彰せらるゝことを以て満足す。基督は此の肯認と顯彰とを全うして神の性を満足せしめたりと言ひしが如きは (Spiritual Principles of Atonement)、此の思想の最も進歩し成熟したるものなり。されど是等は尙半上落下の思想なるを以て、之を斥けて基督の感化こそ救の力なれと言ふ人加はりつゝあるなり。

基督の事業は決して神人關係中の或る一點に繋るのみに非ず。彼は唯だ死なむために來りしに非ず。唯だ罪の罰を除かんために來りしに非ず。彼は實に人の靈魂を救はんために生き、救はんために死にしなり。

第三 耶蘇の事業の眞觀念

吾人は耶蘇の事業について正しき觀念を造らざるべからず。古人が耶蘇の事業として觀念せし所は、其の事情性質によりて範圍狭小となり、中心の傾き偏せるを見たり。吾人は此等古今の觀念を概観し、自己等の經驗を之に合はせ、茲に觀念を造るを得るなり。吾人の觀念する所にては、耶蘇の事業は其の生活の全體が、吾人の靈魂に影響し、神人の關係に影響するものなり。即ち耶蘇が在世中に活動したる所、又後世長く活動せる所、みな耶蘇の事業なり。然らば其の事業は如何なる法式に依りてせられ、如何なる内容を有するか。

一、耶蘇の事業の法式

凡て活動には必ず法式あり。或る勢力或る原理が活動して結果を起すときには必ず何等かの途に由てせり。若し此の法式なくんば其所に活動せる勢力もしくは原理は知らるゝものに非ず。否何等か活動の法式の見るべきものなくば、如何にしてさる勢力

原理の存在することを許すを得んや。勢力原理あらば必ず活動す。活動すれば必ず法式あり。されば此の三者は決して離すべからざるなり。

耶穌基督は存在す、而して活動す。即ち事業をなす。此の間に活動の法式なかるべからず。此れ即ち耶穌基督は如何にして活動せしかといふ問題なり。凡て事業は人格の活動のことなるが、耶穌の事業を見るに、其の人格が有限の物を介して活動し人に影響せるものと、其の人格が直接に活動して人に影響せるものとあり。而して其の有限の物を介せる間接の活動は、耶穌の肉體に於て此世に在りし間のことに限り、其の直接の活動は、耶穌の在世の時より始まり、基督教の歴史を流れて之を造り、之を未來永劫に及ぼしつゝあるものなり。

甲、耶穌の人格の間接の活動　耶穌の事業は耶穌の人格の活動なり。耶穌の人格の内部に在るものを外に持ち出だすことなり。而して之を持ち出だすに當りては、有限の物を介すると頗る多からざるを得ず。耶穌は人なり。人としての條件に左右せらる。彼は全知なる能はず、全能なる能はず。何となれば人は有限なるが故に全知全能な

る能はざればなり。彼は肉體を備ふ、故に飲食もせざるべからず、死なざるべからざりしなり。従つて此の有限性に依りて活動せり。然かのみならず同じく有限なる人類に向つて活動するには、有限の途に由る所多からざるを得ざりしなり。絶大無限の神が人に向つて活動するにも有限の途によらざるべからず。基督教師父の時代の希臘學者は、無限なる神は有限の世界に入るを得ずと論せしが、基督教師父は無限なる神は自らを條件して有限界に入り人となれりと辯じたり。基督教に於ては神は人を救ふために肉體に入り、人たるの條件を具へ、之に依りて人を救ひたりと信じ來りしなり。人の人格に至ては一層有限の條件の中に在り、此の條件を通して活動せり。然り有限の條件のために活動を遮らるゝこともあれど、又有限の條件によりて人格が活動するなり。特に人格次第に高くして、有限の支配を受くること漸く少く、言ひ換ふれば其の人の靈が勢を加へて、肉の支配弱くなり來れば、萬事肉に従はで靈に従つて歩み、其の生活は靈的のものとなるが故に、其の時の肉は既に靈を壓抑制御せざるのみならず、却て靈に役せられ、靈の用の器として働き、靈の事業をなす。此れ人間が有限の條件の下に在りて、有限の條件によりて活動すといふの意味なり。耶穌も人なりき。

曾て有限の世界に住み、凡て有限の條件を受けたり。されど彼の人格は此の條件に遮られず、凡て有限の制御を脱して、心中には聖と平和とを湛へ、何ものも外部より之を攪亂する能はざる境地に達せしが、然も彼は有限の條件の中において、此によりて活動したり。其は如何なる活動なりしか。此れは種々ありしに相違なし。決して單純一様ならざるべしと雖も、吾人の生命に關係あるものゝ重要なものを擧ぐれば(イ)は、彼は教訓をなして活動せり。(ロ)は彼は實行に由て(人格が)活動したり。

イ、耶穌は其の人格の活動をなすに當り、言によりて之をなせり。此れ自然のことなり。言語は人類が其の人格を活動するに由て生じ、活動するためのものとして用ひらるゝなり。故に内に在る人格は、言に由て其の内容を外に持ち出だし、他人の靈に訴へて、他人の人格の中に自己の人格内容と同じものを造らんとするなり。即ち思想を交通するなり。耶穌は其の内部に鬱勃たるものを有せし故、勢ひ之を發表し、他人の中に之を造らんとしたり。彼の言は生活の萬端の事にわたり、起居飲食の用を辨じたること常人と異なるなかりしと雖も、其等の多くは勿論問ふを要せず、唯だ彼が神人

關係のことに付て自己の内部を發表し、他人に之を傳へんとしたる所に價值あり。此れ即ち耶穌の教訓なり。

耶穌の教訓は同觀福音書の中に收められたる記録によりて之を知る。此の外約翰傳や、使徒等の書翰中に主の誠として散記せらるゝ所や、非正典の福音書や、『ディダケー』や其他によりても尙知ることを得れど、其等は正確なる點に於て(使徒書翰中のものゝ外は)同觀福音書中のものに及ばず、且つ其等の材料と雖も、其の指す所は同觀福音書中のものゝ精神と吻合すれば、之を材料として取るの必要もなきなり。同觀福音書中の耶穌の教訓は、文書が出所の信すべきものなると共に、教訓其自身がまた何れも調和して耶穌の人格を綜合觀念するを得しめ、而して更に翻つて此の觀念に照して其等の教訓を見れば、一つゝ之と相應合して軋轢する所なし。

耶穌の教訓は分量に於ては多しといふべからず。僅に二三年の間に弟子等が其の口より聽きたる所を記憶に従つて記し傳へたるものゝみ。耶穌は又自ら教訓を書かんとせず、或は之を書き傳へしめんとて書記を擧げもせざりき。唯だ言ひ棄てにして之を顧みざりしなり。彼は又深く思索を凝らし、論理を立て、其の教義を説かざりき。

唯だ思ひ出だせるまゝを時に隨ひ教へしのみ。彼は極めて卑近なることを説き、自己に近き天然、自己の接する人間生活を話題とし、人生に接近せる事のみを説けり。彼の聴衆も粗朴の野人のみなりしなり。斯く彼の外形的特色は一見貧弱なりしも、然も其の言や活氣に充ちて生動し、簡約にして而も内含豊富、又自づから人口に膾炙せざらんば已まざる思想を以て充たされ居しが、更に深き特色あり。彼の教訓は日常卑近の事を材料とせるもの多く、且つ時代の小範圍の人民を對手とし、其の色彩濃かなるものあるに拘はらず、實に普汎的なることは是なり。一たび其の精神に入れば、何れの國、何れの時代にも、躍々として活くる真理、悠々滞りなく適用せらるべき真理なり。又上下貴賤となく通用する所の道なり。之と共に彼の教訓は少しの修辭もなく結構もなきに拘はらず、實に權威あり。何人も其の前に頭を下げざるを得ざる趣あり。時人をして驚かしめしとあるは道理なるを見る。耶穌の教訓が人類に如何なる影響を與へしかの問題は後に論ずべし。茲には唯だ其の表面の特色を言ひしのみ。

然らば耶穌は如何なる教訓を垂れしか、之を簡畧に記するは甚だ困難なり。何となれば耶穌の教訓は悉く斷片的にして、一大系統を成すに非ず。馬太傳と路加傳すでに

其の教訓の前後關係を異にし、従つて教訓の意義を異にする所あり。吾人が耶穌の教訓を集めて、耶穌の思想の系統を作らんとすれば、其所に此の系統より洩るゝ材料も少からず。而して其の洩るゝもの果して耶穌に於て重からざりしかは確に斷言すべからず。又吾人が造りたる系統が果して耶穌心中の系統なりしやも疑なき能はず。今の學者が好んで耶穌の言を集め、耶穌の宗教を再建するは、聊か危殆の感なき能はず。然れども多數者が福音書を読み、聖書全體を読み、將た時代の思想を究め、前後の思想を味ひ、耶穌の意識ならんと思ふ所に従つて、中心を立て系統を組織するは、此れ最も當を得たるものにして、此外には致方もなきことなれば、茲には唯だ簡畧に耶穌の教訓の大目綱要を擧げんに、

耶穌は公生涯を始めて其の活動に着手するや、先づバブラスマのヨハネの傳道に倣ひて、神の國は近づけりと宣告せり。當時猶太人には神の國について多様の思想ありたり。一は現世の王國にして、古ダビデ王がイスラエル十二族を統一し、一王國を建て、國威四隣に張り、國內太平なりし如く、神より選ばれたる王者興りて、羅馬の軛よりイスラエル人を救ひ出だし、之を獨立の國民とし、猶太教を振興し、善政を布く

に至る。其時イスラエルは天下に仰がれ、人々は各々の無花果樹の下に樂み、敵を足下に踏みて在るべしと、之を以て神の國としたる思想なり。然れども時の勢ますく、非にして、猶太人の屈辱は甚だしけれども、羅馬の統治は金城湯池いつ破らるべくも見えす、救は此世より來る望全く絶えたるにより、これを見しものは、救の天より異常なる途によりて下ることを待ちたり。此を以て二に神の國は世末的の國なりとする思想ありたり。イスラエル民族かくて何時までも苦み悶え居るべきものに非ず。異邦人の時はもはや満ちたり、將に世の終末は來り、天變地異しきりに至りて後、天より『メシア』(救主)は雲に乗りて現はれ、此の世界の現組織を根本より顛覆し、神の民に仇をする者を滅ぼして茲に新らしき王國を建てんとすと惟ひし也。舊約全書中の但以耳書の思想の如きは之を代表す。基督に前後して自稱『メシア』は許多現はれ、猶太の獨立を計りて天下を擾亂せしこと少からず。使徒行傳五章三十三節以下に、當時の徳望ありし猶太教の『ラビ』ガマリエルが、曩にテウダ起りて自ら誇り、其後戸籍調査の時ガリラヤのユダ起りて民を誘ひ従はし、が、何れも亡びて其の徒も消滅せりと言ひしは、時日の錯誤はあれど、兎に角自稱『メシア』の騒動の事なり。されど此

等は此世に王國を建てんとせし種類の者なり。然るに耶穌に先だつて『バプテスマ』のヨハネ現はれ、神の國の接近を叫びしが、ヨハネの神の國は是等とは大いに意味を異にし居たり。彼も世界の終末たるヤーウエの審判の日既に門に迫れりと感じたり。されど此の審判は猶太人一般の考へし如く、異邦人を倒して猶太人を幸にする審判に非ず。却て罪深き猶太人自らを罰することなり。されば今に於て猶太人は罪を悔い心を改めて神に従ひ、此の接近せる神の國に入るの準備をなさざるべからず。其の結果としては人道に厚くし、二の上衣を有する者は其の一を貧者に與へ、税吏は定額以上の税を取りて私腹を肥やさず、兵卒は給料に満足し、人を誣ひ奪ふべからずと説きたり。彼は神の國を道徳的に考へしなり。基督ヨハネに踵いで現はれて同じく神の國を唱ふ。されど其の意はヨハネを超脱して遙に高かりき。耶穌基督の謂ひたる神國は、純粹に精神的性質のものにして、人の靈に於ける神の統治なり。人が神を信じ神に事へ、其の支配に委ぬれば、茲に神の國現出す。耶穌の神國觀に外面的有形的の容子をば如何にしても見出だす能はざる也。然れども神の國は個人の靈に現はるゝことたるに共に、また基督の徒の社會をも意味する方面あり。基督の徒が一人一人神に事

れ尋ねよさらば會はん、たとひ迫害四方より至ることも懼るゝを要せず、神は一人の小
 さき者をも心に留め、其の亡ぶることを太く悲み、一人にても迷はゞ之を己に回復せんた
 めに勞苦して至らざるなし、故に人は神に歸り、神を信すべしと教へたり。此教は耶
 蘇の教訓の中に充溢し、耶穌の宗教は此の觀念の上に立てり。此の觀念を去らば耶穌
 の宗教は存在せざることなるべし。(馬太六ノ一七ノ十二、全十ノ二九ト三十、全十八ノ一)
(十四、路加十ノ二十、全十一ノ九、全十八ノ七、其他數多)
 神を父といふは人に對して言ひたるものゆゑ、人は當然神の子とせらるゝなり。耶
 蘇には神と人とは同質にして、靈と靈と相交通すべく、神は天より人を愛し、人は地
 より神に従ふ者なりき、人は其の頭の毛さへ皆な數へらる、人の一人一人は常に神の
 愛の對象たり、其の護りの目的たり、一人の亡ぶるも神の心に非ず、一人悔い改めなば
 天に於て喜あり、小さき一人を躓かするよりも磨臼を頸にかけて海底に沈められん方
 尙益あり、人もし全世界を得ることも己が靈を失はゞ何の益あらんやといふ此れ耶穌の
 教なり(前に引ける所の中にあり)。彼は人を神の懷より見て、其の尊貴全世界にまさるを覺りし也。
 耶穌には人は自然界の中に埋もれて其の一産物となり果てもせず、集團の中に吞まれ
 て唯だ其の一員といふより外に意味なき者となりもせず、宇宙の中に没して個性を失

ひもせず、人格は無上の榮を有し居りしなり。

人は本來以上の如く尊貴なるもの也。然れども耶穌は人生の現實に盲目なる樂天家
 に非ざりき。彼は人に於て其の罪を見たり。彼はパリサイ人の罪を見たり(特に馬太
 一三に明)。彼
 は一般の猶太人の神に背けるを見たり(馬太二三
 一ノ十三等)。彼が起て神の國を立てんと努力する
 に至りしも世に罪あるがためのみ。人々神より離れ居れるがためのみ(馬太十八ノ十一
 一三、路加十五ノ
 三、全十一ノ三三、馬太九ノ十
 三、全十八ノ十一、路加十九ノ十)。耶穌を以て光明のみ見て暗黒を知らざりしとするは甚だ
 しく誤れり。而して人の斯くの如き罪惡は、其の本神に在らず、又必至の勢に非ず、實
 に人自身の内に在り。耶穌は惡は内より出づと言へり(馬可七ノ十四一三、馬太五
 一ノ二七ト二八、全七ノ十七等)。故に神
 に従ふも背くも繋りて實に人の意志に在ることを思ひしなり。故に善惡は必ず應報あ
 り。善者は最後には必ず報を受けて、祝福充つる生活に入れらる。いと小さき善も報
 を失はず、最小小さき者になしたる事も神に爲したることせられ(馬太十ノ四二、
 全二五全體)。實際の
 功績に比しては均衡せざる程大なるものを與へらる(馬太二十ノ一ト二六、
 全二五ノ二ト二三)。此世にて埋も
 れし者も花の如く咲き出づ(路加十六ノ
 十九ト三十一)。陰徳ある者は必ず陽報を受く(路加十四ノ十二一、
 十四、大六ノ四)。
 之に反して惡者は必ず罰せらる。其の罰は滅亡なり。されど消滅にはあらず。惡者は永

遠に神と偕に在ると能はず、神なく望なき暗黒の淵の中に投げられ、罪の意識に由て盡きざる蛆に喰はれ、消えざる火に焼かるゝ如く苦み、號泣切齒すべし(馬太二五ノ三十、馬可九ノ四三ト四四)。神は罪惡を容るゝ能はざればなり。

此の罪の状態より脱出して、神の國に入ること、此れ實に人の何よりも先に志すべきにして、此れ實に人の至善なりき。耶穌は人を斯くせんために來れりと自覺せり。彼は罪ある者を招きて悔い改めさせんために來れり(馬太九ノ十三)。彼は神は亡びたる者を救ふの經綸を立て、之を實行しつゝあり。自己の生活は此の運動の實現なりと自覺したり。路如傳十五章の善き牧羊者が迷へる一匹の羊のために、苦勞して尋ね求むる譬、貧しき寡婦が落したる一枚の銀貨を尋ねて全家を隈なく掃除する譬、放蕩子が父の家を出でて零落し、見る影もなくなりて歸參したるを父の歡び迎ふる譬等皆な此の意を表はせり。耶穌は自ら精神を用ひ體力を費して此の使命を果たすを努めたり。初の内は萬事が平穩に進みしが、やがて暗黒は四方より捲き起り、彼は頗る前途の暗憺を感じたり。終には此の使命を果たすを中止せば即ち己む。若し神に事ふること人を愛することを一杯に充たさんとすれば必ず己が生命を投げ出ださるべからざるを見出だせ

り。神の救の活動の波に従つて上下して動かば、己が私の生命をば失はざるべからず、己が私の生命を固執せば、神の救の活動に己れを同化する能はざるを看取せり。されど彼は進めり。彼には神への柔順と人への愛とあるのみなりき。茲に於て人の子の來るも人を役せんために非ず、却つて人に役せられ、又多くの人に代りて生命を與へ、其の贖とならんがためなりと自覺し(馬可十ノ四五)。最後の晚餐の時には、麴麩を裂て弟子に與へ、此は汝等のために裂く我が肉なりと言ひ、葡萄酒を分ち與へては、此は汝等のために流す我が血なりと言へり(路加二二ノ十九、馬太二六ノ二八、馬可十四ノ二四)。彼は人を神に歸らすためには、其の代價として己が生命を費さるべからざることを自覺したるなり。

茲を以て彼は自ら神の子なりと意識したり。此の問題は史的耶穌の篇に於て稍詳しく論じたれば、此には耶穌の教をのみ略叙すべし彼は父は萬物を我に委ぬ、父の外に子を知る者なく、子及び子の顯はす所のものゝ外に父を知る者なしと言へり(馬太十一ノ二七、路加十ノ二二)。されど彼の神の子といふは、神と正當の關係を有する意識より來れる觀念にして、必ずしも人間を超絶せる神の子といふ意とは思はれず。彼の謂ふ所の神の子は最も善く神を知り、神と意志相合一して二なき間柄となれるを意味す。彼は又自ら『メシア』た

ることを意識したるが如し。ウェルハウゼン Wellhausen や ウェルニャー Wernle などは、
 耶穌は自ら『メシア』たるを言はざりしと言ひしが、確に然か解せらるゝ節なきにし
 もあらずと雖も、耶穌は當初より『メシア』自覺ありたるらしく生活せり。其の傳道の
 首途前に大なる誘惑に遭ひしといふ如き、此れ耶穌が自己の内部の經驗を弟子等に語
 りたるより傳はりたる物語なるべきが、『メシア』自覺なくしては在るまじきことなり。
 又自らの奇蹟を行ひし名聲の揚るを恐れ、之を傳ふるを禁じたりしも、然も『メシア』
 と稱することが不當なりと言ひし跡はなく、却つて大いに之を喜び受けたり。『バプテ
 スマ』のヨハネが使を遣はして、汝は『メシア』なりや否やと問はせたる時にも、然り
 と云ふ意を以て答へ、猶太人理想の王ダビデより主と言はるゝ身なるを公言し、最後
 には公然『メシア』を表する形を以てエルサレムに上りたり(馬太四ノ一十一、全十一、二
 二ノ四一四五)。彼には『メシア』たる自覺確なりと思はるゝが、此は何時起りしこと
 かは定め難し。されどストラウスの言ひし如く人民の歸依多くなりて之を得たるには
 あらず、前にも言へる如く初より有せしものなるべし。『バプテスマ』(洗禮)の前か後
 かの如きは多く問ふを要せざるべし。然も此の『メシア』の意義に至ては、決して舊

約の思想にもあらず、時代一般人民の思想にもあらず、『神の子』といふ觀念と共に、
 耶穌獨特のものなりしとせざるを得ず。『メシア』の立つる神の國が既に在來の思想せ
 るものと異なる上は、『メシア』また異なるは當然なり。耶穌の『メシア』は神より遣はさ
 れ、神の國を建つる者なり。其の來るは天よりなりと雖も、耶穌自らは自己を神と同等
 若くは同一のものとせし跡見えざるなり。却つて何故我を善きといふや一人の外に善
 き者はなし即ち神なりと言ひたり(馬可十ノ十八)。されど耶穌は自己は神より來り、神の人を
 救ふ活動の實現したるものにして、自己の行動は即ち神の行動の現實なるものとなし、
 自己と神との間には意志に於て全然の合一を感じ、新精神的王國自己より始まることを
 信じ、自己を此の王國の首と自覺し、凡て疲れたる者重を負へる者は我に來れ我れ汝
 等を息ませんと言ひ、屢々我に従へと言ひ、我に従ふものは場合によりては財産も棄て
 ざるべからず、父母子女をも棄てざるべからず、生命をも棄てざるべからずと言ひしな
 り(馬太十一ノ二十八―三十、路加九ノ五七―六二、
 馬可十ノ十七―三十一、馬太十ノ三四―三九)。
 斯くの如く耶穌に由りて始まる神の國へ入るは人の最先急務なるが、罪ある者如何
 にせば之に入ることを得るか。猶太教にては煩雜極まり嚴酷極まれる舊約の律法誠律

儀式を一點一劃洩らさず守るとき、人は之にて義に達したるものにて神に容れらるゝしたり。故に猶太人には宗教は重荷にして、やがて生活が重荷なりき。然るに耶穌は茲に破天荒の啓示をなして曰く、神は天父なれば汝等を受す、人の神より離れ天國に入る能はざるは、自ら罪を意志するに由れり。されば罪を悔いて再びすまじと決心し罪に向へる心を離へして神に向はゞ、其にてよし、神は別に功績をも求めず、人の過去を赦して之を愛し給ふ(馬可一ノ十五、路加七ノ三七ト三八、全十九ノ八以下、全十八ノ九一十四)。かくて彼は時代の宗教と全く異なる人間觀を説き、新しき福音を齎したり。次に悔改といふことの中にも既に含まるゝ如く、神の國に入るには、神を信じ、心を其方に凭らせ、其方に傾注するが必要なり。嬰兒の單純にして父母に信賴する如くにして神の國に入り得べし(馬太十)。次には神の國に入るには自己没却が必要なり。自己を目的として求めず、之を計算外に置き、必要あらば生命をも棄つること大切なり(馬可八ノ三四、馬太十六ノ二四、路加十四ノ二七)。又自己に關聯せる物をも勿論没却するの覺悟なかるべからず(馬可九ノ四三、馬太十八ノ八ト九、馬太十ノ三七、馬可十ノ七ト三一)。更に神の國に入るには實行が大切なり、教を聴くのみにて行はざれば甲斐なし、意志を以て實行

其教の眞理を自己の品性とせざるべからず(馬太七ノ二一ト二七、馬可三ノ三五、馬太二五)。此れ悔改と共に

起るべき事なればなり。

耶穌は人の道は神に向ひ、神に事ふるを第一とし律法の中何れの誠か大なると問はれし時には、汝心を盡し精神を盡し力を盡し主たる汝の神を受すべし、此れ第一にして大いなる誠なりと言ひしが、其に次で第二も之に同じ、己の如く隣を受すべしとある是なりと答へたり(馬太二三ノ三五ト四十、路加十ノ二五ト三七)。耶穌の神は人道を超絶せず、人道を創造し人道の中に活動せり。故に神に事ふる者は人に事へ、人を愛するは神を受する所以となる(馬太二五ノ四ト四五、全十八ノ五、全十ノ四三、全十二ノ七、全九ノ十三)。彼は冷酷残忍を至極の罪としたり。彼は愛を以て人間の社會原理と認め、何所にも之を適用すべきを教へたり。彼は時代の宗教の偏見を破つて、一片の宗教儀式を果すよりも、父母を愛すべきを教へ(馬可七ノ九ト十三)、隣といふを擴げて自國人は勿論敵國にも及ぼすべきを教へ(路加十ノ三以下)、敵をも愛すべしと説けり(馬太四ノ一)。然かのみならず、彼の愛は積極的なりき。無爲無差別の品行方正は彼の尊ばざりし所なるのみならず、却つて之を惡としたり(馬太七ノ二六ト二七、路加十六ノ十九ト三一、馬太二五參照)。惡を以て惡に報ゆべからざるのみならず、惡者をも愛し、人もし下衣を求めば上衣をも與へ、一里の公役を強いなば二里行く如くせよ、人の求むるだけを與ふるは尙善とはいふべから

ず、悪人も己れを愛する者をば愛す、求むる以上を與へて善なりと教へ、此れ凡て神の人類に對する途なり。汝等も神の子たらんためには斯くせざるべからずと言へり(馬太五ノ三八一、四八一)。

神を信じ人を愛するものは人格不滅にして限りなき祝福を受くべし。人は一たび死すれども後には生理的動物的性質を超越したる質を以て復活す(路加二十ノ三六、三五ノ三六)。善なる者は未來に報酬を受く。其の報酬は功勞に比して無限に大なり(馬太二五ノ二一、二二、二三、二四)。此の世の小さき善も必ず報を失はず、陰徳は陽報せらる(馬太十ノ四二、四三)。此世にては埋もれし者も花の如く咲き出づ(路加十六ノ十九、二十)。されば救はれたる者は永久に神と偕なる意識を以て豊富なる祝福の中に生くるなり。然れども之を受くるに足らざる悪者には此の生命なし(路二十ノ三三、三四)。其の靈は善者と分たれ(馬太二五ノ四十、三九)。彼等は神と偕なる能はず、神なく望なき暗黒界に投げ出だされ、罪惡の意識にて盡きざる蛆に喰まれ消えざる火に焼かるゝ如く苦み、悲泣し切齒せん(馬太二五ノ三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五)。

以上耶穌の教訓中の大切なる點の要畧なり。されば耶穌の教も種々の宗教眞理に亘

り居れど、天父の觀念を中心とし、之より神人の關係の凡てが發出し居れるを見る。此れ萬人の許す所なり。然れども近代に至りて耶穌の宗教は世末思想を以て終始すといふ學者あり。此れまた全く偏したる觀察なれども此所に於て附言すべし。

耶穌の宗教を世末思想を本質とせりとするものは、之を希伯來人の世末思想の發現に外ならずとなすなり。抑も希伯來人末期(耶穌の時代前後)の『メシア』觀に二種ありたり。一は現世的觀念にして、『メシア』現はれて古のダビデ王の如く、猶太民族を糾合して、現世に王國を建て、民に自由と幸福を與へ、神の榮光の燦爛たるに至るべしといふ是なり。二は未來記思想にして、『メシア』は天より雲に乗りて現はれ、凡て猶太民族に敵するものを滅ぼし、平和の内に世界を統一すべしといふものにて、此の方の『メシア』は神のごせられ、『人の子』と稱せられたり。舊約最後の文書たる但以耳書は即ち此の未來記の一にして、其後基督の前後には、此の種の文學猶太人間に行はれ居れり。『エノク書』、『ソロモン詩篇』、『エズラ第二書』、『バルク書』などいふ非正典聖書は其なり。此の兩方の『メシア』觀相並びて行はれ居たるが如し。茲を以て學者の中には、施洗者ヨハネも耶穌も此の思想を高調せしに外ならず、ヨハネも耶穌も天國

は近づけり悔い改めよといひしは、此の『メシア』の現出近づけるを言ひしなりと考へ、耶穌の宗教は全然當時の猶太人の『メシア』思想の上に出づることなしといふ者あるなり。而して耶穌は自ら『メシア』なりと自覺せしか、將た天國近づけりといふは、眞の『メシア』次で現はれんとす、我は其の先驅者なりといふ意なりしか。是にも種々の説あり。ライマールスの如きは、耶穌の思想は毫も猶太人思想の範疇を出でず、彼は純然たる現世の『メシア』たることを自信せしが、其の私に期したる大動搖は終に起らずして十字架に死にたり。茲を以て弟子等は耶穌の現世的『メシア』思想を碎かれ、未來記的『メシア』として其の再來を望むに至りたるなりと言ひしが、其後の學者は皆な耶穌の自覺せる『メシア』は精神的の意味のものなりといひ、特にヨハネス・ウァイス Johannes Weiss 一八九二年『神の國に付て耶穌の教』 Die Predigt Jesu von Reich Gottes を著し、耶穌の宗教の骨子は全く未來記思想にあることを論じ、大いに此の見方を強きに致せり。

ウァイスは曰く、神の國は全く未來のこととして考へられたり。主禱の中の『御國を來らせ給へ』といふ願ひは之を示す。故に現在より見れば全く超現世的なり。耶穌は決

して神の國を此世に立てんと望まざりき。耶穌の思想と革命の欲望とは實に氷炭相容れざるものなり。現世の凡ての事物は『メシア』の國の來るに由て全く存在せずなるか、左なくば形を變すべし。故にもし天國現在すといはゞ、其は大空の雲が地上に影を落せるに由て、現在すと言はるゝと同じからん。耶穌は天國を斯く考へて之を建てんとせず、之が接近を宣言せり。彼は決して『メシア』の職能を行はず、唯だ他の人々と同じく、神が超自然の手段に由て之を來らすことを待ちたり。然るに天國は其の期せし程切迫し居らざりき。人民の大部分は頑固にして、敵は激しく壓迫せり。茲を以て耶穌は終に以爲らく天國は尙來るべからず、既在の悔改にては未だ充分ならず、人民の罪は天國來の大障害をなせば、先づ之を去らざるべからずと。茲に於て自らの死は其の贖料たらざるべからずと明に認め、自ら單に其の弟子等の代りに死ぬると謂はず、全民のために死ぬると謂ひ、『汝等に代りて』といはず『多くの人に代りて』と言ひて、斯くて終に死たり。然も彼は再び榮光を以て來らんと欲したり。此れダニエル以後の思想を以て考へしなり。來りて世を審判せんと言ひしは、又天國の建設の前に審判あるてふ傳來の信仰に據りしなり。唯だ彼は傳來の思想を極めて穩和に用ひたり。耶穌

の教既に未來記的なるが故に、其の道德も獨創のものなく、人は此の世より免れて、神の國に入る準備をすべきを言へるのみ。耶穌の教もヨハネの教も人心に天國を建て又は天國を發展せしむるといふ思想は更になし。唯だ耶穌のヨハネと異なる所は其の『メシア』たる意識のみ。此は自己の受洗の時に覺醒したるものなり。されど其の『メシア』の權能使用は全く未來に在ることゝなしたり。

此れヨハネス・ウァイスの説なるが、同説の學者アルベルト・シュワイツェル Albert Schweitzer は一九〇一年『メシア位と受難との秘義』 Das Messiasstills-und-Leidensgeheimnis を出だし、一九〇六年『ライマールスよりウレデーまで』 Von Reimarus zu Wrede を出だし、おほよそウァイスと同じくして、而も更に極端に走れる説を立てたり。學者の中には、耶穌の教が未來記思想を含み居たることをば認むれども、然も之を以て唯一もしくは最要の要素なりと認めず、他の分子を認むる者少からず。例へばブゼット W. Bousset は、基督の思想には猶太思想の外に、ペルシアの二元思想の感化あるを言ひ、耶穌の性格の一大特色は其の歡喜に充ちたるに在り、故に現在をも尊ぶと言ひ、又ウ・ルン、Paul Wernle は、基督は當時の猶太ゼロテ(愛國熱教徒)の『メシア』を

ラビ(教師)の『メシア』と化したり、されど彼は神の國を全然未來とはせざりしが、後非常なる反對を受け、天國現在觀を棄て超自然の未來を望みしなりと言へり。

確に耶穌の事實は猶太思想の神の國と混合せるもの有りしと見るも強ち否定し難きものあり。此れ固より不透明の研究なり。基督の徒は猶太人なりしが故に、時代の思想を脱却する能はざれば、基督の無慘の死に遭ひて驚愕し、『メシア』斯くて終るべからずと思ひ、當時社會に瀰蔓浮動せる『メシア』思想と直ちに握手し、基督存世中の教訓を此の光に由て見、之を彩色して然か傳へたりとも見ることを得べし。或は耶穌自らが此の思想に濃かに染められ居たりと見ることも得べし。然れども福音書に據りて耶穌を知るの外なき我等なれば、之に據れば神國未來の思想は、耶穌の教訓と離すべからざるが如く思はる。然り此の觀察を許すべし。されど之を許すとしても、耶穌の教訓を専ら是なりとすること固より能くすべからず。其の主要部を是なりとすることさへ能くすべからず。基督の教を反映したるパウロの書翰の教義は、決して單様ならざるなり。中には未來記思想を明白確實に含むと雖も、單に世末の救主來の準備を教ふるとしては、餘りに冗漫にして迂回なり。今少しく直截にして、其の思想が組織の中

心となり、不用の分子は當初より淘汰されあるべき理なり。然のみならず、積極的の方面を教ふる所甚だ多し。羅馬書十二章以下や、哥林多前書十三章の如く愛を活世界に適用するの途を教ふる所などは如何に解せんとするか。更に福音書の耶穌の教となれば、未來記思想は一層少くして隅の方に押しやられ居れり。よし假りに未來記思想を饒多なりとしても、然も天父の思想、愛人の教あり。此は未來記思想の系統には不必要なり。然るに此は如何なる地位を占むるとするぞ。此の教を原始的基督教の中より除外せんとする企は、餘りに無證にして餘りに勝手なり。福音書の教の中心骨髄は實に茲に在るに非ずや。未來記思想に於ては基督教は當時の猶太思想の上に多く出でざりしなり。此の天父の思想、愛人の教は何所より來りしか。是が活ける源を時代に求むべからず。之を此の思想この宗教の活現したる人格に求むべきのみ。然り唯だ耶穌の人格より發したりと考ふべきのみ。初の基督教社會の一部は共產主義をまで實行したるを見ても、相愛の教その本に確實に横たはり居しと見ずんば解すべからず。耶穌の宗教は決して未來記思想に非ず、耶穌の人格の内より發したる獨創の宗教にして、神人の關係に就て廣く深きものを教へしものたるや明白也とす。未來記思想を以て耶

穌の宗教を解釋せんとする人々は、餘りに自己の管見に捕はれ居れり。世界は一點を執りて凡てを律すべからず、更に多くの材料により廣き所より見て、事物を解釋せざるべからざるなり。吾人は福音書の全體より見、又大體より見たる基督教を以て原始の基督教と信せざるを得ざるなり。

されば耶穌の教訓は天父觀を中心とし、之を圍める宗教眞理を教へたるものたりしなり。耶穌は人に向つて活動せり。其の言に依る活動は、斯くの如き教訓となりしなり。確に彼は此の教訓を以て人を救ひたり。猶太人は言葉といふことを重んせしが、確に言は外面的のものなれども、唯だ徒らに現はれたる聲に非ず、思想を表はすもの、即ち人格の活動の形なれば、之には大いなる力あり。言に由て人は精神を動かされ、其の意志を一變するに至るなり。耶穌の言は大いに力あり。路加傳二十四章十九には、耶穌の事を、此人は神と萬民の前に於て行と言に大なる力ある預言者なりしとあり。約翰傳の著者はペテロをして、主よ我等は誰に往かんや、永生の言を有てる者は汝なりと言はしめたり(六八)。基督の教訓によりて宗教眞理は始めて示され、神を解し、宇

宙を解し、又基督自身の生活を解するの光與へられ、吾人の取るべき道も明にせられたり。基督は教訓により、言を以て人の靈に向つて活動し、人を動かせり。此れ基督の活動の法式の第一なり。

ロ、耶穌が活動をなすに當りて取りたる第二の途は、行なりき。此れ又缺くべからざるものたりしなり。凡て言ふは易く行ふは難し。言ふべくして行ふべからざるもあり。若し斯かることを教ふるのみならば人を救ふの實何所に在らんや。然も教訓のみならば斯かることを教へ得べし。又觀念のみの事あり。人は觀念のみを作るは或はなし得べし。然れども事實を離れたる觀念は空想なり。理想といふものも、實際の生活に今日現出する能はざるものならば、眞なるや否や不明なり。否理想は必ず現實の生活の中に行ひ得べきものならざるべからず。若し其が出現せぬならば、そは出現し得られざるが故に非ずして、其の理由人が之を出現せしめぬに在るものならざるべからず。耶穌の教は悉く實際的なり。耶穌ほど實際を離れたること、唯だ論理に由りて築き上げたること、思辯にのみ由ることを全然避けたる宗教家は無し。彼は人生の現

實に即して其所に生きて働ける眞理を示し、又現實を左右することを教へたり。然かのみならず、彼は自ら其の教へし所を實行したり。彼の教の空想にあらぬは、彼が之を實現せるに由て確にせらる。曾て地上に於て現はれたる宗教及び道德ならば、其は人類に由て實現せられ得るものなり。彼の教の方あるは此故なり。且又彼の教は實行せられたるのみならず、或は教へられざれど實行せられたる眞理もあり。此は大いに考へざるべからず。もし基督の死が人類の罪の罰を代り受けたるものなりといふことが眞ならば、其は耶穌自ら教へずして而して實行したるものなり。何となれば耶穌の教訓には斯かること示しあらざれば也。此の代罰の事の如きは之を根本より否定するとしても、兎に角耶穌の實行には、其の教訓になき眞理が活動し、之に由て人の知を醒まして神を知らしめ、人の意を動かして神に立ち歸らしめたるもの多きことは明なり。耶穌の行は其の教訓を實現し、其の教訓を補ひ、又教訓以上に出でたるものにて、即ち耶穌の人格が其の人的制限の内に生きて現はれ、人に影響したるものなり。耶穌は行に依て其の事業をなせり。

其行は如何なるものぞ。前には耶穌教訓の内容を擧げしが、其の如き教訓をなすこ

と、是れ既に一の行なり。世には徒らに形式論のみを唱ふる人あり。兎せよ角せよと唯だ形式のみを唱ふ。此の種の人は善き教訓をなせよとのみ呼ばる人なり。されど何程教訓せよと呼ばりたりとて、事實教訓せざれば甲斐なし。耶穌は自ら實に教訓せり。彼は教へて決して倦まざりき。彼は自ら非常なる出來事に心を打たれ、人々の雑沓の中より脱し、獨り心おきなく神に祈らんとて林間に退きし時も、多くの人々の追躡し來るを聞き、出で、之を見て其の牧者なき羊の如き様なるを感ずるや、疲を忘れ元氣を振ひ立て、彼等に教をなせり(馬可六ノ三)。彼は五千人以上の群衆に教を説きしこともあり(馬可六ノ四)。又家の隅の暗き所にて耳を附けて弟子等に語りしこともあり(馬可六ノ二七)。彼が教訓をなすといふとも、實に彼の人格の中心の愛より出づるにて、彼が人を救はんための行なりしなり。彼は常に教訓を忘れず、得意の時、失意の時、山の上、海の中、家の中、野の中、機に臨み、變に應じ、或は自發的に、或は他より刺激せられて、口より教訓を絶たざりし如し。

次は其の親切なる行なり。弟子等は後に彼は善をなすために周遊せりと言へり(使徒傳三)。基督は人を愛せよと教へたるのみに非ず、自ら愛の生活をなし、愛の人格を全

うしたり。彼は己れの如く隣を愛せよといふ主義を實行したり。基督は決して近親に疎ならざりき。彼は父母を棄て兄弟を顧みざりし跡なし。勿論道のために盡し、専ら天國の扶植を志とするに至りて後は、其の生活の目的は茲に傾けられしが故に、一家の者として十分なる務を果すこと能はざりし點もあらん。弟子等にも我に従はんを欲する者は父母子女を棄てざるべからずと言へばなり。然れども彼は主義として恩愛の縁を脱離せよと謂はざりしなり。其の母その兄弟も常に彼の愛の對象なりしは明なり。彼は又弟子等を愛したり。又弟子等の家を愛したり。ペテロの岳母の事、ヨハネ、ヤコブの母の事、マルタ、マリヤ、ラザロ三同胞の事など、福音書中に面白く現はれたる人物なり。其の弟子等がもと無名無知の小民より出で、後には兎も角も基督の遺跡を傳へ、世界を回轉するの大業を成せるものは、基督が彼等を受すること切ならざりしよりは是あるべからず。肉身の親が其子を善良高潔なる人物とするさへ、決して尋常の苦心にては能くすべからず、子を熱く愛し、己が靈を注ぎ出だすやうにして始めて此の目的を達し得らるゝならずや。ガリラヤ湖畔の漁夫や税吏を招きて、之を大なる使徒となしたるは、眞に衷心より至熱の愛を彼等に注ぎ、彼等のために死ぬる

の心ありしに由りてなり。最後に捕へらるゝ時、耶穌が若し我を尋ぬるならば此の弟子等を容して去らしめよと言ひしと約翰傳に傳へたるは(十八)、蓋し耶穌の性格に合へる叙述なり。然れども彼の隣は決して近親や弟子等のみにはあらざりき。彼は唯だ此等に役するため來らざりしなり。彼は人に役したり。バレステナを遍歴して、人々の心を罪より神に歸さんために熱衷努力し、其の心身の力の限りを盡したり。而して其の遍歴の途上、苟も人生の不幸悲惨の存在を見れば、又己が力の限り之を和めたり。彼の人格は人の要求に應じて其の無くてならぬ力を發し、其の到る所、罪ある者は悔い改め、貧しき者は慰を得、病ある者は癒され、不和なる家庭は圓滿となりぬ。耶穌の愛は家門や職業や黨派や、凡て猶太當時の事情によりて人を偏り視ず、罪ある者、税吏など、當時猶太人一般の目には全く神の恵より縁の絶えしと思はれし者にも及びしが、唯だ其のみならず、國籍を異にする者にも及びたり。カナンの女にも親切をなし(馬太十五、二二―二六)、サマリヤ人にも恵を行ひたり(路加十七、十六)。約翰傳の中には羅馬の百夫長やサマリヤの女やグリシャ人に對する耶穌の好意思惠所々に記されあり。兎に角耶穌は自らバレステナに限りて傳道し、弟子等をもイメラエル人傳道にのみ従はしめしも、

此は基督教を初め根深固く扶植せんごする心に出でしものにて、耶穌の精神には國籍民族の別なく、人類を愛の對象として活動したるは明なり。世界主義は一時一派の學者の唱へし如くパウロを以て始まるに非ず。基督の内に初より牢として存在したるなり。基督が人を愛せしは尙之よりも博し。彼は敵にまで之を及ぼせり。彼は之を教へしのみならず、自ら此の教を實行したり。基督の言行に反抗敵對の態度ありしを見ず。最後に近づいてエルサレムに上り、神殿が卑陋なる商賈のために汚され居れるを見、神の威のこゝに蹂躪褻瀆せられしを感じ、商賈を逐ひ出だして神殿を清めたるは、之を以て人を惡むの行爲とはすべからず。馬太傳二十三章のパリサイ派を譴責せし言には、福音書の著者の思想の色彩も加はり居るべし。此の書に於てパリサイ派は何所にても特に猛烈に基督の責むる所となり居ればなり。然し是とて偽善を厭ひ殘酷を惡む心の發露にして、基督の愛の人格を曇らすほどのものに非ず。却つて基督は如何なる迫害壓抑にも極めて平和に温順に堪へたるを知ることを得。弟子等は屢々舊約以賽亞書五十三章の句を引き、苦めらるれども自ら謙りて口を開かず、屠場に引かるゝ羔の如く、毛を剪る者の前に黙す羊の如く、訴られて訴らず、苦められて激しき言を出ださ

すとして耶穌の態度を記し(馬太二六ノ六三、二七ノ一二、約翰一九ノ九、彼得前書二ノ二三、)捕はるゝ時にも弟子ペテロが劍を抜きて抵抗せんとせしを止めたり(馬太二六ノ五二、)路加傳にては耶穌十字架にかけられし後、神に向つて、父よ彼等を赦し給へ、其の爲す所を知らざればなりと祈りしといふ記事あり(二三ノ)。以て耶穌は唯だ教訓に於て愛敵を説きたるのみならず、其の實行に此の義備はり居し品性を描かんとせしを知るべし。

耶穌は終に十字架にかゝりたり。此は半は耶穌の選んで取りし途といふべし。耶穌は其の傳道の途の長く光明のみに照らされざることを經驗せり。暗雲は捲き起り、彼は非常なる苦痛の潜むを感じたり。日を逐ふて十字架の影は前途に鮮に立つに至りぬ。彼には或は意外の心地もありしならん。然れども彼は十字架を眺めつゝ之に由て心怯れざりき。若し避くれば彼は之を避け得ざりしに非ざるべし。然れども弟子等に向つて、小さき群よ恐るゝ勿れと教へし基督は、自らまた恐れざりき。彼は死生に超脱せり。彼には唯だ神の心あるのみ。唯だ人に對する愛あるのみ。神に事へ、人を愛して尙止まずんば死あるのみ。然も彼は止まざりき。かくて十字架上に殺されりぬ。

以上は耶穌の實行の表面觀なり。然れども耶穌の生活は更に深き眞理を表現せる實行にて充つ。彼の實行は心を盡し精神を盡し力を盡して主たる神を愛するの實行たり、又神と合一して、神の心を以て動き、己れの如く隣を愛するの實行なりき。彼の實行は道德其の物なりき宗教其の物なりき。彼は一々善行をなすに當り、故さら道德を實現せんと志して之をなし、宗教を實現せんこと々志して敬神の生活をなしたりとは見え、彼の内心より自發的に出でたるもの其の實行なり。此れ彼が既に自ら神に事へ人を愛する品性たりしたためなり。余が屢々耶穌の人格が既に宗教なりと言へるは此の事なり。

先づ耶穌の實行を道德として視よ。茲に其の新しき最高道德が實現せるならずや。彼は人間を結ぶべき原理は唯だ愛のみ。近親も、疎縁者も、異邦人も、敵も、此の原理に由て取り扱はざるべからずと説きしが、此れは空論ならずして其の一身に現はれたり。此の原理は此世にて行はるべきものなること分明したり。彼は愛して敵に抵抗する勿れと言ひしが、是も身に於て實現せり。彼は愛の極は如何になるものか、十字架にかゝりて之をも明になしたり。彼は生ける神なりしが、彼はまた生ける善なりき。

然れども此の以上に耶穌は生ける宗教なり。宗教は神と人とが相會するものなるが、茲に落ち合へる神をも耶穌は十分に顯はしたり。耶穌の行は神の行なり。神の義と愛とは、耶穌の行に於て明に見るべし。神はこゝに自ら活動して其の内性を暴露せり。耶穌を見るものは耶穌に於て活動せる神は至愛の人格なるを見る。耶穌を見て何人も神の至愛なるを感せぬはなし。故に神の天父なることは耶穌の品性行爲に於て顯はれ居れり。此は前章耶穌の人格を論ずる所に説きたる所の如し。之に加へて考ふべきは、耶穌が終りまで神の天父なるを其の實行に於て顯はせることなり。其の十字架を避けず、人を救ふための必要の途として、甘んじて之に就きし精神も、これまた神が耶穌によりて活動したるものにして、天父の愛を顯はすものなると共に、彼が茲に至るまで其の天父觀を固執して變ることなく、變ることなかりしのみならず、聊も此の信念に動搖を來たさざりしは、最も切に神の天父なることを示せるものなり。人は平素事なき時は如何なる美しくしき觀念をも作り得べし。少年時代には唯だ其の空想に由て甘き樂園を夢む。然れど世の中の事に接し、事實の苦味を経験するに至りて、此の夢は破られ却つて反對の方面に傾くを常とす。耶穌が傳道の初、萬事平穩愉快に進行せし

時、天の父を想ひしは或は當然のこととして、其の經驗少き時の夢とも謂はれ得ん。されど事みな非にして、殺氣立ちこめ、暗黒掩ひ至り、其の生命さへ脅かさるゝを見ても、尙神の父なるを説て已まず、十字架上其の至苦至惱の中にも、天父の觀念を抱いて喜びで死にしものは、即ち彼の靈の眼には天父の姿鮮かにして、憂き雲おほび、苦の波打ち寄すれども、其の笑顔の光毫も隠れぬを十分明確に覺えしに由らすんばあるべからず。此れ後の基督信徒が、神を愛して血を流しつゝ喜んで死ぬる美事の初にして、神は天父なりと叫ぶ何よりの證なり。

斯く耶穌の實行は宗教に於ける神の容子態度を顯はすと共に、更に此上に基督自身の神に對する態度を顯はし、其の教訓を以て教へし所は、皆な現實の事なるを示せり。彼は己れの方より飽くまで神を父として振る舞へり。彼の生活全體が、實に天地間の愛子の生活なり。其の思想といひ、其の行爲といひ、凡て天地間に孤立せる者が、自らの力によりて突進するといふ風も見えねば、束縛ある奴隸が凡て不自由に生活するといふ風も見えず、凡て謙遜にして柔順にして、而して全き自由あり勇氣あり、柔和にして快活にして、而して超脫的なり。彼の生活と他の宗教家との生活を比べ見ば、此の

差別は明白なり。彼は人は動物に非ず、自然界の奴隷にもあらず、又恐ろしき神の奴隷にもあらず、況や律法道德の奴隷にもあらず、更に況や惡魔の奴隷にもあらず、實に天の父の子なりと言ひしが、彼れ自ら全く子らしき面目を具備したり。故に凡て神に對しては子道を發揮したり。彼は神に對して謙遜柔順なりき。其の生涯は神より遣はされたるもの、神の國を建つる者、神の旨を行ふものとして過ごされたり。凡ての勤勞は是がためなりき。凡ての苦痛も之がためなりき。彼は決して我意を張らず。決して私情を充たさず。終には十字架の死も神旨ならば之を成させ給へと祈れり。約翰傳には特に基督が只管天父の意をなすを生活の目的とせしてふ語多し。十字架の死は實に天父の意に従ひ、其の人を救ふ心に同情し、其の經綸の運行々終りまで進ませたるものにて、基督が子道を全うしたる行たりしは勿論なり。かく謙遜柔順の態度現はるゝと共に、信賴の態度も之と離るべからざるものとして現はれ居れり。十字架につけし後、祭司長老輩の耶穌を嘲弄して、彼は神に依り頼めり、神もし愛しまは今救ふべしと言ひしと云ふは(馬太二七ノ四三)、耶穌が如何に神に信賴せしことの厚かりしを證す。彼は十字架にかゝりても、神己れを棄てしとは思はず、必ず救ひ給ふと信じ居しなり。從

つて耶穌の生涯は聖と平和と愛の生涯なりき。耶穌は神の子たる聖徳と平和と愛とを充たせたり。彼は全然靈の生活を送り、自然界の力より全く脱出し、無限の神と合ひ、神のまに／＼動きたり。彼の心には肉慾の波打ち寄せず、私情の雲かゝらざりき。唯だ存在するものは玲瓏たる神の心にして、神と意氣投合し、自己と神との間、何等の軋轢なく、自己の内部の波は神の中の波たる意識も十分なりき。茲を以て誘惑も彼を陥る能はざりしなり。其の『バプテスマ』直後の曠野の誘惑を始め、彼は其の一生を無數の誘惑に暴されたり。彼は人なりしなれば、罪に陥るべき途は其の品性の四方に開け居しなり。されど彼は神の徳にて充ちたり。彼の内には一點此等の途を通して罪に行かんとする活動起らざりき。彼の意識は極めて潔くして毫末罪の意識ありしと見えざるなり。又其の行ひし跡には無論罪の汚の微塵も認められざるなり。誘惑陥るゝ能はざると共に、如何なる苦痛も彼を亂る能はざりき。彼は無數の苦痛を受けたり。其の私生涯の時には生活の苦難をも味ひたるべし。其の教訓中には此の經驗ある者にして始めて思ひ得べき言もあり。彼は病苦をも經驗したるべく、其他自然界人間界より來る諸の苦痛を味ひたるべし。更に其の公生涯に入りての苦痛は殆ど思ふに餘れる者あ

りしなるべし。彼は猶太人の血統思想よりして多くの苦を受けたり。彼は當時の宗教思想より大なる迫害を受けたり。政治的思想もヘロデ黨やサドカイ黨や其他を驅りて耶穌に對する害悪を行はしめたるべし。之に加ふるに其の親族の誤解や妨害もあり。弟子等の間に起る事のための苦痛もあり。而して最後は當時の最も恐るべく厭ふべき殘刑たる十字架の苦を嘗めたり。彼は外界より來る最強の力を經驗したるなり。然も彼は其の神と合ひ、神と偕に在るの意識、之に伴ふ平和を少しも破られざりき。世の風波は荒れ狂ひしも、天に聳ゆる彼の胸中をば如何ともする能はざりき。彼は凡て有限界の上に超脱せり。彼は肉を忘れて靈にて生きたり。彼は地の中に在らで神の中にありたり。故に斯くの如かりしなり。耶穌の實生活は神の子の生活、神を信じ、神に従ひ、神の心を成し、神と全く合へる生活なりき。耶穌は此の實際の生活に於て宗教を現はし、之によりて人を救ふの活動をなせり。耶穌が人を救ふの活動の中には、斯かる生活現はれたり。

耶穌は言によりて活動をなせり 此れ教訓なり。耶穌は又行によりて其の人格を活

動せり。此れ耶穌の人格が外界の物に依りて爲したる活動なり。此の活動は史的耶穌に於て行はれたるものなれど、また其後も繼續せり。

其一は聖書に依りて繼續す。聖書は人の書きたる文書に相違なしと雖も、然も特に耶穌に接して、靈覺を呼び醒まされ、其の靈魂を靈界に運び行かれ、神のこと、靈のことを親しく感覺し、茲に及ばせる耶穌の影響を十分に斟酌することを得し者どもが、書き遺したる文書なり。故に福音書には耶穌の面目の躍如たるものあり。吾人は千九百年を隔て、耶穌在世中の事を親しく見るを得ざれども、聖書に由りて耶穌の教を知り、其の行を知る。聖書は耶穌の生活を寫せるものなれば、聖書が存する限りは、耶穌は吾人を教へ、吾人の間に行動しつゝあるものなり。

其二は教會に依りて耶穌の活動繼續す。教會は耶穌に依りて起り、耶穌の精神を精神とし、耶穌の活動に従つて活動す。教會が爲す所の諸の善は、基督の精神を奉戴し、之を現實に活用するものなれば、其所に在る久存の基督が活動せるものなり。基督は今尙行ひによりて其の救の活動をなしつゝある者なり。

其三は個人の生活に依りて耶穌の活動は繼續す。基督を信じ、基督と合一し、基督

によりて動く基督信徒の各自は、此れ基督を再現しつゝあるものにて、其の活動は基督の活動ならざるべからず。勿論この場合に於ける教會の活動及び個人の活動は、共に理想を言ひたるものにて、即ち然かあるべき筈の所を言ふなり。事實上耶穌の行は千九百年以來絶えず繰り返され来れり。耶穌は決して一の時代に於て行をなせしのみならず、萬代に行をなしつゝあるなり。

されば耶穌は長久に其の言により、行によりて活動しつゝあるなるが、此は外界の物に依れる活動なり。然れども耶穌の活動には之よりも直接なるものあり。

乙、耶穌人格の直接活動　耶穌は其の人格の直接活動によりて其の事業をなせり。直接活動とは何等外界の事物によらず、其の身體にさへよらず、聖書にもよらず教會にもよらず、他の個人にもよらず、耶穌の靈を以て直接に救はるゝものゝ靈に交渉し、之に至深の印象を與へ、至大の變化を起すこと是なり。

人の人格は活動して直接に他人の人格に影響を及ぼすこと大なるものなり。古來感化として尊ばれし事實は此の事なり。吾人は實際に感化といふものゝ存するを見る。

若し高潔なる人格あるときは、其の周圍の人は知らずく之に同化せらる。古より聖人君子が世を動かしたるは、決して言論動作の上よりのみせず、此の感化に由りてなり。歴史の回轉は人格の感化に由る所甚だ大なり。吾人は目前にも無數の感化の事實を見、又自ら之を経験す。一人善なれば社會善となり、一人惡なれば社會惡となる。感化は熱よりも電氣よりも強き趣あり。

感化は目に見えず手に觸れず、唯だ其の實際の作用に由りて存在を現はすのみ。此の理は何に由るか。勿論何人と雖も之を分明に示す能はざるなり。余輩も感化の理を強て説明するを要せず、唯だ之を事實として承認すれば可なり。然れども輓近心理學者の實驗の中には、感化の理を暗示するに足るものあり。之を記して幾分の補助となさんと欲す。今の心理實驗に思想の傳達の實驗てふことあり。此の種の實驗の用に適する者、特に神経鋭敏なる婦人の如き者一人以上を用ひ、之を一室に導き、室内を能ふ限り空虚とし、何物も其の心意を印象せず、思想に入らざるを努め、二人を室の兩隅に隔たり坐せしむ。或は其の間に懸幕を垂れ、若くは衝立を立つるも可なり。斯くて甲の女子をば意志を用ひて心を空虚にし、何事をも思はず、全く一翳の思想の影だ

に其の心の面にかゝらざらしめ、かくて乙の女子に與ふるに、簡單なる形の像を書ける小さき紙片を以てし、之を一心に見守り、之を専ら思想せしむる時は、甲の女子の心中には次第に此の畫像浮び來る。若し書板を與へて之を記さしむれば、大抵は乙の女子の見つゝあるものを其のまゝに書き出たす。「サー」オリヴァー・ロッヂ Sir Oliver Lodge や、ロムブロンゾー Lombroso の試験には、何れも或は旗の形や或は鳥の形や其他十數回の試験をなせしに、大抵は其のまゝの形を書き居れり。唯だマリアといふ字をマリアムとしたる如き誤り少しく存するのみ。然かのみならず、ロッヂが試みに三人の少女を用ひ、一人をして思想を受けしめ、二人をして思想を送らしめ、送る方の二人には、各々異りたる形の畫を記せ。紙片を與へたり。即ち一人には四角形を記して與へ、他の一人には十文字を記して與へしに、受想者は久しく決する能はず、辛うじて言ふやう、今回の形は極めて定かならず、一の形のやうにもあれば、又他の形のやうにもあり、我心に一の形浮び出づるかと思へば、又他の形浮び出づると、終に石筆を取り、多分かゝる形ならんとて四角形を書きしが、又少しく考へ、斯くも思はるとて四角形の隅より對角線を引きて十文字を書きしと云ふ。又或時は送想者を一人とせ

ず、二人三人とせしに、其の時受想者は其の見る所の形の常よりも明白劃然たるを覺ゆと言ひしよし。此れ思想の傳達の實驗にして、此の事實の存在のみは確實なるが如く、心靈研究者等は此の實驗を基礎として、多くの心靈現象を説明しつゝあり。

余輩はかゝる實驗が何所まで證として取るべきやを知らざれども、兎に角人間の世界は決して唯物的思想の人々の考ふる如く單純なる者に非ず。人間の身體よりは一種の光輝發しつゝありなどいふ説もあれど、其は物質のことなれば茲には言はず。唯だ吾人は人は物質の上にて相交渉せるのみならず、此の物質の裏面に靈あり、靈と靈相集まり、相交渉し、其間に一種の力を流通しつゝあるを思ふなり。吾人の心中の思想の波は、吾人の中に起れども、其の波動は吾人人格の内のみにて止まず、人格の境界線を超えて外に出で、四周の人格の中に打ち入りて、其所に跡をつけ印象するは確なり。吾人が四角形を思へば、其の思想は何等物質の媒介に依らずして、他人の心に入りて思想となる。吾人が善を思へば、其は何等の媒介によらずして他人の人格内に印象を與へ、茲に善の思想を起すことは確と思はる。

かゝる理に由りて一人の人格高く、其の内に常に高き思想動くときは、其の波は周

園の人格内に打ち入りて、之に高き思想を與へ、思想が常となればやがて高き人格となる。況や多數の者高き思想を抱く時は、其の中に在る少數者は、其の人格を高き思想にて充填せられ、茲に人格の變化を來たさるべからざるべし。

此の人格直接の活動は人を救ふ上に最も必要なり。若し是なくば人の救といふことは多分得られざるべし。教訓も大切なり、實行も大切なり。然れども此は唯だ人の知に訴ふるのみ。知行は必ずしも合一せず。善と知りつゝ之を行ふ能はざるが人の常なり。救の必要は此故にこそ存するなれ。されば人の知に訴ふるのみならば人を救ふに非ざるなり。然れども人格直接の活動は人の人格の中に己が人格の内容を植ゑ付くるなり。己が善なる思想を他の内に移し、之を定まれる善の品性とするものなれば、其の對手は初は悪人なりしにせよ、次第に化して善人となる。斯くの如くなれば其の意志はもはや悪に向はず。故に人は其の中心より變化するなり。神なきもの、中に神意識を與へ、理想なきものに理想を與ふ。此れ實に人格直接の活動にして、救は此に於て始めて全し。

耶穌は此の人格直接の活動の最も強き人なり。彼の人格には確に精神上の死者を甦

らせ、糞土の如きものを黄金とする不思議の力あり。彼は此の力に由りて其の事業をなす。彼が人を救ふ活動の大部は即ち是なり。

此の活動は史的耶穌より既に最も盛に始められ、彼は自ら斯かる活動をなさんと意識してなせしや否や、其は問ふを要せず。然れども彼は周圍に弟子等を招けり。彼は精神の質の柔かく發展の望の豊なる青年を見れば、之を自己に従はせ、之に直接して、之を誘導せんと欲したり。十二使徒の如きは皆な其なり。此等に對しては彼の人格は最も強く活動したり。弟子等は初は如何ほどの人物なりしか。思ふにペテロ、ヨハネ、ヤコブ等がガリラヤ湖にて魚を漁し、マタイが漁村の税關にて租税を計算したる時は、彼等の人格はさほど高き者にても無かりしなるべし。其の内部の思想は極めて卑近なるものゝみならん。然るに耶穌に接するや、彼等は次第に其の内容を新しきものと換へられたり。彼等の舊き内容は押し出だされたり。耶穌は時として之を押し出ださんために口にて彼等を痛責せしことあり。ペテロが屢々叱責せられ、ヤコブ、ヨハネがまた時々不興を蒙りたるは、耶穌の此の内容を入れ換へんとせし時なり。されど耶穌は不言の内に、其の思想を彼等の心に送れり。茲を以て彼等の内部は器の中の

濁れる水が、絶えず水道管より清水を注がれて終に清まり了るが如く、耶穌の内容を以て充たさるゝに至りたり。マタイやヨハネやペテロが如何ほどの人格となりしやは知り難きも、馬太傳、約翰文書、其他が幾分にも其等の使徒等の人格に負ふ所ありとすれば、使徒傳等の記事と相合はせて、其の人格の變化や實に驚くべきものありしを知るなり。若し耶穌の人格の直接活動なかりしならば、彼等は決して茲に至らず。耶穌如何に教訓を垂るゝも、教訓の力といふは其自身のみにては甚だ弱きものなり。又實行を以て模範を示すも、此れまた何程のことかあらん。世には善き教訓善き模範は多數に存すれど、之が眞に生きて守らるゝこと少し。何となれば斯かる顯示は唯だ人の知に訴ふるのみなればなり。然れども耶穌は直接に活動し、彼等の人格の中に神の思想を與へ、神の徳を與へ、之を死より生に移したるが故に、彼等は斯くの如き人格となりしなり。十二使徒の外にも、耶穌は専ら自己の膝下に置きて、之に十分の活動をなさんと欲せし者多かりし如し。馬太傳十九章の富める少年の如きも其なり。其他彼の周圍に來り、其の直接の活動に接し、其の人格の一變せしものは、數多かりしなり。否幾千人は一たび彼に接して、終生抹すべからざる印象を受けたるべし。傳説に

よれば基督が膝に抱きて祝し、天國に居る者は斯くの如き者ぞと言ひし嬰兒は、後の聖イグナチウスなりしとのことなるが、其は眞にせよ誤りにせよ、尙西も東も辨へぬ嬰兒も、耶穌に接しては、其の人格より溢れ出づる感化に、其の柔かく清き靈を洗はれて、長き將來の聖なる生活を此に始めしと見ることを得ざるに非ざるなり。實に史的耶穌は其の無二の人格を以て千九百年の昔パレスチナを巡歴し、イスラエル民族の間に、其の神の子の内性を注ぎ出だし、見えざる波を以て彼等の靈魂を洗ひ、之を受けたる者をば全く一變せる人格となしたるなり。

然れども耶穌の人格の直接活動は、其の世に在りし間に限らず、世を去りて後、永く此世に作用せり。初代の基督信徒は耶穌が肉體を以て此世に再來すべきを確信したり。同觀福音書及びパウロ等の書翰には此の思想豊富なり。然れども約翰傳となれば、耶穌は既に再來せることゝなり居れり。耶穌は肉體を以て世の終に來るに非ず、實に靈として信者の許に來り、信者の内に活動すといふなり。曰く暫くせば汝等我を見じ、復た暫して我を見るべし(十六ノ三六)、汝等今憂ふ然れども我れまた汝等を見ん、其時汝等の心喜ぶべし(二三ノ二)。パウロも既に基督の靈として存在するに會ひて悔改し、常

に基督の靈のことを言ひ、基督の靈なき者は基督につかざるものなりと言ひ(羅馬書八ノ九)、現在せる教會を以て基督を首とせる生ける肢體なりと言ひ(哥羅西二ノ十九、哥林多前書十二ノ二十、以弗所四ノ十五、十二)、以弗所書には彼れ萬の物に満たんと言へり(四ノ十)、彼等は基督が昇天の後にも尙存在するのみならず、其の無限の蓄へある人格より、豊なる力を注ぎ出だし、教會に充ち、使徒に満ち、預言者に充ち、凡ての聖徒に充ちて活動せることを經驗せしなり。

初代の信徒は何故に斯く信せしか。彼等は直覺的に基督の現在を意識もしたるべし。此れは信仰の強き因たること言ふまでもなし。然れども彼等は事實の上に基督の直接活動が行はれ行くを見たり。耶穌が名は四方へ弘まり、其名の行く所、罪ある者は悔改して美しくしき人格となり、平和なきものは安らかなるを得、社會が片端より質を化し行くを見たり。弟子等自らの力は何もなし。彼等は金錢は我等に無しと言ひしが、金錢のみならんや、人の力は何もなし。然るに耶穌の名によりて實に不思議なる變化行はれ來れり。彼等は茲に此の名と共に其の實たる耶穌現在し、物質の媒介によらず、其の靈を以て直ちに人々の靈に活動するを認めずして在る能はざりき。風は己がまゝに吹く、汝其の聲を聞けども、其の何所より來り何所へ行くを知らず、凡て靈により

て生るゝ者も斯の如し(約翰傳三ノ八)。久存の耶穌の現在には見えざれども、其の感化は顯著なりしなり。

其より後千九百年の基督教會は、大いに進歩をなし、大なる變化を來らしつゝ、常に此の直接の活動を經驗し來れり。基督は何故唯だ史上の一人物として望まれず、天の主とし、崇拜の對象として仰がれ來れるか。此れ彼の現在の意識が年所を超越し、其の活動の經驗が千年二千年常に新たなればなり。基督信徒は如何に理性の秀でし者も基督を全く過去の人物となし了るを得ず、何等かの途に由りて現在せるやうに考へ、之を説明せり。先に史的耶穌の問題の研究中にもシュワイツェル Albert Schweitzer の耶穌の精神は生けりといふ語を引きたり。極端なる史的耶穌の懷疑者かくの如し。ユニテリアンのチャンニング Channing の如きも、耶穌の現在の問題には説明に困しみ、耶穌を超人間の天使の如きものとなせり。今の多くのユニテリアン皆な斯く感ず。古に於て既にアリウスが耶穌を全然人となし得ず、受造物中の最先なるものとし、半神半人の如くなしたるも之に由る。耶穌は基督教會の全歴史を通じて存在し、其の物に依らざる直接の活動を以て人の靈に衝り、何所にも何時にも、罪に沈めるものを動か

して内より改め、之を聖徒となしつゝあり。

此れ基督教の特色の大なるもの、一なり。孔子も偉大なり、ソクラテスも偉大なり、彼等も大なる感化を有しき。然れども彼等の感化は極めて單純にして、其の人格の近邊に最も強かりしも、其の距離の遠ざかるに従つて力を失へり。彼等は今は全く史上の人なり。今日ソクラテスの教訓の斷片をば人之を知れり。孔子の教訓の簡條は人之に服せり。されど彼等の人格その物が生きて、此に直接に人の靈を動かし、大いなる力を發揮しつゝありとは何人も思ふ能はず。然るに基督に至りては歳月を隔つる遠くして其の人格は尙現在す。現在するが故に其の宗教其の道徳は固定せず。今尙盛んに發展し、新らしきものを現出しつゝあり。新らしき人格を造りつゝあり。此れ基督教の一大特色にして、他の教と全く異なる所なり。

もし此の直接活動なかりしならば、基督教會の歴史は必ず其の有りしものと異りたるものなりしや思ふに難からず。人間は創造す。一旦感化を與へたりとて、永久に其の方向に進むものに非ず。永久に其の精神を發現するものに非ず。基督教も必ずや他の方向に走りしならん。佛教には之ありき。大乘佛教は釋迦の宗教に非ず。更に日本

佛教に至ては佛教といふべからざる點多からん。日本佛教の末は、をさく釋迦其人の宗教に優るも劣らざる高等宗教となりたり。法然や親鸞の宗教は即ち其なり、されど其だけまた釋迦を距ること遠しと謂はざるべからず。基督教にも多くの庶出生したり。然れども概して彼等は榮えざりき。教會の大幹流は着々耶穌基督を再現三現千現萬現しつゝ進みたり。若し甚だしく迷ひ出でし時には、基督の靈こゝに來りて、改革を起し、之を正しき途に引き回して進めり。聖アウグスチヌスも直接に基督の感化を仰ぎたり。聖ベルナルも基督の直接活動に接したり。ルーテルも基督に面のあたり接して其の人格より直ちに生命を與へられたり。基督はいつも信者に直接し、其の人格の内部の性を注ぎ出だして吾人に與ふ。基督教こゝに於て永久の生命なり。教會此に於て基督を首とせる生ける肢體なり。苟も之に接するもの、何千萬ヴォルトの電氣よも恐ろしき生命の力に打たれずんば已む能はざる所以こゝにあり。

以上明にせるが如く基督は活動せり。其の活動は教訓を以てし行を以てせしが、又人格直接の活動を以てし、人の靈に作用して、之に影響を與ふ。其の影響が靈の生命の覺醒養育にして、即ち靈魂の救拯なり。

二、耶穌の事業の内容

耶穌は他の物によりて活動し、又直接に活動して吾人を影響し、吾人を新にせしが、其の活動の内容は如何 即ち耶穌の救拯とは何を言ふか。耶穌の事業は靈の生命を救ふことなり、又之を他の面より言へば人を神に合一せしむることなり。基督の事業に付て、古來多くの意見ありと雖も、其の歸着する所茲より外に出でず。基督は我等の罪の罰を代りて受け、之によりて神の怒を和らげ、神をして我等を赦すに至らしめたりと言ふも、其の窮極は人の靈をして神の罰により死なざらしむる意に外ならず。況や其他の基督事業觀は、皆な茲に歸着せるを見るなり。

甲、救拯の觀念 先づ考ふべきは靈の生命といふ者の事なり。抑も此の世界には生命といふ不思議のものあり。秋の朝垣根に咲く朝顔の花を見れば、其の露を帯びし晴やかなる色も暫くの間に、日影の高からぬ内に早くも萎み果つ。眞に哀れなる極にして、昔より果敢なき事の譬草となり居れり。されど細に考ふれば、朝顔の花は其の咲き出づるが花の始にして、其の萎むが花の終には非ず。一輪の花が蕾を破つて秋

の朝を飾るに至るまでには、疾くより隠れたる所にて長く深き準備あり。春に蒔かれし種子は土中にて根を出だし芽を萌し、生ひ立ちて葉となり莖となり蔓となり蕾となり、終に目の醒むるばかりに咲き出づるなり。即ち一の生命ありて、其の生命が發展して芽となり葉となり花となるに外ならぬなり。又朝顔の花萎みたりとて、其を限として萬事終るに非ず。花の跡には實が生じ、花の生命を來年に傳ふ。されば朝顔の花は此の長き朝顔の生命が極めて美しくしき色香の物となりて現はれたるに外ならず。凡て生命は見えざる一の流の如きものにして、其が形に現はれては芽となり葉となり花となり實となるなり。

人間また生ける物なれば、生命の現はれたるものなり。人間一生の萬事萬端は、決して一つく斷え離れたるものに非ず、悉く一の長き生命が隠れたる所より外に現はれて活動したるものなり。花の如く輝かしき姿も、朽木の如く老い衰れし形も、同じ生命の前と後となり。小兒の時の遊戲も、乾坤を回らす事業も、同じ生命の現出なり。思ふこと、言ふこと、行ふこと、一として一の生命の現出ならぬはなし。

然るに人間の生命の現はれたる活動を見るに、他の生物の生命の現はれたる物と同

種類の所甚だ多し。人間も飲食し又子孫を作る。此れ生命の活動にして、此は他の生物と共通なり。凡て生きとし生ける物は、皆な此の活動をなせり。之をなすものが生物なり。最微の生物の標本として常に引かる、アミーバの如きものにも、其の三千倍四千倍として始めて肉眼に見らるゝ身を以てして、或は飲食し、或は快樂苦痛を感ぜし、或は盛に子孫を造りつゝあり。其の棲息せる水中に何等か小さき食物の流れ來るときは、アミーバは元來定まれる形もなく、水に落ちたる油の點滴の如き様をなし、唯だ其の身體より幾多の突起物を造りてはまた之を縮め、宛がら金米糖の如き形をなして活動しつゝあるに拘はらず、食物の來れるを感知して其方に泳ぎ寄り、之を其の不定に突起する手足にて抱容し、また、か之を食したる後その粕をば排泄す。又此のアミーバに赤色を近づくる時は、非常に活潑に活動し、若し黄色を近づければ、忽ち縮み入りて静止すと云ふ。即ち色を感ぜし、之に對して快不快を感ずる力あるを知るなり。されば人間の飲食し、快樂を求め、子孫を作るといふ如き活動は、禽獸は勿論、草木にも、原生物にも共通したる生命の活動なるは明なり。

然れど人間の活動には、確に之よりも異なる種類のものあり。吾人が今この書を著

はし又は讀むといふは如何。此の中には勿論目や手の如き肉體が動き居ると雖も、此に活動せるものは目にもあらず手にもあらず、更に深き所のものなり。又吾人は斯かる活動をして、唯だ目を娛ません、口を樂ませんといふ慾あるに非ず、更に深き動機あり目的あり。實にかゝる活動は生物には無きことなり。生物の生命はかゝる物となりては現はれ居らぬなり。然るに人の活動には此の種の事甚だ多し。人間は道徳を有す。人が此世に生きて、他人と共に社會を作り、其の中に生活するには如何にすべきか。何を行ふべく、行ふべからざるか。之を自ら考へ爲すべきことを爲し、爲すべからざることを避く、此れ道徳なり。此は動物の中にも幾分その影の存在せるを見る。蜂の社會、蟻の社會にも、嚴格なる道ありて、彼等は之を守り、若し犯す者ある時は必ず制裁を受く。其他の動物にもかゝる事少からず。されど彼等は其の本能上自づから斯かる道を行ふやうに生れ付き、守るものも自づから守り、罰する者も自づから罰するに外ならず。然るに人は自から判斷して、爲すべき事爲すべからざることを定め、自から選ぶで之を行ふ。此れ人間の道徳の出發點にして、他の動物と異なる所なり。此の判斷、此の選擇は決して生物の生命の活動にはあらず、自己の活動なり。されば人の道

徳は動物以上の生命の活動の現はれたるものと言はざるべからず。更に人が法律を立つる。此も動物生命の現出に非ず。自然に成立するに非ずして、自ら考へて、社會の安寧のため進歩のために適當と思ふ所を一定の規律として制立し公布するなれば、確に高き生命のこゝに現はれたるものなり。國家といふもの又然り。國家は動物生命の活動のみにて成らず。動物には國家なし。人間が其の社會を作るに當りて、自ら其の最も確實なる組織と思ふ所に従つて之を作る、此れ實に國家の意味なり。故に此は生物の生命以上のものゝ産出なり。文學藝術となればいよく動物世界の活動を距ること遠くして人間獨特の生命を表はし居れり。雨露を凌ぐために家を建て、寒暑を防ぐために衣服を織る。唯だ之に止まらば人は動物の親類のみ、動物も此の類のことをなせり。然れども人は家を建て、も之に種々なる意匠を加へ、衣服を織りても之に種々の裝飾を施す、所謂建築織物等を作れり。此は生物の生命に用なきこと、又生物生命の活動顯現し得る所に非ず。更に著しくしては繪畫彫刻文學宗教の如し。畫家が畫布に向つて刷毛を揮ふ、此れ手の活動に非ず。彼は其の胸中に畫ける思想を、此の畫布に移し、其のまゝ茲にあらはさんとするなり。彫刻者が山より掘り出だしたる何の形もな

き大理石に向つて刀を加ふ、彼は其の胸中に在る美しくしき姿を、茲に刻み出だすに外ならず。文章また然り。其等の所産物は、即ち其等藝術家の心の顯現にして、生物の生命の顯現にはあらず。哲學の如き宗教の如きに至ては、絶對に何等の有限物に依らずして、人が自己を顯現して、宏大なる思想の組織を建築するもの。此れ豈に生物の生命の活動ならんや。

されば人は生物生命の活動よりも以上の活動をなす。此の活動の根底にはまた流あり生命あらざるべからず。此の根底の流此の生命が、即ち靈の生命なり。然り靈の生命が現はれて道徳となり法律となり國家となり、藝術となり哲學となり宗教となりしなり。吾人は如何にしても此の生命を否定する能はず。生命は凡て目に見えず、又身體を解剖したりとて、何所にも探り出だし得るものに非ず。生命の正體は今日尙不明なり。然り正體は不明なれど生命の存在は何人も疑はず。正體は不明なりと雖も其の活動が明白なればなり。凡て活動が明白ならば、其の根底に正體あることを否むべからず、此故に生物の生命も其の活動によりて知られ、而して靈の生命も靈の活動によりて知らるゝなり。

此の生物的生命と靈的生命とは如何なる關係を有するか。古の希臘人は人性は三段より成ると信じた。最も低きものは純然たる物質にして、世界の凡ての物質と共通せるもの、即ち肉 *σάρκα* なり、中段にあるは生物と共通のものにして、感覺し飲食しまた生滅するもの、即ち生魂 *ψυχή* なり。されど人には更に一段高きものあり、即ち理靈 *νοῦς* にして、此所は萬物の理を考へ、神々と共通せるものなりと謂へり。茲を以て希臘人は生命の二元主義を信じた。即ち肉の生命と靈の生命と二つありて、互に他を制し、之を支配せんとて争ひつゝありと思へり。されど此の二つは本來相矛盾せるものと思ふべからず。然り矛盾せるものに非ざれども、多くの思想ある者が此の矛盾を意識し來れるほど、或る不調和行はれ、或る軋轢が存在することを忘るべからず。今茲に此事をば言はず。兎に角人には生物的生命と靈的生命とがありて、之が共に活動して人の生活となり居れることは確なり。

人の人たる所以は此の靈的生命を有するに在り。若し人間が唯だ飲食し、唯だ子孫を作り、唯だ肉慾を求むるといふのみならば、其は未だ人たる活動をなし居らざるもにて、人の面を有する禽獸なり。かゝる者は須らく人間界より脱籍して禽獸界に轉

すべし。人間が高等なりとか下等なりとか云ふも、實は靈的活動の盛なると微なるとに由りて言はるゝなり。又文明といふものは、此の靈的生命の活動の産物なり。動物界には文明なし。猿や犬や馬は眞に恰憫なる動物たるを失はざれど、生物的生命のみ在て靈的生命なし。故に文明を作るを得ず。幾億年を経ても彼等の社會状態は變化せず。若し多少の進化あらば、其は自然の力、又は人間の力に依るものにて、自己の力に由るに非ず。然るに人類は幾億年の昔より、此の靈的生命を活現して、宛がら極微なる珊瑚蟲が自己の身體より石灰質の液を分泌して、長年月の間に海底より珊瑚礁を築き上げ、終に風光明媚なる島嶼をなすが如く、此の壯麗なる人類文明を造り上げたるなり。

靈的生命存在すること確ならば、其の性質は如何なるものなるか。其の現はれたる現象を見、其の現はれたる進路を見れば、之も明白なるものあり。前に言へる如く人類の文明といふは靈的生命の顯現たり所産たるに相違なし。文明の進むは人が其の靈を以て自然の力に勝ち、物質を使用して、此の物質世界の上に靈の建築を立てつゝあることなり。故に靈の建築物の豊富高尚なるほど文明の進みたるものなり。然らば即ち是

にて靈的生命の性質は凡そ分明するものといふべし。靈的生命は物の外に在り、物の以上に在り、次第に物を自己の支配下に置き、天地間に自己を擴張し、天地を次第に化して自己の顯現とせんとしつゝあるものなり。吾人が高尚と呼ぶ所のものは、此の靈的生命の自然に勝ち、生物的生命の活動を支配したる時に現はれたるものゝことなり。故に靈的生命の性質は吾人の觀念にて高尚と形容する所のものなること言ふまでもなし。

此の高尚なる靈的生命は如何にして地上に現はれ、如何なる途を取りて發展せるか。生物が地上に現はれ、其の原生物の時より感覺あり衝動ありしもの、漸くにして認覺ある動物となるに至り、其の内に一の靈的のもの胚胎して、終に人の靈的生命となれり。茲に至りし發展も實に奥妙なり。唯物論は如何に憶想を逞うするも、此の生物的生命の現出と、其の進化とを説明する能はざるなり。生物的生命も活動しては自ら或意味に於て創造したる所あるは之を許しすべし。然れども彼等の創造は人のなす所の創造とは異れり。彼等は全く背後の力に驅られて、前進せり。故に其の途を右にするを左にするとは或は彼等の自然に選びたる所なるべく、又從來なかりし活動を新に始

めしこともあるべしと雖も、然も根底に在る力に動かされて發展したるなり。彼等は彼等以上に出づる能はざりしなり。然るに彼等の盲目的衝動の作用が、自然に發展となり進化となる。生物の無数の種類は、如何に生物が久しく存在して、發展し來りたるかを示し、又如何に常に上の方に向ひて發展し來りしかを示す。上の方に向ひて發展して、下に落ちず、又混沌無方針ならぬは、即ち根底に力ありて、生命を常に上の方へ上の方へと押し上げつゝあるを示さずんばあらざるなり。生物を見れば宛がら木の芽の如し。土中より萌して常に上に向つて伸びんとす。若し土あらば土を穿つなり。若し小石あらば之を突き退くるなり。若し岩あらば之を避くるなり。如何にしても上へ出でずんば已まざる質を現はす。生物の生命かくの如く、かくて劣等なるものより高等なるものに進み來れり。

更に此の生物生命の中に、如何にして靈的生命が入り來りしか、又は生物的生命が如何にして靈的生命となりしか。此の點も解決すべからざる疑問なり。宏大なる文明を造り得る靈的生命は、其の初は或は芥種ほどなりしとしても、之が生命中に入りし後と入らぬ前は、生命は天地霄壤の差別あり。斯くの如き豊富不可思議なる未來を

有する靈的生命の入りし途如何。是も宗教的に考ふるより外には解釋の途なし。即ち天地に根本の神ありて、世界に物質的生命を吹き入れ、又靈的生命を吹き入れしとせざるを得ず。或は神は自己の内性を活動させて、己が生命を世界に現はし、己が靈的生命を現はして活動せしめしなりと思はざるを得ず。然れども其は此所の問題に非ず。兎に角靈的生命は生物の生命より醒めて活動し始めたるなり。

此の靈的生命が醒むるや、直ちに活動を始め、直ちに自然以上の事をなし始めたり。靈的生命は一刻も自然に囚はれ居ることを肯んせざりき。動物の活動は自然のまゝの活動なり。然れども人は人爲の活動をなせり。即ち自ら思想し、自ら意志して、自然になきものを産出し、此の世界に永遠の昔より曾て現はれざりしものを現はしたり。衣を織りて之を着、火を燵て物を煮る如きも、其の幼稚なるもの。終には前に言ふ如き大文明を産出せり。凡て靈的生命の活動は、自然界を超脱し、自然界を後になし、其の上に出で、自然の力に囚はれず、却つて自然を自己の活動の材料とし戰場とせんとするを其の性とするなり。

確に靈的生命は人の内にて目を醒ますと共に、直ちに上の方に向つて昇らんとし、

一步一步自然の力の捕捉を離れ、次第に自己に由て活動するの度を増し、終に全く自然界を超脱して、靈のみにて活動し、靈のみの産物を造り出しつゝあり。靈の歴史は超脱の進歩の歴史なり。先づ道德とか法律とか國家とかは、此れは半ば自然の力の産物なり。人は生れながらにして、自から他と共に生活するの本能を有し、此の本能に従つて生くる故に、おのづから道德あり法律あり國家あるに至る。動物の間にても前に言へる如く蜂の社會蟻の社會には一種の道德あり。彼等は遺傳によりて其の本能上かくの如き道を守るべく生れ居れり。されば初より群集生活をなせる人類が、道德的本能を有するは當然なり。然れども唯だ本能によりてするのみならば其は未だ眞の意味なき道德なり。然るに人類は此の本能によりて動く以上に、此の本能による活動をも、自らの選擇によることゝなす。たとへば親が子を愛するは本能の作用によれり。親は生れながらにして子を愛する性あるなり。然れども人は此の性に由りて子を愛すると共に、また自己が子は愛すべきものなりとして、自ら選ぶで子を愛し、子を愛するの途として種々の手段を選び取るなり。又他の例を言へば、社會を害する事は本能上厭ふべきことゝして行はざることゝなり居れり。人は之を行ふを不快とす。然も人

は其の以上に、自ら社會を害する如きことをなし得れども、選んで社會を害する事は爲すべからずとして之を避くるなり。故に人の道德は唯だ本能の作用にあらず。靈自らの作用加はれり。即ち自然の方たる本能の上に靈が脱出し、本能を精神化し、本能を精神的に用ひて、自らの活動をなせるものなり。此の道德の進化せるものに至りては、全く自然の力を脱離し了れり。即ち他人のため、國家のため、真理のため、自己を捐つる如きこれなり。此れ全く靈が自らの選擇によりて爲す所なり。法律の如き國家の如き、もと本能より起れる生活を、靈が之を精神化し、靈に由て社會を規律するの規則を立て、靈に由て社會生活を最も完全に實現し得る組織を造りたるものなり。藝術に至れば、靈は自然界を超脱しつゝ、自然界に即して自己を顯はさんせり。故に藝術は何等自然界の産物に非ず、靈の顯現なり。哲學は靈が全く自然界より脱出し、自然界を顧みて自己の思想の中のものとなし了るとなり。斯くの如く靈は次第に進みて次第に自然界より脱し、自己に由て動くに至るなり。靈の歴史は超脱の進歩史なり。此の超脱の最も實際的にして最も圓滿なるを宗教となす。宗教は人が全く自然界の束縛より脱して、天地根本の實在たる神と合一し、茲に於て自然界より來る諸の絆し

に煩はされず、永遠の存在となり了ることなり。此れ即ち靈の超脱の終局にして、靈的生命の盈滿なり。宗教により人は自然の捕束より脱出し、神と合一し、自然の子ならで、神の子として生き、何等の罪も愆も其の靈を動かさず、唯だ神の聖と神の愛と神の平和と全然調和し、自然界より來る波動に何等の響を感ぜざるも、神の内部の波動、即ち愛の動くとき、義の動くとき、其の微細の波にも應じて、之に従つて上下し行くに至るなり。茲に至て人は全く靈に由て生き靈に由て歩むものにて、真正圓滿の自由を得たるなり。

此の神の子といふ境に入りし時、人の祝福は言以ていひ難きものあり。人間同志の事を考へても、若し我等が官衙會社に於て、互に卓子に向ひ合はせて事務を執る者の間、若くは寄宿舎に於て机を並べて共に修學するもの、間に於て、相互の心合はず、意志相反して事を行はんに、其の不愉快は蓋し言ふべからず。事務も手に付かず、學問も身に入らぬを覺ゆべし。若し又一家の中にて、子が父と合はず、子の思ふ所なす所一々父の苦痛を起し憂を増すといふ如き場合には、たとひ肉親の間と雖も不快極りなく、子は終に居耐らずして家を出走するに至るべし。之に反して共に在る者と心が

合ふ時は、愉快に堪へず、特に家に在て父と合ふ時は、全家が自己の物、自己は家一杯に充てる感をなして已まざるべし、然るに此の宏大なる天地に在て神と合へる子となり、自然の力に驅使せられて動くに非ず、肉慾の指揮に應じて其の奴隷として動くに非ず、神の中に在り、神の意志と共に意志して動くものとなれば、其の祝福や限りなく、自己は神と共に天地に充つるを覺ゆ。基督が父は萬物を我に賜ふ、父の外に子は誰なると知る者なく、子及び子の顯はす所の者の外に父を知るものなしと言へるは、此の境に在る心を顯はせしものと思ふ(馬太傳十 一、二七)。此れ即ち靈なる人の理想状態なり。然るに悲い哉、茲に罪の事實あり。人は靈の生物なるものを、自然の力に捕へられ、之を振り切て自己に由りて生きんとせず、肉に従つて歩み居れり。世の人を見るに多くは此の靈の生命麻痺し、其の發展顯現は阻止せられ、全く自然界に埋没し居れり。彼等の靈的生命は未だ醒めざるが如きもの多し。鳥は網によりて捕へられ、獸は罾によりて陥れらる。此れ彼等の生物的生命的活動の途は一筋にして定まり居ればなり。人は孔子が老子を稱して言ひしと云ふ如く夫れ龍の如からざるべからず。龍の途はもはや尋ね難し。靈の生命は肉の生命とは異なる活動をなし、靈自身に由るものなれば、禽

獸の途を歩まず、禽獸を捕ふる途に由て捕はるべからず。然も事實に於ては禽獸を捕ふる同じ力に捕へられ同じ途に由て陥れられつゝあり。此れ即ち靈の生命が尙醒めず活動せざるものに非ずや。人は多くの活動をなせども、其の活動は大抵生物的生命的活動なり。園藝試験場に至りて觀覽するに、葡萄の樹は障子を立てたる如き棚に凭り、其の幹は大いなる株をなし、其より直ちに新らしき小枝發出して、多くの果の房を垂れ居れり。場員の告ぐる所に由れば、葡萄樹は毎年其の年に出だせる蔓の外は決して果を結ばぬものなるが故に、毎年收穫の後には凡ての枝を切り去り、幹のみを残して、來年また新らしき芽を出だすを待つなりと云ふ。素人は斯かることを氣付かず。葡萄の蔓をば其の伸びるに委せあるが故に、養分は其等無用の枝に分たれ、果を結ぶこと却て少きなり。人の生活は多事多端に涉り、枝葉繁々繁茂すれども、多くは靈の果を結ばぬ活動にして、多くは生物的生命的發現なり、之があまりに多くして、人格の精力を其方に奪ひ去り、人をして五十年の一生、何等永遠界になす所なく、永遠界に於ける自己の生命を失ふに終らしむ。彼等は全く自然界に捕はれて、靈の自由を得る能はざるなり。マイアース等の説に由れば、人には第二人格あり。自らの知らぬ我なり。

此の隠れたる我は此世にては普通は現はれず、此世にては用のなきものなり。されど顯はれたる我よりは大なるものなるが、此は死後に至りて用あるもの、其時十分に活動するものなるべしと云ふ。其の説の當否は兎に角、此の説の暗示する如く、人の人格は此世にては大部分が隠れて活動せず、埋没して終るもの少からず。此世にて活動せずして可なる物の埋没は忍ぶべし。然れども活動せざるべからざるものが埋没す。此れ實に遺憾の極なり。何の取る所なき小兒を學校に登らせて始めて或る課業に非凡の天才あることを見出すことあり。若し學校に入れずば其の才能は活動せず伸びず、終に埋没し終るべきなり。思へば恐ろしき至りにて、一廉の能力を抱きつゝ、人も知らず、自らも知らず、暗より暗に葬らるゝものも、世の中には決して少からざるべし。然るに重大なる靈の生命が此の悲運に遇ひつゝあるは最も哀むべし。人は靈の生命を大いに發揮すべきに、外界の力や生物的生命に壓迫せられて、其の下に埋もれ、殆ど抵抗さへもなし得ざるほど薄弱となり居れるなり。

唯だ其のみならば尙幾分恕すべし。人は靈の生命を有しつゝ、之を發揮して肉の生命を使用せざるのみならず、却て生物的生命に役せられ、其の活動の器械となれる面

目も至て明なり。催眠術にかゝりたる者は、施術者の暗示のまゝに行動す。彼れ立てと言へば立ち、坐れと言へば坐り、段を上れといへば上る様をし、川を涉れと言へば涉る様をし、汝の身體は石と化して硬直なりと言へば、二つの机の間に橋として架け、重き物を上に載せても曲らざるなり。人の靈は生物的生命のために却つて此の受術者の如く役せられつゝあり。肉が一たび手を振つて眠れと言へば直ちに眠り、何事をなせと命すれば諾々として之をなす。折角自然界より醒め出で、自己の自然界より以上に出で居れるを意識し、之を超越して自由なる活動をなすべき質を有しつゝ、自らまた自然界の中に還り行き、其の力に囚はれ、其の力のまゝに動く。或は之に由て爲すべきことを爲さず、却つて人の爲すまじきことをして、馬となり牛となり狼となり獅子となりつゝあり。或は恐ろしからぬものを徒らに恐れ、悲ますして可なるものを妄りに悲み、痛くもなきにたゞ痛みを感じつゝあり。之を罪といふ。

罪とは咎むべき性質のものをいふ。人が靈の生命を有しながら、其にふさはしからず意志するすることなり。若し靈の生命なかりせば人には罪なし。何となれば、靈のなき者は動物にして、萬事自然の力に驅られ行くなれば、其の責は自然にこそ歸すべ

五三四

けれ、動物をば咎めんやうもなし。然れども人は靈なり。靈に由て自然以上に出づるを得べく、自然以上に出で、人たる面目を保つ者なるに、自ら選ぶで之を爲さず、却つて自然の力を放つて靈の上にまで支配を及ぼさしめ、自ら之に従つて歩む。故に其の爲すは自己がなせるなれば、茲に咎むべき性質の行動となり、即ち罪となるなり。或は唯物論者等は人も自然の力に驅らるゝのみにて、自ら選擇して事を爲すに非ずといふものあれど、此は大抵の人の取らざる意見にして、宗教者は勿論、倫理學者、法律學者みな人に選擇てふものゝあるを認む。之を認めずんば宗教も倫理も法律も無論問題とすべきものに非ざるなり。人に此の選擇の方あることの證明に至ては、種々の點より試みらるれども、茲には之を論ずるの餘地なし。余は唯だ吾人の經驗より、吾人は如何なる事情の中に在りても、惡をなさざるを得る自由あり、如何なる遺傳の者とも、自己に由て惡を爲さざるを得、教育また如何にあるも人は必ず或る事を爲すべく定まらず、自らに由りて右にも左にも決定し得る事實を知ると言ふに止めん。故に惡をなすときは罪せらるべく、かゝる行をするが罪を犯すなり。然るに人は盛に罪を犯しつゝあり。

如何に人が爲すまじきとを爲しつゝあるかは、萬人皆な之を知る。罪の事實は人類の著しく又最も恐るべき現象なり。人苟も良心あらば、罪の事實を思はずして已むことを得ず。特に意志の強く、觀念の高きものは罪の事實を最も明白に意識す。個人としても國民としても罪の意識の盛なりしものは、皆意志の強く觀念の高き者どもなりき。見よ希伯來人は最も罪の意識強かりし國民にして、舊約全書には罪を言ふこと實に明白痛切、世界に其の比を見ざるものなるが、其の意志の強烈なること、世界に冠たるは何人も之を知れり。其の最爾わが四國よりも小さき邦土を擁し、世界的大強國の間に介在し、常に壓抑征服せられつゝ、千三四百年の國家を維持し、國家亡びてまた二千年に垂んとすれど、尙其の宗教を棄てず、其の國民的特質を棄てず、其の未來に救主來るてふ望を棄てざるを見ても、如何に彼等が意志の強きかを知るべし。基督教の世となりては、希臘人拉典人みな基督教を奉せしが、然も罪の意識の猛烈なりしは拉典人なり。彼等は罪を宗教當面の又終局の問題として考へたり。而して拉典人は最も意志の堅固なる人民なりしこと皆人の知るが如し。獨逸人また意志つよし。故に罪を思ふことまた拉典人に遜らず。却つて意志の優るゝだけ罪の念も優れ居れり。個

人としてもパウロの如きは意志の猛烈なりし人なるを以て罪の念また深かりき。其の書翰は罪を第一の問題として救を説けり。アウグスチヌスの如き、ルーテルの如き、また最も多く罪に悩みたる者なり。蓋し意志の強き者は、己が善と思ふ所をなさんとし、悪と思ふ所をなさざらんとする願望切なるに、パウロの謂ふが如く、我が肉體に外の法ありて、己れを捕へ、思はぬことをなさしむるを感じて已まず、心中の戦闘の非常に激烈なるを意識するが故に、罪の念また烈しきなり。之に反して意志の弱きものは、心中に争ひなく、有耶無耶の間に悪をなして自ら其の悪なるを感せざるなり。されば罪を感せざる者必ずしも美しくしき人には非ざるなり。詩篇第五十一に歌へる煩悶、羅馬書七章に記せる心闘、如何に大なる靈の中の活劇なるぞや。釋迦の如き人もまた罪の力の恐るべきを感じたり。其の出離は之に由りてならずや。かく正當なる良心、大いなる靈を以て居れば、吾人は罪の事實に驚愕せざるを得ず。社會は罪に充てり、個人は罪のために靈魂病み崩れ居れり。詩篇第五十一に在る如く、我母罪の内に我を孕みぬと感じ、パウロの考へし如く、罪の法己れを支配するを思ひ、又アウグスチヌスの如く、人は罪を以て生れしと信せざるを得ざる心地する位なり。罪は勿論自己が犯す

ものにて、人が罪を以て生るゝといふ説は取るべからざれども、大人物等をして原罪を信せしめしほご罪の事實は人生に深く存在し居るなり。

斯くの如き罪は其の結果を生じ居れり。世の中の不幸や悲惨は皆な罪の結果なり。世には自然の力によつて來れる不幸悲惨あり。地震、洪水、或は老病死などの如し。何故に天地に斯かるものあるかは、昔の人には大いなる疑問なりき。今も之を見て神を信するの礙阻となせる人もあらん。然れども神は他の多くの材料によりて信じ得らるゝが故に、此の一箇條のみの反證にては否定する能はず。既に大體上神在りと信せらるゝ以上は、其の信仰に依て此の自然的禍害をも解釋し、其の内に神の心を認むべきものとなる次第なるが、其は今茲に論せず。唯だ自然的の禍害といふものは存在すといふ事實を認むるのみに止むとして、さて是は存在しても、此は罪惡に比すれば不幸たり悲惨たる程度至て輕し。よし其等の不幸悲惨に遭遇するも、人もし正義を持し、心に邪なくば、其の不幸悲惨も不幸悲惨ならず、却つて斯かる人物は幸福なり。且又人と人との間に罪なくば、此等自然的禍害も直ちに救濟せられて、其の結果を及ぼすこと至て少し。然るに茲に人の罪惡より來る禍害あり。是が世に及ぼせる惡結果は到

底筆紙の盡くす所に非ず。吾人は日々の新聞紙に於て、吾人の實見實聞に於て、如何に世の中に罪惡が多くして、之が禍害を起せるかを知る。世界は罪のために破壊せられ居れり。社會は罪のために惱み居れり。一人は罪のために苦み悶えつゝあり。若し罪なくば人類は今在る者より全く趣を異にせるならん。

然れども罪が自己に及ぼす結果は其の結果の最も恐ろしきものなり。人は罪のために自然界に捕へらるゝが故に、自ら靈の生命を有しながら、自然界の力のために翻弄せらる。肉慾のために壓せられて自由なく、従つて精神清からず聖ならず、常に争闘ありて苦惱を感ず。又自然的の禍害を蒙るときは、之がために傷つけられ、暫くも平和あることなし。斯くの如く、精神に聖と平和となきは、人に取りて至大の不幸なり。人もし此の不幸を自己の内に藏せば、たとひ外部に全世界を得ども幸福なる能はざるなり。多くの人は唯だ此の方寸に得ざるものゝ爲に、心常に樂まず、何物にか追はるゝ如く、餓鬼の如き不安不満の日を送りつゝあり。然れども管に之に止まらず。罪は人を神より離す。罪ある者は神と父子の關係に入る能はず、神と合一する能はざるなり。此れ當然の事なり。人その靈を有しながら、其意志を自然界に突き入れ、自然の力のまに

まに行動す、彼は上に向ひて神を慕ひ神を求め神に合ひ神と共に動くを志すべきに、自ら下に向ひ神に反したる方向に志して行動す。斯くて神と合ひ得んや。自ら神を背にして走るなれば、神と離るゝや明白なり。既に神と離るれば其行に何等の靈的祝福あらざるも亦當然なり。神の子たる祝福、即ち神と共に在り、神と共に動き、神の聖と愛と平和に充ち、無限の喜悦を永遠に感覺することは有り得べからず。此の祝福なき所、神の外なる暗黒裡に、罪の意識を以て懊惱し、不安不満苦痛の裡に永き生命を保たざるべからざるべきなり。

之を罰といふ。罰とは必ずしも人の惡に對する神の報復には非ず。クラークも言ふ如く、罪に伴ふ禍害なり。人罪を犯さば斯かる禍害は必ず來らざるべからず。之を罰といふなり。故に基督も不信なるもの惡をなす者の最後は、外の暗黒裡に投げ出だされ、罪の意識のために惱まされ、盡きざる蛆に喰はれ、消えざる火に焼かるゝ心地して、號泣切齒すべしと言へり。基督は此の結局を滅亡といへり。即ち靈の破滅なり。然り靈こゝに至らば其は全然破滅に陥りたるなり。

されば人は靈の生命あり、自ら選擇の自由あるものなれば、其の罪は自然必至の勢

によるに非ず、無論神これを導くに非ず、自由を有するもの、自由として自ら犯せるものにて、其の破滅は自ら取る所に外ならぬなり。或は神は何故に罪を犯すを得るやう人を造りたるかと問ふ者あれど、吾人は之に對しては、神は人を自由に造りしのみ、もし自由を有せざる者として人を造りたらんには、此れ自動器械を造りしなり、神は人に靈の生命を與へたり、其の靈の生命は其の力を用ひ、自ら惡をも選びし故に、罪起れりと答ふべし。されど然かく問題を上より考へ神の方より考ふるを要せず。吾人には事實上選擇の能力あり。此れ罪の基なり。罪は自己の犯せるものに外ならず。人は自ら罪を犯し、破滅に陥れり。

此の破滅淪亡より人を救ふが宗教の目的なり。宗教は自然の力の束縛より人を切り離し、其の靈を自らに由て動かしめ、神と一つに合はせ、神の無量の聖と愛と平和の中に住ませ、斯くて靈の生命を萬葉の花の如く、咲きも残らぬ圓滿境に携へんとするものなり。此れ救拯なり。されば劣等なる宗教の如きは、今日の人類にはもはや益なくして害あり。彼の淫祠迷信の如きは勿論、幼稚なる自然宗教の如き、多神教、祖先崇拜の如き、人の靈の生命を咲き出で、之を美はしくし清くし高くし、聖や愛や平和

にて徹底せしむるに何等の能力なきのみならず、却つて人の知力を麻痺せしめ、思想を萎縮せしめ、品性を墮落せしむるものなれば、靈的生命を枯らし、人を破滅に陥るものたるなり。眞に此の靈的生命を救拯するは、吾人耶穌基督に於て之を見る。

乙、耶穌基督の救拯

耶穌基督は人の此の生命を救へる者なり。彼は健康なる者は醫士の助を要せず、唯だ病ある者之を要す、斯くの如く人の子の來るも義人を招かんために非ず、罪ある者を招きて悔い改めさせんためなりと自覺せり(馬太九ノ十三)。凡て疲れたる者又重を負へる者は我に來れ、我れ汝等を息ません、汝等心に平安を獲べしと言へり(馬太傳十ノ二八)。人の子の來るも人を役するためには非ず、却つて人に役せられ、又多くの人に代りて生命を棄て其の贖とならんためなりと言へり(馬可傳十ノ四五)。彼は自ら人を救ふために勞し、人を救ふために生命を棄つることを意識し居たり。故にまた我がために生命を失ふ者は之を得べしと言へり(馬太傳十ノ三九)。人を神の子とするは即ち之を救ふ所以なるが、耶穌が此の事に意志を集中し居りしは福音書全體の明記する所なり。神を天父なりと教へしも、

神の國を建てんと努力せしも、他人を愛せよと教へしも、皆な人を神の子とせんとするためなるを明言し、若くは事實上に之を示したり。耶穌は人を圓滿の生命に到らせんとして活動せるなり、凡て彼の教訓も、辛勞も、最後の十字架も、皆な此の目的を指し居れり。

此の自覺は現在及び未來の事實の自覺なりき。耶穌に由て人は實に神と合一して其の生命を得たり。パウロは最も痛切に、自己は基督に由て肉に死にて靈に生き、世に死にて神に生ける者となれるを告白せり(羅馬書六ノ一一一、一四)。我等が受けし靈は奴隸たる者の如く再び恐懼を抱く靈に非ず、アバ父よと呼ぶ子たる者の靈なり、聖靈自ら我等の靈と共に、我等が神の子たるを證すとも言へり(羅馬書八ノ一五、一六)。約翰傳著者は最も多く救を言ひ生命を言へり。曰く夫れ神は其の生み給へる獨子を賜ふほどに世を愛し給へり、此は凡て信する者に亡ぶることなくして永生を受けしめんがためなり(約翰傳三ノ一六)。我が言を聽き我を遣はし、者を信する者は永生を有し、且つ審判に至らず、死より生に遷れり(二四)。我は天より降りし生ける麵麩なり、若し人此の麵麩を食はば窮なく生くべし、人の子の肉を食はず其の血を飲まざれば汝等に生命なし、我肉を食ひ我血

を飲む者は永生あり(六ノ五一及五三、五四)。我は復生なり生命なり我を信する者は死ぬるとも生くべし(二五)。我は途なり眞なり生命なり(一四)。我は葡萄の樹汝等は其枝なり、人もし我に居り我れ又彼に居らば多くの實を結ぶべし(一五)。父よ汝我に居り我亦汝に居る斯の如く彼等も我等に居りて一つにならん、我等の一つなるが如く彼等も一つならん(一七、一八)。此れ皆な著者が基督に由て神と合一し、溢るゝばかりなる生命を得し自覺を以て基督を傳したる語ならずや。此れ唯だ告白の言のみ。弟子等の實際の生活に於ては、基督より得たる生命盛に活動し居れるならずや。パウロの書翰の何れを見ても、全面この新らしき生命の涌き上がれる文字なり。若しパウロを舊き人に留まらしめ、猶太教のまゝに在らしめば、パウロ書翰の文字は現はるべくもあらざること言ふまでもなし。其他約翰傳といひ其他の文書といひ皆な然り。而して斯くの如き文書を著す生命は、他の方面にもまた生活となりて盛に顯現す。使徒行傳を讀みてパウロやヨハネの活動を見れば、如何に夫れ活潑にして高く聖なるぞ。舊きまゝの人の流露に非ずして皆な新生命の流露なり。然り基督昇天後の弟子等の行動は實に基督の與へたる生命の發現なり。基督教會は斯くて始まりたり。若し新しき生命弟子等の内に充實し、盛

に活動するに非ざりしならば、彼等自身の生活なく、基督教會起らず、新世界の紀元始まらざりしなり。然るに此の生命ありしが故に、猶太人異邦人の引き續きたる猛烈の迫害の中にも茲に新しきもの起りて、世界を顛覆したるなり。此の生命は既に耶穌の在世中より起り居たるは明なり。若し在世中に發端せずば、昇天後突如として出で來る理なければなり。然り耶穌の在世中に、弟子等は彼に招かれて其の救を感じ居たり。彼等は次第に神の子たるの實を興へられ、此に次第に顯在意識とならんとしつゝありき。彼等はガリラヤの匹夫野人よりして、當時教育あり修養ある者は勿論、古より多くの預言者と義人とが求めて得ざりし所のものを有するものとせられたり(馬太傳十、三ノ十七)。彼等はいと小さき者も洗禮のヨハネより大なりき(馬太傳十、一ノ十一)。彼等は神に付て新たに知り、自己の地位を新に意識し、生活の方針を新に立て、之に従ひつゝありき。其の内には摩すべからざる生命ありたり。此が時として其の顯在意識の中に頭を擡げ來り、或はカイザリアピリビへ行く途上のペテロの告白の如きものとなりたり(馬可傳八ノ二七―三十)。耶穌の救は又弟子等の内に事實として意識せられたり。千九百年の基督教徒は皆な之を同一に經驗す。基督の救拯は吾人にも初代の弟子等に於けると同じく確實なる事實也。

吾人の内にも新しき生命歌々として消すべからざる者あり。曾て無かりし者今有り、吾人の喜びとなり、力となり、吾人の内に浮囊の如く存して、吾人を沈淪より引き上げ、神の生命の中に浮ばしめ、吾人をして我等が天國を相續すべき抵當たる約束の聖靈を以て印せらるゝを感せしめ、神聖靈を以て印し給ふは其の買ひ受けし者を救ひ且つ己の榮を顯はさんためなりと叫ばしむるなり(以弗所書一ノ十三、十四)。然かのみならず此の生命あるによりて吾人は幾分にも前と異なる生活をなしつゝあり。吾人の生活の方針は昔と異れり。吾人の内部にて主要なる地位を占むる要素は今や昔のものならず、昔なかりしもの吾人を支配し、昔のものは次第に下の方に押しやられ、吾人の人格の外に押し出だされつゝあるなり。此れ耶穌の救の事實なり。此の事實ある故に基督教尊し、基督教は唯だ救を思想し救を説くのみならず、現實に人を救ひつゝあるなり。基督教の到る所、瓦は玉となり、枯木は花咲きつゝあるなり。パウロは此故に曰く基督は神の力また智慧なりと。又曰く神の國は言に在るに非ず能力に在りと(哥林多前書一ノ二四、四ノ二十)。然らば耶穌の救は靈的生命に如何なる影響を起すことなるか。耶穌は何を人の靈に與ふるか。第一には耶穌は人の知を啓發す。人は正しく知らざるべからず。知らずし

ては如何に生活すべきか方針を立つる能はざるなり。宗教に於ても明白にして正しき知識なくしては靈魂の生命の全うせらるべき理なし。茲に於て耶穌は人の宗教知識を啓發することを大切として、之がために活動したり。余は先に耶穌は教訓により行爲態度により又直接活動即ち感化に依りて救の事業をなせることを明にしたり。耶穌は實に此等の法式によりて人の知を啓發し、人をして宗教的に知るべきことを明白確實に知らしめたり。

彼は先づ神を示しぬ。神と合一するには先づ神を知らざるべからず。神の所在さへ、方角さへ知らずして、何と意志を向くべきか明なるべからず。神の性質を知らずして、自己の態度を立て得べからず。多くの人は神を探り求めて而して其の偏れる所を探り當て、之を歪みて觀、之に誤れる態度を取れり。従つて自己の人格を傷つけ、靈の生命を埋没せり。然るに基督は其の靈界に透徹する無二の才を以て、神の真相を見、其の人類に對する態度活動を經驗し、之を其の教に於て、其の實行に於て、其の生活全體に於て、吾人に明に示し、又其の感化を以て直接に吾人の靈を新たにし、此の新啓示を見るに堪へしめたり。彼は神の天父なるを説き、其の人に對する熱愛を説き、自ら其

の愛を心として人を愛して身を棄つるに及び、又其の仰慕と柔順と信頼とに由て、いよく天父の現在せるを示したり。人は基督に由りて神を知り、神の内部の性の縦斷面を見、其の血の流れつゝあるを見たり。何人か耶穌に於て見るほど神を明白に見るや。耶穌の説を見、耶穌の品性を見、耶穌の生活を見る者、誰か神なしと言ひ得るや、誰か神を天父ならずと思ひ得るや。神は耶穌と偕に在り、耶穌に於て動けり。

次に基督は吾人をして人を知らしめたり。吾人は人に付て知る所なくば、人たる自己は如何に生活すべきかを知らず、吾人の意志の立てやうもなきなり。人に付て知らば夜の明けたるが如く、向ふ所を定めて歩み出づべきなり。基督は人は尊しと教へたり。神は父なれば人は子なり。人の理想は神と同質なるもの、神に達するもの、神と合ふものなりと教へたり。基督の展べたる天地の活畫には、人は全然自然界の中より超脱して神の中に抱かれ居れり。されど彼は唯だ教に於て人に付て示したるのみならず、其の品性生活に於て人を示したり。彼は實に人なりき。正則の人にして而して完全なる人なりき。彼に於て現はれたる人は實に神の子なりき。基督に於て人は如何なる筈のものか、即ち人の理想如何の現はれたるを見るなり。従つて之に反對せる現在

の人の罪と不完全とを見ることを得。純金の前には賈造金は一見して其の偽を暴はす。自ら内を省みて満足し、他人と比べ見て誇れる者も、基督の前には自己の不完と惡とを見出ださざるを得ずして、茲に心謙虚となり、悔改精進するに至る。約翰傳に聖靈來らん時、罪につき義につき審判につき、世をして罪ありと覺らしめん^ルとあるは眞なり(十六)。實に基督に由りて罪も義も從つて審判も、人の心に明にせらるゝに至りたり。

第三に基督は吾人に神と人との合一を示したり。彼の人格は古より神人 *Dei person* といはれ來れり。彼に於て神と人との合一して一人格となれりと言はれしなり。此の意味の合一は茲にて問はず。然れども人なる耶穌が神と合一せる實は確に存したること言ふまでもなきことなれば、人は基督によりて神人合一を知りたり。神人の合一は決して夢に非ず、思想に非ず、基督に於て事實なり。基督は人と異なる性のものに非ずして、而して是あり。神人の合一は實現せられたるなり。されば何時にても實現せられ得べきものなること明なり。茲に於て聖と愛と平和の生活あり。此れ神と合一せる祝福なり。何ものも犯す能はず、傷つくる能はざる圓滿の祝福、基督に於て實現せられたり。人は基督を仰ぐによりて之を知るを得るなり。彼は自己の實生活に於て神

人合一を示し、之を教に於て力説したり。天國を求めよといひ、神に事へよといひ、神に歸れといひ、基督の全福音はみなこれを説きたるもの、放蕩息子^ノの譬などは、神を教へ、人を教へ、合一を教へたる標本的の教訓なり。

第四に基督は斯くの如く、神を父とし、自ら其の子たり、神と合一せる生活が、人間同志の間には如何なる生活となりて發現するかを示したり。縦に獨り直接に神に接し、神と關係を正しうしたる人は、横に自己と同じ平面の人に對しては如何なる行動をなすに至るか。基督は天父の子とならんために無盡の愛を以て人を愛せよと教へ、自ら之を實現したり。彼の教、彼の行、凡て彼の生活は人に對するの道の如何なるものなるかを示す。吾人が人として如何に世に生くべきかは、基督を見れば分明し、基督の教訓、人格より原理を引き出だし來りて、之を人生に敷衍し適用するとき、往く所として滯るを見ず、人生を非常に幸福にし、其の内容を豊富にし、之を充實す。

斯くの如く基督は吾人の知を啓發して、靈界の眞相と其の理想とを知らしめたり。基督來りて其の生活が人類の靈魂の鏡に映るとき、人は其の知性を長夜の睡眠より醒まして、新に靈界の大眞理を悟りたり。曠味なりし其の靈魂は、茲に光を投げ入れら

れて、無限の智慧を有するに至れり。げに基督の教訓生活は人類界に於ける無二絶大の新天啓なりき。耶穌は自ら靈界の事を感覺し其の經驗する所を意識し、之を人に移して人の意識とせんために活動し、其の法式として教訓をなしたり。耶穌の前にも此等の宗教真理に付て感覺し之を啓示したる者なきに非ず。然れども其等は極めて断片的にして、又之を啓示する人格の力も豊富ならざりしを以て、其等の宗教真理は唯だ閃光の如く明滅し、未だ常住なる實體として現はれず、其に由て觀念の組織を成さず、従つて人の精神を支配し、人格を作り、歴史を作ること能はざりしなり。然るに耶穌に於て十分明白なる經驗となり、又十分組織ある觀念となり、其の教訓其の生活として啓示せられたり。宗教真理は茲に於て、唯だ断片的のものが離れ〜に存在するに非ずして、聯絡あり中心あるものなること明となり、何れが首にして何れが尾なるか顯はれたり。此れ基督教觀念なり。天地は空濶なり。神は無限なり。靈界のこと又方角も定かならざるなり。唯だ大人格あつて之を感覺し、之を經驗し、其を親しく啓示するに由りて人は其等の無限なる事物に付て其の大人格の觀念を形式として自らの觀念を作り、此の觀念に従つて生活して、其の眞實と適合し障害なくして幸福なるを見

出だし、茲にいよ〜其の觀念の眞理と合へることを確にして、觀念を立てたる者を宗とし仰ぐ。されば觀念を立てたるものは、無限無劃定の事物に自ら經驗する所に従つて劃定を加へ、一定の觀念を作りたるものにて、一個の創造者ともいふことを得るものなり。基督は或意味に於ては宗教眞理を創造したるものなり。神は彼に由て天父となりたりとも言ひ得べし。天父を與へ、此の觀念を基とせる凡ての生活を與へしものは基督なり。勿論此の創造は絶對的創造とは異れり。又美術家が山より掘り出だしたる無定形の石塊に向つて、刀鑿を加へて自己意想の影を茲に現出するが如く、混沌空虚の實在を自己の精神の形式に入れて、之を吐き出だして他に示したるものにもあらず。實在について自己の接觸し感覺し經驗せる所を、明に顯はして示したるものなり。故に開示 *revelatio, anoklayin* なり。蔽はれ居たる眞相を開いて示すなり。唯だ此は基督其人の經驗せる所に由て示すものにて、彼に由て始めて人の思想に入り經驗に入るに至れるもの故、茲に獨創の意味あるなり。基督なかりせば神は希伯來人の見たる神か、印度人の見たる神として永久に知られたらんのみ。従つて宗教の萬端は又其等の宗教たりしならんのみ。基督に由て人は實在の人と交渉せる眞相は天父なることを確

にし、之に由て宗教の萬端を築き上げたるなり。

基督は知識を與へたり。知識は智慧の初、意志の本なり。人の靈は衝動に由て動かす、其の知る所により、自ら思想し、自ら選擇して動くなり。故に人の知が眠れる間は、彼の動くは唯だ盲目的衝動のみ。此の間は未だ靈の生命の活動に非ざるなり。故に正しき知識を與へて、之に従つて正しく意志せしむるは人を救ふの所以なり。基督は凡て宗教的真理を正しく示したり。人は基督に由りてもはや誤れき途に意志せず、無用の勞をなさず、最も確實に最も容易に其の目的を達し得るに至れり。人に正しき知を與ふるは、味者を覺らしむるものにて、其の價甚だ大なり。知は靈の能力なり又活動なり。唯だ感覺するのみならずで認覺し、認覺したる所を思想するが知なり。味者は自然性に掩はれて靈が未だ知の作用を發揮せざるものなり。宗教に付ての味者は宗教について未だ靈の作用を十分に發揮せざるものなり。未だ自然界より離れず、無限に合する能はざる者なり。されば眞の宗教的知識を與ふるは、靈の生命を正しく作用せしむる者なり。既に此事自身が救拯の一部たるなり。然かのみならず、眞の知を與ふる時は、之に伴ふて多くの祝福あり。人は眞に神を知り人を知り神人の關係を知りて、茲に

安んずることを得べし。神を天父として諸の方針の定められある靈界を知るは、人に取りて大いなる慰藉なり。多くの恐や悲や苦や悶えは之に由て取り去ることを得ん。人の心は茲に平安を得べし。然も唯だ之に止まらず、更に積極的には斯くの如き知は人に大なる感激を起し、精神の底より出づる奮發を與ふ。神は天の父なりと知りて誰か喜ばざらん。喜びて其の恩に感謝せざらん。特に基督に於ける神の愛の顯現を見、其の十字架にまで至れる熱情を見、誰かこゝに心を動かさざらん。博士デーレ Dale の傳ふる所に由れば、約翰傳三章十六節の、夫れ神は其の生み給へる獨子を賜ふ程に世の人を愛し給へり、此は凡て彼を信する者に亡ぶることなくして永生を得しめんがため也といふ句をはじめ、之に書かれたる基督の生涯と教訓とによりて、曾て或日本人は非常に感動し、榮光と恵の幻が天より現はれ來りし心地し、基督の前に伏して之を拜するに至りたりと云ふ (The Living Christ and the Four Gospels)。余は其の日本人の誰なりしかを詳にせずと雖も、さる人も有りたるべし。神に付ての知が斯くの如き感激を起し奮發を醒ますのみならず、基督の與ふる人に付ての知も、亦同じく然るべし。基督を仰いで自己の理想を見るもの誰か讚嘆し向上の志を振ひ起さざらんや。舜

も人なり我も人なりといふ意識さへ人を聖人にせんと思はる。まして基督を見るをや。基督を仰いで完全の人の姿を見、其の凡ての捕束より超脱し、圓滿なる神の子の聖と愛と平和とにて充ち溢るゝを望むとき、之を慕ふと共に翻つて自己の不完全を見、罪を見、謙虚己れを下り、之を否定して基督に従ひ、神の子の全き祝福に入らんとするの翹望湧き起りて、之を抑ふるも得べからざるに至らすんば已まざるべし。斯くて基督の啓示は人の靈の生命を盛んにし之を其の掩蔽埋没より救ひ出だすなり。

然れども此れ基督の救拯の半面なり。人は神を知り自己を知るといふことのみにても既に新らしくなりしなり。自己の内部には其まで無かりし知識あり思想あるに至りたるなれば、其の人格は新らしき要素を加へたり。此の要素は清く高きものなれば、人は其だけ清く高き人格となりたるなり。然れども其のみにては完全に人の靈の生命を救ひ得ざるなり。人は知るのみにては全からず行はざるべからず。然るに知行合一てふことは至難のことなり。古の哲人等が知らば行ふべしと考へしは誤りなりき。世界の善良に趨かざるは知識なきに非ず、意志せざるが故なり。ショーペンハウエルも之を言へり。茲を以て人を救はん者は、其の人格を内部より感化し之を事實上一變し

て、自から善良なる意志を立て、神に向ひて動き、神と合ふに至らしめざるべからず。基督の救拯の殘の半面、然も重大なる半面は茲に在り。此れ第二の點なり。

基督は其の人格を以て直接に人の靈に活動し、自己の人格の内容を信する者の人格の中に注ぎ入る。思想の傳送の試験に於て、甲の思想が乙の心に移るが如く、基督の高き思想は、其のまゝ、信者の心に移りつゝあり。信者の内面は最高最美のものにて充たされ、眞に神と合一し、其の無限の祝福を受く。電氣は高壓のものより低壓のものに向つて流れ、低壓のものを充たすが如く、耶穌基督の至強至大の人格は、凡て苟も之に觸るゝものを大電撃にて打ち倒すが如き勢を以て、低き人格の中に流れ入りつゝあり。人は基督に接して、其の人格を仰ぎ、之を心に受容せんとするときは、基督の人格は直ちに其の人の中に入り來り、今まで無かりし新らしき思想その中に生じ、新しき願望起り、初の中は尙其の勢ひ微にして、舊き内容の組織尙崩れず、品性もさまで變らざるべきも、漸くにして新らしき内容は舊きものゝ間に割り入り、やがて舊きものを押しつけ、之を次第に人格内の下の方隅の方に押しやり、新しきもの勝を占め、新しきものにて全人格を支配し、其の思ふ所、行ふ所、新しきものゝ方に従つてする

に至り、終には舊きものは人格内より驅逐し去られて、新しきものゝみを以て充たさるゝに至る。此時に於てはもはや基督の精神を以て充たされたるものにて、其人は全く基督を再現したるものなり。

而して此の基督の人格の内容、新しき生命の内容といふは如何なるものかといへば、基督の中にある聖と平和と愛となり。彼は全く自然の羈束より超脱し、唯だ靈に由て生き、神と意志全く合ひ、其の行動二ならざりき。彼には肉慾の絆し其の靈を引き下ぐる如きことなし。故に神と和合せる聖徳その内部を充實したり。聖とは凡ての汚れより自由にして光明燦爛たる徳のことなり。基督には之ありき。彼には又平和堅かりしなり。何となれば靈全く神の中に在りて神と父子たり、神を信じ神に充たさる。自然の力より来る凡ての誘惑苦惱その靈を弄ぶ能はざればなり。彼は又神の愛の海の中にありて全く之に浸り、神の愛の波と共に上下せしが故に、自らまた愛の人格たりき。斯くの如き内容が信する者の靈に入り来るなり。而して之を充たし、全く同じ壓力となすなり。故に人は清められて神の子となり、天國の祝福に充實せられ、外には其の榮光と力を發揮するまた當然となるなり。

故に新生命は外より来る。若し外より来るなくば人は永久に救はるゝ理なし。人格は既に定まりて宇宙を成せり。即ち統一せる體系あり。其自身の内部には何所を掘りても其自身の有する物より以上の物存せず。如何にして之が進歩し得んや。自ら罪人ならば如何にして之より脱出し得んや。無き袖は振られざるなり。然れども吾人の外に神の活動あり、基督の直接の活動あり。吾人一旦心を開いて之を受くるときは、幾千萬ヴォルトの電力よりも強き壓力を以て吾人の内に入り來り、其の内性は吾人の内性となり、新しき内容を與へ、終に吾人を一變す。此の變化急激なるもあり、緩慢なるもあり。されど人を新にするに於ては同じ。基督教は自修鍛練と異れり。神の宇宙大の救の活動に向つて心を開くに由て救を得ることなり。故に基督の弟子等よりして救拯は決して自己の功績によらず、一に神の恩恵に由るといへり。パウロは切に之を論ぜり。新生命は基督より與へられ、吾人は基督の方より働きかけられ救はるゝなり。されば救拯の條件としては信仰といふもの大切なり。信仰には種々の意義あれども、パウロ等が謂ふ所の信仰の最も高き意義は、人が耶穌基督に向つて精神を開き之に全然自らの靈魂を投げかけ、之と合一するといふことなり。確に基督に向つて心を開き、

其の盛なる活動を吾人の精神に受け、其の人格の内容を注ぎ入れらるゝこと最も大切なり。人の意志は終局的の單位なり。之をば何者も割つべからず、何物も如何ともすべからず。此の意志のみは其の人自らのものなり。自らのまゝなり。故に基督の大なる活動に對しても、自己の意志を閉ぢ、又は之に背行せば、永久に人は其の生命を注が入れらるべからず。之に反して意志を以て心を開き、基督の活動を受けなば、其の内性は吾人に入り來り、吾人自身を造るに至る。基督を信することが基督教の要素として、使徒より唱へられ、萬世に重んぜられ來れるは此故なり。

實に救拯は人格の内容を分與する事に於て完成す。此れ基督教の救の特色なり。基督教は決して教義の納得に非ず、新生命の傳送なり。故に主義綱領を首肯し千人萬人相携へて政黨に入る如くして基督信徒となる能はざるなり。基督教は人格より人格に移り行くなり。山下水の木がくれて流れ行く如く、一人の隠れたる所に在る新生命は、見えざる内に他人の靈魂を沾はし、其所に湛へて之を同じ生命とす。若し斯くの如く人格的のものならざりしならば、基督教は今日まで人を救ふの力を有する能はざるや明なり。教義は人を動かさざるなり。模範は長く人を救はざるなり。滔々たる美しくしき

教義、高潔の人格の跡みな然り。然るに獨り基督教に永久救拯の力あり、ますく發展して其の壓力を加へつゝあるものは、實に此が基督人格の内容分與てふ事實を有すればなり。人は基督より新生命を注ぎ入れられ、人格を一變し、神を念じ、神を信じ、神を愛し、神に事へ、神のまゝに生くるに至りて、神と全く合一し、茲に靈の生命を全うす。

されば吾人は耶穌基督によりて、神につき、人につき、神人合一につき、愛の生活につき、全然新たなる知を與へられ、一には喜悅、安心、平和を得、二には吾人の向ふべき所を知り、精神非常なる激揚を來たし、活動を促さるゝと共に、更に耶穌基督より其の人格の中に充つる聖と平和と愛とを吾人の人格に注ぎ入れられ、之に由りて吾人の質を化せられ、新しきものとせられ、神の子たるの實を有するものとせられ、茲に神を愛し、神に事へ、神と共に生き動き在るものとなり、全く自然界の羈束より脱出し、罪と其の結果とより免かれ、茲に神の子として、天國に在る祝福を今生未來永遠に享受し、全く救はるゝことを得るなり。

基督の事業に於ける十字架の地位は如何。余輩の謂ふ如くならば十字架は何等の價なきものとなるか。否々。十字架は勿論古來神學者が唱へ來りし如き意義のものに非ず。神は世の人の罰を基督に嫁して十字架上に殺したりとか、又は神は罪の恐ろしさを示さんため、基督を十字架につけて、其の政治の威嚴を保ちたりとかいふ思想は、今日に於て何人も信じ得べからず。然れども其によつて基督の死が無意義となりたりとは決して思ふべからざるなり。基督の死は基督の生涯の最も高く最も力ある一形相なり。もし十字架の死なかりしならば、基督の救拯は或は徹底的の能力なかりしやも知るべからず。何故に然るか。

一。に基督の活動は十字架に於て窮極し其の結論をなせり。彼の生涯を見れば、萬端が暗々裡に十字架を指さして進めり。彼は教訓をもなし、恵み深き行をもなし、凡て人を罪より歸して神に合はさんために苦心盡力せり。彼は息まず眠らず食はず、其の靈を之に向つて凝集したり。彼は有てる物をば與へ、及ぶ限りの力をば出だしたり。されど人を救ふには尙多くを要しぬ。人は改まらず、世は動かざるなり。基督は茲に生命をも捐てざるべからざるを見たり。何となれば敵對は漸く激しくして、死の影は

早くも地平線上に現はれ來りたればなり。彼は此の影を見て避易せしか、若し之を避けんとせば、自ら其の活動を控ゆればよし。新らしき福音について沈黙し、新しき運動より手を引かば、彼は自己を安全にするを得しや明なり。然も彼は人を愛したり。人を愛すれば之を其の破滅に委する能はざりき。茲を以て其の活動を續けたり。茲を以て十字架にかけられたり。パウロ曰く夫れ義人のために死ぬる者殆ど稀なり、仁者の爲には死ぬる事を厭はざる者もやあらん、されど基督は我等の尙罪人たる時我等のために死にたまへり(羅馬書 五ノ七)。基督は其の人格を働かすためには十字架にかゝらざるを得ざりき。此故に十字架は彼の生涯をこゝに集結し、彼の活動をこゝに燒點に歸せしめたるもの。十字架を見るとき、耶穌一生の意義は分明に見られ、耶穌の人格は全體を知らる。十字架此の故に尊し。

二。には十字架は單に耶穌自身の人格を現はし、其の愛を凝集的に實現せるのみならず、實に神の愛を現はせり。パウロ曰く神は之に由て其の愛を顯はし給ふ(羅馬書 五ノ八)。即ち之に由て神の愛は顯はれたり。基督は自ら天父を最もよく知り、天父と心全く合ひ、天父の意志己れに於て動きつゝありと意識したり。天父は人の一人の亡ぶるを

も欲せず、百匹の羊を有する牧者が其一匹の迷ふ時、之を尋ねて尋ね出だすまでは已まざるが如く、之を己れに歸さんとして苦心し活動せるを感じ、自らは此の神の活動に一致し、神と共に活動せるものなりと感じ、我が來るは義なる人を招かんために非ず、罪ある人を招きて悔い改めさせんためなりと謂へり。故に自ら活動して終に十字架に到着したる時には、彼は自己の周囲の味方も弟子も既に茲には己に従ひ得ず、己れは唯だ一人にて之に上らざるべからざるを見出したれども、神は己れと共に在りて、己と共に十字架につけるを見たるべし。何となれば己れは神と共に動きつゝ此の十字架に到りしなれば、己れが十字架にかゝれるは即ち神がかかれるものなればなり。彼は十字架にかゝれる時、己れと共に神のかゝれるを感じて己まざりしなるべし。實に神は基督と共に十字架にかゝりしならざるべからず。神の中には人を愛する愛燃ゆ。此の愛は十字架をも辭せず、人十字架にかゝればかゝりしなり。基督の木十字架は即ちこの靈なる十字架を表現せるものに外ならず。神の中には十字架あり、其が基督の一生に於て現はれしなり。約翰黙示録には、神の中には永遠の羔ありとあり(五)まことに犠牲として屠らるゝ羔、無限の神の中に永遠より存在し、人のために死ぬるも

のあるなり。十字架は即ち神のこの性、また此の活動の現はれたるものならずや。基督が之に一致し、之と同じくなりたるものに非ずや。十字架は神の愛と其の活動を現はす。此故に尊し。

以上の二點は神の愛基督の愛を示せることなれば、此は力強しとしても、唯だ人を救へ人を刺激するのみ。人は十字架を仰いで一方に神の愛を感じ、基督の恵を感じ、罪ある己れのために、神はかくまで苦心し、基督は斯くまで勞せることを見て、感奮興起し、己れを神に委せ、之に従ふを勉むるに至るべく、他方には自己の罪かくまで神を苦しめ神の子を痛むるを見て、恐れ悔い、心を翻へして神に歸るに至るべし。然れども其のみにては尙弱し。救は十分ならざる也。然るに三に基督の十字架の死は基督の活動そのものなるが故に力強く人を動かして神に歸らしむ。凡て人格は活動に於て其力を最も多く發揮す。例へば茲に一個の善人ありたりとて、其が極めて靜寂平座せば、何程の活力を發揮して他人を動かすや。勿論幾分の感化は常に發しつゝ、あらんも、其は多寡の見えたるものなり。然るに或場合他の人窮地に陥り將に滅びんとするとき、其の善人起て身を挺んで自ら死を冒して之を救ふとせよ。其の善人の人格は茲に活

動したるにて、此の活動には非常の力あり。此の活動に接したるものは、此の活動の中に生きて動ける其の人格の力に打たれ、神秘的に其の力を注ぎ入れられ、忽ち精神に變化を來たし、新らしき進歩を始むるに至るなり。此は第二者即ち其の救はるゝ本人のみならず、傍觀者と雖も、茲に動ける此の神秘的の力には化せられざるを得ざるなり。基督の一生は皆な人格の活動にして、何れの事業行爲に接しても基督の人格の力の漂搖浮動を感じ、之に打たれざるは無けれども、然も其の生命を捐て、苦痛極まれり。十字架にかゝれるといふ行動に至ては、其の人格は茲に最も高壓的に活動し、之に接する者は大電撃の如き感化を感せずして已む能はざるなり。此故に基督の十字架の死は吾人に取りて最も重要なものなり。

十字架此故に尊し。パウロは十字架の教は亡ぶる者には愚なるもの、我等救はるゝ者には神の方たるなりと言へり。又我等は十字架につけられし基督を宣べ傳ふ、召されたる者には基督は神の大能又智慧なりと言へり(哥林多前書一ノ十八ト二四)。パウロは自己の経験により、又時代の基督信徒の經驗を見、基督教の人を救ふ所以のものは實に基督と其の十字架に在るを知り、コリントに行きし時にも、言と智慧の美なるを以て神のことを

證せんとはせず、耶穌基督と其の十字架につけられし事の外は何をも知るまじと決心したり(哥林多前書二ノ一ト二)。此の結論は誤らざりき。パウロの前にも後にも、基督教は既に種々の型となり居たり。ヤコブ一派の宗教ありき。後にはエビオニムとなりしものもあり。此等は基督を唯だ「メシア」と仰ぐに傾きたり。更に少しく後にはグノスチコス派の基督教もありき。基督は神より發出したるものといひ、又神の假現したるものといひたり。此等は理論の簡明なるに於て又思想の美なるに於てパウロ型の基督教を凌駕し居たり。然れども其等は能力なかりき。茲を以て教會はパウロ型の宗教を取て正統の基督教となしぬ。パウロ型の基督教に斯く力ありたるは、他にも理由あることなれども、其の大なる一は十字架を重んじ、之に力を見出だしたるに在り。實に十字架は力なり。

然れども在來の十字架信仰は誤れり。基督十字架に死したるが故に、我等の罰除かるといふは、道理に於て誤れり。正義なる神が基督の義を事實義ならざる惡人に嫁して之を赦すといふことあり得べからず。又天父が無罪の基督に惡人の罪を嫁して之を罰するとか、惡人の見せしめに之を十字架にかくるとか、在り得べからず。此れ常識上明なる

ことなり。近代神の愛を思ふこと益々加はるに従ひ、此の思想はいよゝ棄てられて顧みられざるに至れるは宜なり。然かのみならず、此の信仰は極めて有害なり。基督の救拯を唯だ形式の上のこととし、罰もしくは罰に代るものを基督が受けて其に由て人は赦されたりといふなれば、基督の救は吾人の靈魂の中にまでは少しも及び居らざるなり。其故に此の種の信仰を有するものは事實上甚だ感服に價せぬこと多し。特に劣等の品性の人種が此の信仰の基督教を奉るときは、不信者よりも却つて悪しきまゝにて終るもの多し。此れ基督我に代つて罰を受けて我は赦され罪の結果より免るゝなりと信するが故に、全く安心して横着となり、悪を行ふて平然たるに由る。彼等は神の靈に充たされ、基督の内性を分與せらるゝとをば忘れ了れる也。我國の在來の基督教會の如きは、此信仰に中毒せられ居れると一方ならず、之が爲に信者の精神に新生命なく、其の生活に聖なく、其の心に清新の氣なし。幾年も經ざるに進歩の勢死止せるは當然なり。我國の信徒は須らく此の陳套にして有害なる信仰の形式より脱出し、最も靈的にして、最も能力ある基督の眞救拯を受け、自ら眞の神の子の祝福を一杯に享受し、教勢に活力進歩あらしめざるべからず。

さればとて基督の事業が神の方に影響する所なかりしかと言へば、神の方に大いに影響せしと思はざるを得ず。神は基督の事業に由て必ず満足したるべし。斯く言はば或は直ちに余輩を以て舊式の満足説を保守するものとなさん。然れどよく前後の所説を見よ。總じて宗教の事に對しては盲人の盲評多きこそ遺憾なれ。倫理學者や法學者などは、其の専門の學科を研究する内に、西洋の大家の宗教の學說に對する斷片的の批評などを讀み、其を鵜呑みにして直ちに自己の接する凡ての議論や學說に臨むが故に、救拯觀念に付ても、或は基督の事業は神の方に影響すとか、神を満足せしむとか、罪の結果より人を救ふとかいふ語あらば、直ちに之を以て法律説なり満足説なり代罰説なりと解し、其方に分類し了らんとするなり。彼等は唯だ文字のみを知りて内容を知らず、故に法律説といひ満足説といふは如何なるものか、感化説といふは如何なるものかを知らず、満足といふことさへ言はず、實は感化説を唱へ居ても直ちに之を満足説なりとして是とか非とか斷定を下し了るなり。特に感化説の如きに付ては、極めて淺薄なる意味の感化と心得居るを以て、其の思ふ所の感化を唱へ居らざれば直ちに之を非感化説の内に分類せんとするなり。此は強ち他の學問の人々のみならず、基督

教神學を少しく心得居るものも同じ過に陥り居れり。斯くの如き人々には、余が先に罪には罰ありと言ひしをも、必ず反對すべきこと、思はるゝならんが、罰といふ語の意義に付て余の定義したる所を熟考せば、余の説く所を首肯せざるを得ざるを感ずるならん。總じて形式に囚はれず、内容を見て人の思想や信仰は是非すべきものなり。さて基督の事業が神に影響し神を満足せしめしといふは何故か。此點はもはや吾人の經驗には非ず。推論なり。斷定なり。基督の事業は人を動かすてふことは吾人の經驗に依る綜合結論なれど、神を動かす方は然らず。さはいへ之なかるべからず。神の内は勿論永遠に平和ならざるべからず。苟も激搖あらば其は無限者らしからぬなり。然かあれど神は靈なり。無差別平等にして意識なきものに非ざる限り、經驗なかるべからず。故に若し神の性格に反し、従つて天地を破壊する如き行爲に對しては不満を感ぜざるべからず。若し之なくば勿論善もなく惡もなく、人は何を爲しても其の行に價値の別あらざるなり。神は必ず善を喜び惡を痛むべし。されば人の罪に對しては神は之を痛み之を悲み之がために不満ならざるべからず。特に神は人の一人一人を注意し愛護し、之に付て美はしき理想を書き居るべし。然るに人この理想に達せざるの

みならず、却て反對の方向に意志を動かし罪を犯す、神は慈愛深き親が愛兒の理想に反し行くに付て憂ひ懼るる如き情を以て人を視ると考へざるを得ず。神の此の不満永久に和げらるゝことなきか、基督の十字架は之に付て必ず影響したるべしと思はる。其には二方面の理由あり。其一は神は基督の事業を客觀的のものとして満足を感じるならん。基督は人なり。人たる基督は他人を愛し、之がために十字架につきたり。此れ實に神の満足する所なるべし。神は斯くの如き愛が人類の中に現はれんことを理想し、絶えず之を導きたるべし。されど他人に由て現はれざりしもの、基督に於て全く成就せり。神に満足なからんや。之と共に基督は人なるに、人なる基督は上に向つては神に對する態度を完うしたり。基督は全く神に委せ神に柔順なりき。神は基督をして人を救はしめ、世を回復せしめんとせしかば、基督は此の意を承け、死に至るまで神の心に從ひたり。此れ地に於て子道が始めて完成したるものなり。基督は人なれば基督がかくの如きは人類の中に子道の完成したる次第なり。其までは人に對する神の父道のみ完くして、子道の甚だしく缺け居たるに、基督の十字架を以て結べる生活に於て此の完成を見る。神に満足なからんや。此の二つは神が基督の事業を客觀的の

ものとして、之に由て感すべき満足なり。されど第二の方面あり。即ち神は基督の事業を主觀的に見、之を自己の事業として之に由て満足を感じずべし。親は子のために自ら凡ての物を與へ、終に生命を與へ、之に由て満足す。親の心は茲にまで至らざれば満足せず。神は自ら活動し、基督の中に在て活動し、人を救ふために活動せり。基督の死は基督の自己否定、基督の自己犠牲なれども、此は又神の自己犠牲なり。神の心の罪のために苦み、之がために熱し、之がために活動するに非ずんば、基督の活動あるべからず。基督は神の心の波と共に上下せる者なり。されば基督が十字架にかゝり、神の人を愛する活動が焼點を發揮したるに於ては、神は茲に苦痛の満足を感じずべし。然り最も壯嚴なる最も清き最も深き満足を感じずべし。

されば基督の事業は神の方に影響し神を満足せしむと思はざるを得ず。誰か此の思想を無理といふや。在來の人々は勿論今尙茲には二つの誤謬によりて思想の混亂せるものあり。若し夫れ深く考へなば、基督を以て神の客觀たるもの、即ち普通の人にして神に對して立てるものとせば、基督のなす所が神に満足を與ふべきは思ひ易きことならずや。然るに基督を純然たる人となす人が却つて神の満足てふことを絶對的に

否定せんとするは矛盾なり。次に基督を以て全く神自身となし、若くは神の中の三位の第二位となさば、基督を十字架にかけて神が満足するといふは思ひ難きことならずや。然るに三位一體論者が常に法律満足説を唱ふ。余輩は兩者を共に成立し難き基礎の上に立てる思想の人々とせざるを得ず。余輩の思想の出發點と其の徑路は全く是等と反す。余輩は基督を人として、此の人が人を愛し、神に従ふ生活を送り、終に十字架にまで至りたるは必ず神を満足せしめしむるべく、又神は自ら人を救はんため活動して預言者を起し基督を起し、基督と共に至大の苦を感じて人を救ふの途を全うし、茲に満足を感じるならんと思ふなり。

然り、然れども神は先づ満足したるが故に、人の罪を赦して之を救ふには非ず、基督の死に於て人の理想現はれ、自らの人を救ふ途確立せるが故に満足するなり。故に神が一たび満足したる故、人の罪は過去のものも未來のものも凡て赦されたりと考ふべからず。人が基督の生活を再現することに由て神を満足せしむるなり。基督の死は人を影響して神に歸らしむ。故に神の満足あり。怒れる神を動かして人を赦さしむるに非ず。十字架そのものがもはや神の救の活動の結果なり。されば在來の意味に於け

る満足説は到底吾人の考ふる能はざる所なり。

基督の事業は人類の救なり。基督は其の教訓と生活の全體にて、人に神を示し、人を示し、神人の關係を示し、人の心を開き、又之を刺激し、更に其の聖なる愛なる生命を注ぎ入れて人の靈を徹底透化し、之を新人となし神の子となし、斯くて永遠の祝福を與ふるなり。

基督の事業は以上の如し。吾人は彼の事業の性質の精神的なるを見、彼の事業の宏大にして、民族により個人により、之を意識する重心を異にし、種々の觀念を生じて、其の中には正しき分子も誤れる要素も混淆せることを見、眞に基督の事業を見れば、彼は教訓を以て、實行を以て、生活全體を以て活動し、又其の靈を以て直接に活動し、人に新らしき宗教上の知を與へ、又人に自己の有する生命を直接に分與して、人の靈魂を自然界より、罪より、罪の結果より引き出だし、之を神の子とし、永遠に天國の祝福に充實せしむることを見たり。

結 論

如何に基督觀を結び得るか——第一、神なる基督——經驗に入れる基督——基督の人格全體についての觀念——一、基督の開示の無比——二、基督の人格の完全——三、久存の基督の事實——基督は單なる人か——人以上とする解釋——基督を神とせざるを得ず——基督の預在——思想的預在——二つの基督なし——基督は神也——是は解釋也——基督は神として拜せらるべし——第二、救主なる基督——下より見たる基督——基督は人類を救へり——吾人自己の經驗——基督の救の力——基督を信ぜよ——基督を發揚せよ。

吾人は耶穌の歴史に存在したることを確め、其の人格は世界の歴史に發展して、基督教文明を造りたるを見、今尙吾人に向つて活動しつゝあることを明にし、此の史的の耶穌と久存の基督とは、同一人格なるが、之を観るときは、彼は全く人にして、正則の人、また完全の人なること顯はれ居り、而して又彼は神の活動して顯現するによりて現はれたる人格なるを見、かくの如き基督は人類の世界に活動して、人の靈の生命を救ひ、之を神の子となし、神と合一せしめたるを見たり。斯く見來れる吾人は、最後に基督に關する觀念の大體を如何に結び得るか。余は茲に至りて、基督は上より見ら

る、時は神の獨子なり、下より見るときは『メシア』即ち救主なりと結論せんと欲す。

五十四

第一 神なる基督

吾人は此の著に於て常に経験を本とし人を本とし、之と交渉せる限りに於て萬事を觀たり。経験を離れて純然思辯の境に入り論理のみに由て事を考へんとせざりしなり。吾人の思想の法式は殆ど科學的なりき。故に基督を考ふるに當りても、希臘師父以來、否約翰傳著者以來、今日の哲學者神學者に至るまで、常套的に襲ひ來りたる法式により、先づ神の『ロゴス』又は三位一體を前定し、神の子のインカーネーション肉生の理を説き、而して耶穌基督は即ち其なりと斷定し、基督を神の子として觀念するが如き方針に出でざりしなり。吾人は吾人が實際経験をせる基督を見たり。彼は吾人と同じ人として曾て歴史の中に生きたり、彼は世界の歴史を造る精神として發展し來れり、彼は吾人の内部に活動して事實の上に其の結果を現出しつゝあることを見たり。斯くの如き吾人の経験に入る基督は吾人の経験を綜合すれば人の正則完全なるものなるを思想したり。又吾人の経験をせる基督は事實上神の内性の顯現なるを見たり。此點も神の内性は斯くくの

物なりと初より前定し置きて、之を基督の人格に結び着けたるに非ず、却つて倒に基督の人格の事實を見て、此れ神の内性の顯現ならざるべからず、神の内性について此れ以上を思想する能はずとなし、神には顯現あるべく、人格に顯現して其の頂點に達すべしと考へたるなり。基督の事業についても吾人の経験をせる所を挙げ、其の性質を究めしのみ。基督が永遠の前より在て宇宙の創造に與り、又永遠の後に在て、世界を審判すといふ如き種類の思想は、吾人の経験と交渉なき思辯なるが故に、之に付て何等考ふる所なかりしなり。吾人は歴史及び歴史以後の耶穌基督を知り、之に付て觀念せり。故に吾人には耶穌は即ち基督にして、二者は少しの斷間もなき同一人格なりしなり。

然れども歴史及び歴史以後の基督は、吾人をして其の人格の大體に付て如何なる觀念を結ばしむるか。吾人は基督の人格の内面を見、其の事業を見たり。然らば凡て斯くして吾人に経験をせらるゝ基督は何者なるか。此れは経験其物ならず、されど経験の解釋なり、経験をより立てらるゝ觀念なり。

先づ吾人は基督の宗教的開示の無比絶倫なるを見たり。彼は學校に學びしに非ず、

五十五

また多年森林曠野に退いて鍛錬思索せしに非ず。而して其の神について、人について、神人の關係に付て、人々の關係に付て開示せる所、悉く人の論理に由て闡明する所と合ひ、何よりも人生の原理に適合し、世界の實際に和合せり。即ち人を救ひ世を濟ふものなり。世には他にも幾多の開示ありと雖も、基督の開示の如く能力あるものあらざるなり。如何に見るも彼は大天才より以下のものに非ず。單に大天才たるに止まらず、無二の大天才たるは確なり。彼の宗教は彼を無二の大天才とせずしては解すべからず。次に吾人は基督の人格の完全を見たり。彼の人格は何時何所に再現しても、如何なる個人や事情に敷衍適用しても滯る所なく行はれ、積極的には個人を大發展に導き、社會に大進歩を來たすを見たり。此點に於ても基督は無二なり。實際上他に斯くの如き人何所に在りや。

此等の點より考ふるときは、基督は無二にして従つて人類の匹を絶するを見ざるを得ず。無二といふことは實は一の奇異なり。特に才の上のみならず、人格の内容に於ての無二はもはや人事の常に非ず、否人間界にまたと見るべからざる奇異なり。然るに此事既に存す。如何に之を解すべきか。古より基督信徒は此等の理由によりて耶穌

を永遠の前より存在せし神の「ロゴス」又は神の中の第二位人格が、人となりて此世に生れしなりと解釋せしなり。此れ決して一概に排し去るべきことに非ず。無二の人格が存在せしといふ奇異を許すならば、もはや論理上之を然か解釋するを否む能はざるなり。何となれば自然的には人類歴史の中央に然かく無二の人格の現はるといふこと稽ふべからず。是には自然以上の理由なかるべからずとすること當然なればなり。若し吾人が今日の如く人の人格の單位といふことを嚴密に思はず、耶穌の精神の底に在る意志即ち自我の獨立なることを見ること弱からば、基督の開示の大と其の力と、又基督の人格の完全とを見ること、直ちに之を神の人となりたるものと解せざるを得ざるなり。若し形而上的に考ふれば、神が人となるといふことは困難なることに非ず。ヘーゲル以下の論法を以てすれば、此れ當然のことなればなり。然れどもたゞ此等の點より考へたる所のみにては、耶穌の事實に向つて自然的解釋を施し得べし。固より幾分の無理を感ずと雖も、尙耶穌を至大の天才、完全の人格とし、唯だ世界に二つなく現はれたるのみとして見ることを得べし。

されど第三に久存の基督の事實あり。基督は今日に至るまで盛に活動し、現在其の

救を成就し、信徒の經驗に入りつゝあり。此の基督に向つてはもはや自然的の説明は加へられざるなり。勿論之を自然的に解釋する途なきに非ず、唯だ不隨なるのみ。自然的の途の解釋を擧ぐれば、一には此の活動は基督の人格現在して直接に行ひつゝあるに非ず、基督は千九百年の昔に在りて世を去りたる人格なれど、爾後基督信徒之を追想し、之を學び來れるによりて今日尙此の力あるなりといふ是れなり。此れ最も常識的の解釋なれども、また頗る尋常の經驗に反したるものなり。尋常の經驗にては古人の模倣は斯くの如き力なし。罪人が一變して聖者となる如きことは殆ど望むべからず。特に年代を隔つること頗る遠く、人種を異にし、事情を全く異にしつゝ、斯くの如きことは有り得べからず。更に又其の古人を神として崇拜するに於ては、其の人格は既に自己より超絶し去つて、唯だ崇拜の對象として立ち、自己の内部を化すること至て薄弱なり。斯くの如き模倣の力は一代か二代の間にのみ盛にして、其より以後は唯だ觀念として幾分の影響をなすにすぎず、人格直接の活動と見ゆる生きて血の出づるばかりなる感化を起すことあらざるなり。久存の基督の事實に關する自然的解釋の二としは、之を群衆精神の力に歸するを得べし。基督自身は過去の人なり。されど其の弟子

より以後今日に至るまで、其の團體は基督を仰ぎ、其の精神を繼承し、盛に之を思想し意志し來れり。教會には其の時代々々の人々の精神的活動充溢せるが故に、世々人を救ふの力あるなりと。此れは最も力ある解釋にして、確に眞理なるを感ず。教會の精神盛なる時最も人を救ふ力あるを見よ。然れども此れまた餘りに普通の經驗と異なる現象なり。斯くの如き盛なる基督の主義や觀念を有することが、基督の存在を離れて果して何時まで續き得べきか。斯くの如き主義や觀念の力は中心を遠ざかるに従つて稀薄となるものなり。基督在世の時、或は其の弟子の時には、其の社中に觸るゝものは直ちに其の感化の勢力を感じて之に服せしならんが、其が何時までも續くことは有り得べからず。或は基督教會には人物續出せしが故に、基督の力ならで其等後生の人物の力に由て、各時代に大なる精神力ある社中を造り居しなりと言はんも、代々其等の大なる人物を出だし得るは、即ち更に其の人物より以上の大人物の力あるが故なり。基督教の起りし猶太は必ずしも大人物のみの國に非ず。基督の弟子等は匹夫野人のみ。其後とても久しき間他の結社學派に比して基督教會は人物豊富を誇り得るものに非ず、却つて常に壓倒せられ卑しめられ居しなり。故に代々の基督教團體もし

くは其の中の人物の力によりてのみ、基督教の代々の救拯力が存在すと見るは大いなる背理なり。基督自身は確に存在す。

基督自身は久しく存在し活動す。此の事實を認むるときは此の基督に向つて如何なる解釋を加ふべきか。基督は人として斯く久存するか。吾人は先に久存の基督は人なりと言へり。然り人なり。然れども其の人といふは人性の人格といふ意味なるは言ふまでもなし。人性と異りたる内性の存在物として久存するに非ず、徹頭徹尾人として存在するに外ならず。されどよし人性の人格として存在しても、既に久存する以上之を單なる人と見るを得るか。單なる人は久存せざるなり。否單に永く存在はせんも、活動せざるなり。父母祖父母は吾人に最も近しと雖も、然も活動して存在せざるなり。或は此點を近時の心靈研究の結果によりて説明せんとする企ても試みらるべし。心靈研究者は實驗によりて死者の靈は尙吾人の周圍に存在し、曾て世に在りし時と多く變らざる状態を以て生き、適當の媒介あらば、之に由て吾人に交通するを確めたりと主張す。或はさる事あるも知れず。茲を以て耶穌基督も過去の人なれど、其の世人を愛するの靈は見えざる所に残り居れりと考ふるを得ますべし。されど心靈の現象の如き

は未だ多くの人によりて確認せられざる所に屬し、以て證明とするに足らず。然かのみならず靈魂が死後この世に存在するとしても、唯だ存在するといふのみにては久存の基督の解釋とならず。何となれば基督は盛に活動して人を救ひつゝあればなり。或は死者の生者に交通するあるは即ち活動しつゝある所以なれば、凡ての死者みな活動せり、基督の活動は此の理なりと言はれもせんが、其は極めて危ふき理路なり。心靈研究者の示す所の死者の交通の如き微弱且つ誤謬多き活動を以て、如何なる影響を現世に生ける強き人間に及ぼし、之を罪より救ひ得んや。然かのみならず、創世以來の無数の善人悪人が存在して、靈界に無數の波を起し居れるに、獨り基督の人格の活動のみが、其の中にて他を壓して力を現はし、大なる結果を起すといふ事實に付ては、更に他の説明を與へざるを得ざることを得ざるなり。故に久存の基督は單に人としては見難きなり。

此に於て久存の基督は單に人に非ず、人以上の存在ならざるべからず。余は上來單に人として耶穌を説き來れり。耶穌をば人として見て萬事足れり。特に耶穌を人以上とする必要もなきなり。特に余の如きは事實上何等の教派にも學派にも屬せず、基督